Prologue

滄々たる海。

南下する北極圏の潮は寒々とした紺にも近い蒼さ。島が泛ぶ。

大きな島だ。東西に三〇〇〇㎞・南北に二〇〇〇㎞。

西大陸（オエステ）から見て北西に広がるスカンディーヌ海の北緯二十五

度から三十五度の位置。決して日射の弱い国ではない。

島の西部は温暖で乾燥し、潅木が繁る。東部は広大な砂漠地帯だ。中央は黒い森と白い巨岩の丘陵、豊かな谷間の平原、銀嶺の山岳地帯である。

数千年に亘って群雄割拠し、あまりにも長く争闘していたため、古名は忘れ去られ、いつしかただウォリヤー・ワールドと呼ばれるのみとなっていた。

数百の王はやがて淘汰され、三十六の王となるが、和平統一は夢のまた夢。長き戦乱に人の心は荒廃し、正義や真実といった価値は薄れ、人は利に走

り、裏切りの又裏切りなど初歩の初歩、この世に拠るべき柱なしと見切ってニヒリズムに奔り、ただ武のみを頼む狂暴君クロード王は、何度も命を狙われ、何度も同盟を覆し、友を裏切り、兄弟を殺し、家族を犠牲にし、こどもをも見捨て、信仰を変え、信念を翻し、大いに勝利しては大いに敗北し、変遷を重ね、生き延びることの虚しさを覚えつつも、喪われる怯えに我武者羅に奔り、何もかも奪い去られたと観ぜられた無空の果て、何かに誘(いざな)われ、旅に出た。

聖なる地を廻り、眼を啓くとき、彼の容貌は一変する。そして歴史に残る

あの有名な祈願をする。

美々しい黒髪を豊かに波打たせ、王クロードは炎のように魂を滾らせて天を衝き、神に切に祈った。

「どうかこの島に統一を。この大地に永遠の平和を」

島の神イヴリャドはクロード王の光燦たる魂魄に驚嘆し、深く眉を翳し、これを受容する。

「そちの願いは聞き入れた。

ただし」

過酷なる北方の神は言葉を続けた、

「そちは自己の繁栄のためではなく、万民の繁栄ために希ったのであるから、そち自身が帝となって繁栄することは赦さん。

そちは最も卑しい身分に堕ちる。それでよいか」

クロードは爽やかに微笑むのであった。

「望むところです。何を厭うことがありましょうか。我が希うところは、終わることなき平和のみ」

神は荘厳にうなずく。

「ならば、汝の願い、叶えようぞ。
神の権威を以て、この地に大いなる統一を与える。
しかし、独りの王に治めさせることはない。権力を握る者は必ずや眼がくらむからだ。神がそのように創ったのだから、さようにならぬはずがない。
三十六の王国を三つの区域に分けて、それぞれを統べる三人の皇帝を示す。
支配の根拠となる奥義は、何人も恣（ほしいまま）にすることができないよう、匣に入れて開けられぬようにする」
「神意に違（たが）うことのないよう、身命の奥底に刻みます」

「皇位継承のときは、この匣を開けて神授の権威を受けるべし。妄りに匣を開けられぬよう、匣をロックする。

このロックを解除するには、三つのパスワードを入れなければならない。このパスワードは、汝の偉業を記念し、汝の精神に準ずるものとしよう。

三つのパスワードは、三皇帝の各々に預ける。自分の皇位継承者だけに知らせてよい。自分の皇位継承者以外には、誰にも教えてはならぬ。

即ち皇帝か、皇位継承者が三つのパスワードを持ち寄らなければ、解除はできない」

神は王を睥睨してつつ、念を押す。

「パスワードは、亡失することなく、跡継ぎに伝えよ。必ず後継者一人にのみ伝えることとせよ。やむなく後継が途絶えしときは、汝の血筋から出せ」

王は尊厳をもって神に応える。

「しかし、そのことは、イヴリャド神よ、あなたから直接、三皇帝にお伝えいただけるものと理解します。我、今日この日から下賤の身となれば」

再び神はうなずく。

「さよう。そのようにいたそう。そして、最後に言おう。匣は難攻不落の不陥落城に封印する。城へ無事に入れるのは、皇帝か、皇位継承者のみだ。そのときも、三つのパスワードがなくてはならない。そうでなければ、不陥落城の恐るべき〝守り〟がその真の姿を見せるであろう。

又三人の皇帝が持つパスワードで開ける以外の方法で、匣を開けようとしても、同じように大いなる災いが降りかかり、いかなる者であろうとも驚嘆

すべき力によって滅ぼされるであろう。

いや、ただ匣の前に立つだけであっても、皇位簒奪をなそうとする者ならば、生存権以外のすべての権利を奪われると知れ。神の盟約違うことなし。人よ、ゆめゆめ忘るるなかれ」

島にクルアール、シューニヤ、アモールの三つの帝国が生まれた。

それぞれの帝国で初代の皇帝となったのは、沙漠の高潔な戦士、流浪の沙門、貧しい芸術家であった。

それぞれの神によって権威を授けられ、突如、運命が変わったのである。
各帝国は各々十二の王国を統治し、大いに繁栄する。
そして太平の裡に、二百五十年が過ぎた。

第1章　雨の日

降りしきる雨の中、歩いていた。

草臥れ切っている。

物象と言えば、音のみ。滴が木の葉に当たる音、頬や肩や胸に当たる音、泥濘を踏み又足を抜くときの〝ぐぷっ、びちゃっ〟という音、さようなものしかない。

眼の前を黒い塗料で塗りつぶされたかのような感覚だ。純黒の闇であった。

他には何もない。

だが、数十m先には〝仲間〟が歩いているはずである。

同じように、疲れ切って。

そして、その数十m先にも、同じように歩いているのだ。その先にも、先の先にも。

たとえば、トムやハック。サムやチャーリーだ。

その気配だけを頼りに進む。

だが、それであっても、闇に長い時間、沈んでいると、自分という存在が

なくなってしまったかのような錯覚を覚えさせられる。息をしているのかどうかすらも、わからなくなる。

そんな中でも、長靴越しに感じる触感と、泥濘に足を差し込むとき、抜くときの音で、自分が今歩いている場所が泥濘道であることがわかる。

間違いなく、街道を歩いているのであった。自分と自分を囲む世界の存在が確かめられる。

我感じるゆえに我あり、だ。

心を清ます。もしも街道を外れて、森の中にでも、迷い込もうものならば、

下草や木の根に足を取られ、低い枝や大木の幹にぶつかり、斃れてしまう。起き上がれないかもしれない。

そうでなくとも、道を喪えば、ついには彷徨ったまま、そこから出られなくなってしまうだろう。

感覚を信じよう。希望が生命だ。生きるということは、未来ということなのだ。

だが、そんな御託はともかく、ハン・グリー・ジグラッドはへとへとだった。

頭で考えても、何のリアリティもなく、もはや憊（つかれき）って、考えることすらままならない。

脚が言うことを聞かない、硬直している。棒のようだ。水気が革を沁み徹り、靴下を濡らし、冷たい。

強靭な肉体も困憊する。意識も怪しい。背負っている大きな荷物には重たい鉄器が入っていた。剣と楯と鎧だ。身につけるときには重さなど感じないが、背負うと肩に食い込むものだ。

ようやく遠くに灯りが見えた。ツタの絡まった吊るし看板も見えてくる。

「あゝ、あれか」

酔いどれの喧騒も聞こえるような気もしてきた。さあ、俺も早く行って芳醇なエールを一杯やろう。泡立つ赤黄金色の飲み物を思い浮かべ、喉を鳴らす。肉汁の滴る炙りソーセージが脳裏を駈け廻り、強い希望が湧く。

村の居酒屋ポワーレはほぼ満員であった。

カウンターの向こうに立っている亭主のマルコは目が合うと、太っちょの巨漢は困惑気味の表情をわざと作り、肩をすくめて見せる。

「お客さん、あっしにもちっともわかりませんよ。ここ数日、毎晩、こんな

感じなんですよ。

いやはや、まいりました。いえ、有り難いんですが、どうしたことでしょう！

常連さん方には申し訳ないし、後から来るお客さん方には『どうかしばしお待ちを、たぶん一時間くらいで・・・まことに申し訳ありません。何しろ、あなた様より先に来ていて、席の空くのをずっと待っているお客さんがもうすでに数名いますので・・・』と言うしかなくて・・・」

ハンは微笑んだ。

「いや、いいんだ。わかってる。
とりあえずエールだけでいい。くれ」
それを聞くとマルコは心の中でつぶやいた。
『そら来た！　またこれだ！　ほとんどの客がまるで申し合わせたようにそう言うんだ。いや、ときどき怒る旦那もいる（それが普通だ。今までなら！）が、いつもとは逆にそれが少数派なんだ。
いったい、どうなっていやがるんだ』
ハンはそんな亭主の想いなど、推し測ろうなどとは夢にも考えず、サーバ

ーの栓をひねって、受け取った木製のジョッキにエールを注ぎ、泥だらけになっている出入り口の廊下にしゃがんだ。

「あゝ、何てうまいんだ。生き返ったぜ」

フルーティーな味わい、香りがいくつも絡み合い、芳醇で、深みのあるコク。

ここのエールはホップを使っていた。その苦味で麦芽の甘味との絶妙なバランスをなすのだ。ホップを使用しない場合は、ハーブと香辛料を混ぜたグルートを麦汁で茹でて、苦味をつける。

ハンは旅の疲れをいやすようにゆっくり味わった。

血流が息を吹き返し、諸細胞に生命の息吹を与え、からだの隅々が甦る感じがする。

冷たい入り口の廊下であっても外に比べれば何と暖かいことか！　からだ中の筋肉が弛緩した。指先がじんわり暖まる。

カウンターを背にして寄りかかり、ビールの陶製ジョッキがならんだ棚に向かい合って、それらのさまざまな意匠をぼんやり眺める。

そこは常連客用のジョッキ棚だった。常連はそこでジョッキを手に取り、

カウンターに置かれたサーバーからエールを注いで席に着くか、カウンターに肘を掛けて立ち飲みするのだ。

しゃがんで順番を待つ連中は皆、そうやってエールをちびちびやりながら待った。

そうこうしている間に次の客が入って来た。

「いや、いいんだ。わかってる。

とりあえずエールだけでいい。くれ」

ハンは微笑む。これで仲間だとわかるのだ。

カウンターの中では生ハムの注文を受けたマルコが悲鳴を上げていた。もう原木（腿足）を6本くらい削ってしまっているのだ。

十何本も作り置きしておくものではない。

「あゝ、ちくしょう、どうなっていやがるんだい！」

その夜、もし月が出ていたら、聳えるウォール山の絶壁が見えていたに違いない。

ハンは農家の納屋に勝手に忍び込んで藁草の上に眠ると、早朝、夜明け前の靄の中で森に隠れ、絶壁を見上げた。

遙か頭上に第一の砦が見える。その位置を頭に叩き込んだ。

「ハンか？」

後から声が聞こえた。

「そう言うおまえはリック」

「あゝ、そうだ、遂に来たな」

「ああ、今のうちに飯でも食ってよく眠ろう」

「暗くなったらすぐに登りはじめなくちゃな。近くでトムを見たよ」

「そうか。俺も昨晩、ポワーレでかなりの数を見た。皆、周辺にいるはずさ」

「そう言えば、あのとき奇妙な男を見たな」
「奇妙な男？」
「外国人だ。島の人間じゃない。ノルテ（北大陸）の男だった」
ハンはあゝわかったよという顔になって、
「それはリュージュだ。リュージュ・イシュペクト・ノームイ。そうか、まだいたか。だが、奴は特殊任務を与えられ、この作戦からは離脱するはずだ」
「ふん。そうなのか。その方がいい。
気に入らない、すかした奴だった。ニヒリスト気取りって感じだったな」

「奴はノルテでは高給取りの傭兵だ。スサヴィ侯国の少尉で神聖シルヴィエ帝国を相手によく闘って勇名を馳せたが、突如、祖国を裏切ってシルヴィエに渉り、その帝国軍の将校になった」
「ノルテの超大国シルヴィエか・・・」
「だが、またも転身し、ノルテ広域で活動する傭兵になった」
「何を考えているかわからないな」
「そうさ。ニヒリストの考えていることなど、俺にはわからん。希望を喪って得することなど何もない」

第2章　皇帝薨去（こうきょ）

繻子の布団に深々と包まれ、白き豊かな老鬚の帝の閉じたまぶたが開くことはもはやない。シューニャ帝国第十一代皇帝ブドゥ・イクは薨去した。

いつものように（飲むかどうかに関わらず）お茶を運び、皇帝がすでに息をしていないことに気がついた家令のシューは意識を喪いそうになる。

かなり以前から病身で、長くはないとも言われていたが、あまりに突然であった。

その日、繁文縟礼なる百官の集う帝都モスゴーのアルカト宮殿にて、呼び集められていた十二人の王は驚愕する。無理もなかった。

皇帝の後継者となる者の発表を明日に控えていたそんな日である。

しかし、皇帝は言わぬままに世を去ってしまった。

いや、本来、後継者は決まっていた。確認する必要もなく、皇太子ユーネス・イクがいたのである。

しかし、この若者は皇帝の死の十七日前に行方不明となっていた。モルグルの森で狩りをしている最中である。供の者らも消えていた。皇太子の片方の靴だけが遺され、終に見つからなかったのである。

賢帝と言われた父ブドゥの血を継いで、知に長けた皇太子は人に憎まれ、伯父や実弟や実の姉がその皇位を奪おうと命すらをも狙っていると囁かれていたため、失踪の直後にはさまざまな噂が飛び交った。実際、未だに犯人の見つからぬ毒殺未遂事件も、過去にはあったのである。だが、逆に皇太子が皇位を他に譲られることを懼れて、皇帝を暗殺するのではという噂もあっ

たので、実際はどうなのか定め難くもある。

帝国の警吏や諜報部や兵士や役人らが手を尽くし、皇太子の行方を捜索をした。

しかし、執政官は数日を経ずして死んだものと断定する。

繊細だった皇帝は烈しい衝撃を受け、まるで廃人のように無気力になってしまった。彼の息子、皇太子は彼に瓜二つで、皇帝の生き甲斐そのものであったから。すべてを奪われてしまったのである。

「今にして思えば、帝位など何ほどのことがあろう。

息子の死をすら救うことのできぬ只の人にあるというのに。人が敬い褒め囃すも、それは皆、おのれの利益のため、砂上の楼閣にしかず。いにしえのクロード王の想いも今はわかろうというものぞ」

だが、皇帝薨去後、もっと恐ろしいことがわかった。

命の長くないことを予期した皇帝はすでに皇太子にパスワードを渡してしまっていたらしいということである。

皇帝の死後、最初に懸念されたことは実はパスワードであった。しかし探しても見つからない。

「何ということだ」

執政官ロマヌフは俳優のように叫んだ。

劇的にその土色で老婆のような顔をさらに埴色にし、皇帝の傍に常にいた家令のシューを呼びつけて問い質す。

老いて痩せて何もかも白いシューは弱々しく、

「は、はっきり見たり聞いたりしたわけではなかったのですが、どうも皇太子陛下がおいでのときに、それを託しておいでのように見聞きいたしました」

大変なことになった。執政官は周囲に頻りのそう言って廻る。

彼は検察庁長官や近衛将軍とともに調査を始め、混乱の収拾とに当たった。だが、何者かの暗殺であろうという疑いが立てられただけで、それ以上何も判明しないまま、今日に至っている。

パスワードを奪うためにさらわれたのではないかと言う者もいたが、それは考えにくいことであった。

皇太子の手に渡ったことを知り得るはずがないからである。

唯一の進展と言えば、黄土色の頭巾つきのマントで顔とからだを覆った謎の人物が「襲ったのはあの森番だ」という、ただ言葉だけで何の証拠もない、

讒言としか言いようがない告発をし、その上に、モリゾンの住む丸太小屋の壁に血塗られたハンカチが釘で打ちつけられていたなどという、陰謀としか思えない、大いに疑わしい物証まで出て来て（但し、確かにそのハンカチは皇太子の物であった）、嫌疑が決定してしまったのである。

森番モリゾンは誘拐の手引きをしたという嫌疑で、冤罪の訴えも虚しく、裁判もなく処刑された。

その狩り場にいた人物として確認できる人間が彼しかいなかったのである。

結局、モリゾンの死によってすべてが闇に葬られた。

執政官は早過ぎるほどに早く見切りをつけて、次期候補を選ぶよう皇帝に奏上する。ユーネスの他に候補がないわけではない。

次なる後継者は皇帝の弟デーバか、次男のラゴーか、賢にして明なる甥（姉の長子）のスーブが有力であった。

だが、複雑な権力抗争があり、執政官の推挙や、十二王それぞれの推す王族がある。いつものことだが、最後は皇帝に委ねられた。

しかし、その皇帝が世を去ってしまったのである。

執政官ロマヌフは、

「王の死はしばらく秘密にします。

十二王はすべてこの宮殿をお離れになられませんように。

今後の方針が定まるまでは、（「抜け駆けして」とは言わなかったが、暗にその意を含んで）国に戻ることのなきよう、お願い申し上げます」

その意味は明白であった。

それぞれの王国に帰って、軍備を整えるなどの戦争準備をさせないためである。

この混乱に乗じて勝利を得れば、帝国の実効支配ができる、という目算が諸王らにはあった。

王の死は秘密、しかしそれは護られることはなかった。各王は国へ早馬を飛ばして伝達したし、宮殿にいる下々の口をふさぐことはできなかった。侍従や侍女らは口を閉ざして語らないが、宮殿の騒ぎを目の当たりにする下僕や調理人は死を知らされることがなくとも、事実を覚る。

侍医の下僕であるカトーは狭い地下の自室に戻るなり、震えて言った。

「恐ろしいこった」

妻マリアが驚いて問う、
「おまいさん、いったい、どうしたって言うんだい。何だよ、その顔。死人みたいだよ。真っ青じゃないか」
「これが平気でいられるか。どうやら皇帝陛下がお亡くなりになった」
「ええ！　じゃ、これからどうなるんだい？」
「知るもんか、だが大変なことになる。戦争になるかもしれん」
「あゝ、怖ろしい、何てこと！」
不安におびえる下僕の妻はコック長の下で野菜切りをしている調理員の

セーヌに告げた。セーヌは庭師のせがれで恋人のジョに教え、ジョは町に住む友人のダンに知らせ、ダンが家族に言うと、たちまち町中に伝わり、深夜の居酒屋でその噂を聞いた仲買人たちが翌朝には各々仕入先の村々に広めた。

街道はたちまち荷車を引いて逃げる人々でいっぱいになる。その混乱ぶりは喧騒とともに凄まじい。列はただ列の後について行っているだけのように見えた。ともかく、皆〝どこか〟へ逃げようとしていた。

こどもの手を引く母親、母親からはぐれて泣き喚くこども、綱で牽かれる

牛や馬、ガタガタする木製の車輪の荷車に乗せられて悲鳴のような咆え声で鳴く豚や山羊、狭い道で荷物や車輪をぶつけ合って怒号する。

「いったい、あたしら、どこに向かってるんだい」

老婆が途方に暮れて道端にしゃがみ込む。

「そっちはだめだ、だめだ。こっちだ、こっちが安全らしいぞ。おい、こっちに来い、来るんだよ。行先を変えるんだ、わかんねえのか！」

男らが必死の形相で叫ぶ。

なぜ崩御したかは庶民にはわからない（死因は王侯貴族らも知らなかっ

た)。

だが、人々は『暗殺』を口にした。

群衆で埋め尽くされた街道で、金持ちや高貴な人々の大荷物の馬車がにっちもさっちもいかなくなって、立往生している。まるで怒濤の孤島のように。

帝都の宮殿の豪華な客室で、アラン王国の王モルト・シンゴルは王の侍従長ピートに呶鳴った。

「何だと！　それは確かか」

震えながらルカスは応える。

「はい、間違いございません」
「ぬぬ、フィガルめ」
王は中空をにらみ、歯を喰いしばる。
侍従長はさらに告げ、
「フィガル王陛下ばかりではありません」
「何ッ？」
動揺して眼を睜（みひら）く。
「ゴア王陛下も」

フィガルはローディン王国の王、ゴアはバルアモン王国の王であった。いずれも帝都から遠い国であったが、アランの方がもっと遠い。

ちなみに帝都は不可侵領域ハイリッヒトゥムに国境を接するフロンク王国内に自治権のある市国として存立し、十二か国の上納金で成り立っていた。人口は一千人弱、皇族以外は近衛と侍従・下僕、あらゆる職人と徒弟、それら以外は、行政官と農林水産業に従事する者がわずかにいるのみである。

「こうしてはおれん、ピートよ、すぐに発つぞ！」

「ははっ！　…しかし。

執政官殿には何と言いましょうか」

「愚か者、フィガルやゴアは執政官に何と言ったか！」

「いいえ、何も言わず密かに」

「ならば、余がそのようにして何が悪い！」

王は威厳を以て応えた。

帝国の柱が喪われたと同時に、何もかもが崩れてしまったのである。

第3章　熱砂の処女皇帝

白い虎の雌雄がしぶきを上げて戯れている。

女帝は白き巨象の上の繊細で豪奢な寝椅子に横たわり、脚を長らえ、指輪をした素足の指の先にあるその光景を眺めていた。

大理石で作られたその池の中央には、壮麗な大噴水があり、滾々と水があふれ、流れ出ている。

沙漠地帯で水をふんだんに使うほど贅沢はない。

虎の餌には魔術師の調合した特殊な媚薬が入れられ、二匹は季節にかかわらず、猛々しく戯れた。

絡み合う戯れがさらに嵩じると、皇帝は「皆の者、さがってよいぞ」と言い、侍女や女官や彫刻のような筋肉の女衛兵をさがらせる。そんなときは日ごろしとねをともにする双子の妹であるレイアも席を外すのが常であった。

そして独り、眺め続け、さざ波を立てる。

あふれる天窓の陽射しが優しく包むのであった。

泉の間と呼ばれるその広間は、さように頭上の遙か高き天井に窓を持ち、

差し込む光が水を青くきらきらさせる。死の砂に囲まれた国では、まるで幻のような極楽の光景であるも、逸楽する懶惰な生が死と背中を合わせているという、悲愴なアイロニイにも見えなくもない。

飽いて少女皇帝は階（きざはし）を上り、バルコニー出た。

外を見れば、黄昏が、砂の細かい滑らかな起伏の黄金の砂漠を茜色に染め、その美しさは喩えようもない。

砂岩色の壁が正方形をなして囲んでいた。クルアールの帝都イシュタルは城砦都市である。城壁の高さは５０メートルあり、一辺の長さは４キロメー

トル、東西南北それぞれに一つずつの城門があった。

日干し煉瓦や砂岩で造られた貴族や富裕市民層の奢侈な建物や、庶民の共同住宅などがならぶ。

オアシスのある通商の要所であるとともに、戦略の要であった帝都は、古来、大いに繁栄していた。

自国民や外国人らの商人が行き交い、毎日、シークが開かれ、あふれんばかりの穀類、肉類、塩、香辛料、家畜、絹や装身具、陶磁器や金属の道具、絨毯や家具、武具や書籍が取り引きされていた。

街の中央には、四方に瑠璃色の尖塔を持つ帝国の大礼拝堂は中央のドームの天井に円形の天窓を持ち、ただ天上から降り注ぐ光を崇め、祭壇も偶像もない。あるとすれば、聖句を壁などに刻み、又は鮮やかに描いたものだけだ。

そしてこの礼拝堂は聖なる巫女、処女なる皇帝の宮殿でもあった。

第十代皇帝アルペジアはドームに属する私室で、シルクがふんだんに奢られた大きな天蓋附き寝台に身をよじり、西の窓の向こう落ちる深紅の夕陽を眺めている。窓は色鮮やかな石で象嵌された装飾に囲まれていた。

美しき十七歳の少女皇帝。

両親は腹心の部下であった陸軍大将ロメルスに暗殺される。腹違いの兄も弟も弑殺された。

絶体絶命の中、匣の前で帝位を継承したアルペジアは絶対服従の近衛兵団を数日で編成し、法を介さず、暴を以てロメルスを屠り、その他権力の座を狙いそうな有力者を何ら手続きもなく、申し開きもさせず、強引に無慈悲に悉く粛清してクルアール帝国史上に、かつてない強権を燦然と輝かせた。

信仰に等しい忠誠絶対の近衛兵団を率い、恐怖で臣下を屈服させながらも、善政で人民を潤し、『アルペジア陛下に逆らう者は悪』と民衆に言わしめる

ほどの圧倒的な支持を獲得している。諸王も諸侯も、何者も憤懣を迸らせることができない絶対体制を構築していた。

その冷徹な双眸は、深くて神秘的な瑠璃色で、眼の霊力を高めるために黒く縁どられる。漆黒の髪はくるぶしを撫でるほど長く、前も後も横一文字に切りそろえられていた。

耳が突き出ているため、髪はそこで分かれ、もみあげのところからくるぶしに触れるほど垂れるも、毛先は同じく横一文字に切りそろえられている。

細く華奢な身体にはクリムゾンの繻子をまとい、豪奢で繊細な金の飾りを

髪や額から足首や足の指に至るまで、全身につけていた。

女官パミュルがひざまずく。錦糸のように細くてナイロンのように透明な髪を垂らす彼女がひざまずくと床に髪が着いて広がる。

「陛下」

物憂げに振り返り、見下ろす。

「赦す。語れ」

平伏し、

「畏れながら申し上げます。

例の研究者の件ですが」
「ウゾーニだな」
「陛下におかれましては、さような下賤の者の名など、お口に昇らせませんよう、お願い申し上げます。
民の神なる陛下のお唇が汚れることは、民人の不幸にあれば」
「構わぬ。
すべてを知りおく。それが我が心掛けだ。それでいかがした」
「は。

予定どおり、研究者は陛下のご意向のままに調査に加わりました。これで不陥落城の謎も解けますでしょうか？」

「わからぬ。

二百五十年もの間、何人にも解けなかった謎だ。いかに天才とは言え、たやすいことではあるまい。

しかし、もはやそれしかない。

ブドゥは死んだ。パスワードを継承する暇がなかったようではないか。

つまり、シューニャ帝国においてすら、わからない謎となってしまったの

だ。

我々は今までどおり、我らの独力で独自に探るしかない。

ブドゥが死すまでは、交渉によって相手国から聞き出すという選択も、０％ではなかった。だが、今では０％だ。

やることは従前と何ら変わらぬが、ただ、選択肢がそれしかなくなった。

独力で探るしか方法がなくなった、ということだ。

ふ、得難ければ得難きほど欲しくなるものよ。

禁じられたるものを人は求める」

「しかし、何ゆえ、外国人に依頼するのですか。陛下の統べる帝国、世界に冠たるこのクルアール帝国の秀でた博士や賢者が数十年に渉り、研究しておりますが」

「しかし、それは進んでおらぬ」

「致し方なきことかと。

この難解な謎を解く者など、百年に一人いるか、いないか」

「さればこそ異端の研究者こそ相応しい。それゆえあの男を指した。

史上、誰にも解けぬ謎なればこそウゾーニを選んだのだ。すでに知られた

る知識では、もはや謎は解けぬがゆえに」

「承知しております」

「疾く進めよ。早く良き知らせを我に知らせよ」

「御意」

アルペジアは眉根を顰め、表情を曇らせる。

「アモール帝国には油断するな。

さぞかし我らの動きをつかんでいようぞ。あの懶惰なる皇帝ネイロ・カリグアはただの放蕩者ではない。

二十歳の皇帝とは言え、権謀術策の中、幼少時より生き残れし者。我同様、心は老成している。裏の裏を読め。

島を制覇することは我が王朝、我が一族、我らが民族の悲願。必ずや成し遂げねばならぬ。

負けはない。もし負けると確実にわかることがあるならば、我は全国民を殺して死ぬ。だが、最終的な勝敗は神のみぞ知る。誰が定めを知ろうか。ゆえに人は終わりなく闘う。

運命は知られざる存在だ。

諸人も王族も何か変わろうか。変わりはしない。
諦めはない。終わりはない。最後の答は永遠に出ない。
運命はいくらでも変わるのだ。たとえ、死しても、自らの屍を踏み砕いてでも、前へ前へと進もうぞ」
パミュルが去った後、南に向いた透かし彫りのあるアーチと繊細な列柱がならぶ開放的な居室に赴く。柱の向こうはすぐにバルコニーであった。
バルコニーは広大なスペースである。
人の背よりも高い彩色壺が数十個もならび、土を盛った花壇には熱帯の植

物が植えられていた。鎖に繋がれた虎や獅子が怠惰に寝そべっている。

ヴィシュトゲン杉で作られた大きなテーブルが置かれ、皮革製の地図が黄金の鋲で留められていた。

「峻嶮なるウォール山が囲み、匣に近づこうとする者らを壁のように阻む、不可侵領域ハイリッヒトゥム。

渦巻き状のウォール山には数々の城砦があり、その城砦群の中心にある（渦巻きの中心となる）不陥落城ウロヴォス。

攻め来る武者らを必ずや殲滅させる不思議な城よ。

生存者がいないがゆえに、我ら諸外国人には、そこで何が起こったかがまったく知られていない。

これを攻め滅ぼすほど面白きことがあろうか。ウゾーニに匣の解除を探させるは、それをそれとし、攻城の愉しみを捨て置くべきか。

むろん、否、だ」

黒いベルベットの夜空にダイヤモンドのように鏤められた星が瞬く。

彼女のまぶたには悲愴なるトロイアの陥落が泛ぶ。「詩情の極みぞ」

戦争の悲惨も、家庭から剥ぎ取られ、従軍する兵の悲劇も、この権力者に

は贅沢な快楽に過ぎない。

「陛下、晩餐のお支度が整いました」

今宵も豪奢なる宴の時刻となった。アルペジアはゆっくり革と黄金のサンダルの足を運び、部屋へ戻る。

侍女が素早く寄って来て、衣類を脱がし、香を塗る。着つけ役が鮮やかな花の模様を染めた羅紗と絹を着せ、金糸で刺繍をした上着を羽織らせる。

深い絨毯を踏んで扉へ。金の鎧と槍を持つ女衛兵が黄金と色大理石でできた両開きの扉を開ける。

御輿を担ぐ巨漢四人が待っていた。

宴会場はすべてが大理石でできている。中央に噴水のついた舞台のある浅いプールがあり、円柱が囲んでいた。

プールの周囲は階段状にフロア・ソファとクッションが置かれ、出席する王侯貴族らは半ば寝そべり、奴隷によって運ばれる脂肉や果物や酒をたらふく賞味するのである。

アルペジアは玉座に坐り、大きく湾曲した太いツノを加工して作った黄金の杯を傾け、葡萄の液を飲み、炙り肉をつかんで食べた。

傍らには女官パミュルと、お気に入りの巫女リリアとビリチスが侍る。巫女らはともに、さらさらと透けるような金髪で、十二歳であった。

「天神の御心のまゝ、歓び、愉しめ」

皇帝はそう宣った。

噴水からは鉱物の粉末など妙薬を混ぜた香油が噴き出し、火が灯され、水色や緑の炎が上がる。

白き神官ハルナが少女皇帝の側に寄って来てひざまずく。

「陛下に在られましてはご機嫌麗しゅう…」

「虚礼は要らぬ。
何だ？」
「遂に調査隊が出発したようですな」
「ユブロ大学の学者がか」
「そのとおりです。最も期待される本命が出発しました」
「アモールは著名な研究家パウルを中心に調査隊を組んだようだな」
「そうでございますか」
「そうだ」

「陛下、一つおうかがいしてもよろしいでしょうか」
「赦す。神官の願いを無下にすることはできまい」
「ウゾーニを選んだ理由です。
彼はシューニャ帝国（のアラン国）の中で有名ではありましたが、研究の精度や深度で有名だったのではありません。
その奇天烈さで有名だったのです」
「ふ。
いつかわかるであろう」

「はて」
「もはや、問うな。よいな」
「はは。
しかし、陛下、いずれにせよ、ウゾーニとやらは、かなり危険な立場にあるわけですな。
帝国アモールと言い、旧シューニャの諸王と言い、ハイリッヒトゥムの〝守り〟と言い、それぞれの思惑で干渉、妨害、暗殺などを仕掛けて来るでしょうから。思うだに怖ろしいことです。

特に〝守り〟が恐ろしい。

古来、その秘密を探ろうとする者は皆不可解な死を遂げております。土壁のように押し迫って不動、厳粛なる暗殺者、埴輪（はに）の無表情のように残虐な殺戮者が来るとも言われています」

少女皇帝はじっと高位の神官を凝視した後、

「そうだ。

手は尽くす」

「しかし、いかように」

「おまえに語る必要はない」

「おお、これは、わたくしめとしたことが分不相応な、差し出がましいことを申し上げました。

なにとぞ老いに免じてお赦しください。最近、物忘れや、めまいが酷くて。今日もまたイクラのところへ参る予定です。では、これにて」

ハルナが急いで去った後、パミュルを近くに呼び、

「老神官を捕らえよ。今すぐだ。どこにも連絡する暇を与えるな。そして拷問にかけよ。

アモールに調略されたに相違ない。必ず吐かせよ」

「御意」

「それから」

「は」

「念のため、准宮廷医イクラを呼び出し、拷問のさまを見せつけた上で、じわじわと訊問せよ」

「お任せを」

女官は冷厳に微笑した。平和は尊い。

第4章　退廃の帝国　懶惰・豪奢・繚乱

ネイロ・カリグアは黄金色のつややかな絹の掛布をはいで、起き上がった。
二十歳である。
その裸身は若々しく、未成熟な少年らしささえ残っていて、女性のようにたおやかであった。

古典期の美少年の典型とも言える。爛熟した古代大理石彫刻のように優美で典雅で、美の規範（カノン）と呼ぶに相応しい。

碧い眸（みは）をあどけなく睜り、潤むように揺らがせるも、その趣は、懶惰で放逸な者の怠惰な緩みを感じさせる、人生の辛酸など思いもよらない、優雅に苦労もなく育った者のそれであった。

髪はプラチナ・ブロンドで、胸を隠すほど長く、わずかな微風にもさらさらと揺れ、天上の存在のようであった。唇は常に潤む。

「陛下、よろしいですか」

女奴隷のルギアが柔らかな手で絹を剥ぎ取る。

「あゝ、よいぞ」

するとネグロイド、コーカソイド、モンゴロイドの美しい女奴隷らがあらわれた。彼女らはあたかも動く彫刻のようで、羅紗をまとい、巧みに襞を作るも、その均整のとれた肉体の美しさは輝かんばかりである。ネイロは常に『朕は美を愛し、人生は芸術のためにある。美しき者を眺め、堪能するは朕に於いては義務である』と高らかに言って、はばからなかった。

「では、お運びいたします」

奴隷らが皇帝を抱きかかえ、輿（こし）に乗せて浴室へと運ぶ。

浴場は全体が蒸し風呂で、その中央に広い浴槽があった。浴室奴隷が皇帝を受け取ると、浴槽へ浸からせ、オリーブのオイルを煮詰めて作った石鹸を泡立てて洗った。

檜のベンチにコプトエジャ綿のタオルを敷いてそこに寝かせ、身体を揉み解す。濛々たる蒸気の熱のせいもあって、汗が吹き出た。

目の粗い木綿のタオルで拭かれ、孔雀の羽根の大団扇で扇がれる。香油が塗られ、髪が梳かれた。剃刀を薄い髯や揉み上げに当てられ、爪が磨かれる。

トーガが運ばれ、着つけ役が美しい襞を作った。

「さて、食事だ」

翡翠や瑠璃や金剛石や碧玉や赤玉など貴石と、黄金と色大理石とによって組み立てられた食事の間では、大臣や将軍や大貴族らが皇帝を待っていた。

幅の広いテーブルは長さが百メートルにも及び、香辛料を惜しみなく用いた数多の炙り肉や魚のポアレ、カモ肉に果物ソース、幾十種類もの腸詰、チーズ、パン。色鮮やかな野菜や果物、大きな甕から注がれる葡萄酒……

鮮やかに染められた羅紗を着た少年少女たちが薔薇の花弁を撒き、聖らかな

歌を歌う。

ネイロはザンバジョン（卵黄と甘口の葡萄酒を混ぜた飲み物、食後酒）をなみなみ注がれた黄金の杯を掲げ、

「祝福あれ、我が偉大なる帝国に。

今日も最良の日となろう。永劫の繁栄に酔い痴れよ、我らには永遠の勝利しかない」

朝食を終えると、華厳なる侍従団を従え、トーガを引きずりながら大理石の執務室の前まで来ると、槍を縦に持って立っていた黄金の重装甲衛兵が扉

を開ける。
侍従団を振り返り、
「下がれ」
そう言って独り入る。
磨かれた黒檀の机にクリスタルのインク壺とガチョウの羽根のペン、羊皮紙。
小麦の収穫報告と街道の補修報告に眼を通すと、いくつかのメモを添え、書記官を呼んで清書するよう指示し、再び呼び鈴を鳴らし、

「アシンを呼べ」
「は」
侍従長が下がった後、現れた白い男は全身を昏い濃紺のフードつきマントと臙脂のトーガにからだを包み隠し、蛇のような金色の眼だけを底光りさせていた。
「お呼びでしょうか、陛下」
「アシン、パウルの動きはどうだ」
パウルとは新進気鋭の歴史家で古文書や言語の研究を中心に論文を発表

している学者で、どこの大学にも研究所にも属していないが、卓越した論文を学会の研究機関誌に投稿し、たちまち有名となった人物だ。

その洞察力、鋭い論理的考察は驚嘆の的であり、天才とも呼ばれ、ウゾー二准教授の好敵手だと言う者もいた。

ただその姿を見せず、直接会ったという者もおらず、謎の人物とされ、実は高名な学者が大胆な学説を唱えるために身分を隠し、匿名で投稿しているのでは、というのがもっぱらの解釈である。

そんな実体のなかった男が突如、二週間前に皇帝ネイロの下に生身の姿を

現したのである。

その実在を（公式見解としては）信じていた皇帝周辺の者らも驚いた。むしろ、驚かれた方が驚いたかもしれないが、実際、そうなのである。

来たのは、当然であった。皇帝はその少し前から、出版社を通じて、パウルと連絡を取っていたのだ。『帝国内の大学で、是非、講義を依頼したい』と。そして、直接連絡を取り合うようになっていたのであるから、驚く方がどうかしている。

とは言え、実体が疑われていたのは事実だし、手紙だけのやり取りから、

突然、姿を現したのは、やはり意外の観を免れない。そして何と今は、好敵手ウゾーニに対峙するかのごとく、は帝国の威信を賭けたパスワード解明の勅命を受け、調査の旅に出ていた。

「特に変化はないようです。不可侵領域に近いフロンク王国にいます。クロード王の外伝や異伝などを発掘し、その内容を調べています」

「そうか。

いずれにせよ、パウルの敗北はあるまい。

パウルはアランのウゾーニよりも遙かに有利だ。あやつの持ち得ぬ情報を

持っているのだから」

アシンは応えなかった。冷たく無表情なまゝだ。

ネイロはブドウ酒の壺の栓を抜く。貴石を鏤めた黄金の杯に注ぐ。海神の図柄が彫られていた。

アモール帝国の大彫刻家クレトスが彫った小さな大理石の大海神の彫像を愛でながら、次はもっと大きな雷霆神を作らせて、階段の間に飾らせようと考え、空想に耽る。

ふと思いついたかのように、

「シューニャのパスワードは、誰も伝承していない、ということになっているか」

「さようです」

「あの帝国の諸王はどうしている？」

アシンの顔に嘲りの表情が仄かに泛ぶ。

「正当な神授の権威はない。

つまり、力だけの世界に戻るという理解でいるようです。すなわち、諸王の覇権を廻る闘いがあるのみ、と。

戦国の世の様相を呈している、そういう状況のようですが」

何ら感情を泛べず、ネイロは遠い眼で、

「二百五十年前に戻ったか。ふ。

愚かな。だが、やがて統治されるであろう」

「は・・・」

「ウゾーニの動きは？」

「出発しました」

「そうか。我らには未知数だが、アルペジアは何を見出して選んだのか」

「調べましょう」
「そうだな。わかったら後は」
「殺せ、ですね」
アシンは腰のレイピア（細身で刺突専用の片手剣）の柄をつかむ。金属がガチャリと鳴る。
「ふ、そうだ。
しかし、いずれにせよ、屠殺の女神のようなあの女は戦争の贄を見逃すはずがない。ウゾーニとやらが秘密を探ろうが探るまいが、アルペジアは戦を

起こすであろう。

みすみす放置することもあるまい。

装甲を銀色に耀かせる朕の兵らも、その戯れに花を添えようぞ。あの女の好きなようにはさせまい。

不陥落城の陥落こそは、あゝ、トロイアの陥落にも劣らぬ、世界史に遺るべき芸術にあれば」

そう言って、皇帝は欠伸をした。

アンニュイなまなざしで頬杖を突いた5秒後には興味を喪い、遠いまなざ

しで、

「もうよい。下がれ」

労働は（魂に）瑕疵（きず）を附す。そう言わんばかりであった。世界は芸術の模倣に過ぎない、と。

第5章　ウゾーニ

いつも尊大に顔を顰めている偏屈な男がいる。鬱屈の裏返しであった。

或る日のことだ。

「おい、おい、おまえ、あれはまずいだろ、アーガムン教授、かんかんだったぜ」

ところが、片方の眉を上げてギョロ眼でこちらをにらみ、

「それがどうした？

ふ。本当に理不尽なことだな。

僕は彼の論文が情緒的だと批判したまでだ。それが何か問題なのか？　事

実こそが学問に於いて最も大事だ。アーガムンはそれを蔑ろにしている。

おおかた、彼の青春時代の失恋にでも思いを馳せて、同情やら共感やらを覚えたのであろう。

虚しいことだ。

この世は、事実で出来ている。

事実とは、科学的な物象、又は現象だ。

学問が事実を明らめるとき、それは真実の輝きを帯びる。だが、哀しいかな、多くの人間は自己肯定の愚に取り憑かれた亡者だ。

他の民族が傷つけられるよりも、同じ民族が傷つけられる方が感情を害する度合いが大きいなども、自己肯定の情の発露の例だ。人々はアイディンティティを損なわれたと感じるのだ。

A民族の数人がB民族の数人を虐げればAの多くは憤激し、Bに属するすべての人々を一途に憎悪する。

だが、それは事実に照らして、正しいことであろうか。

むろん、考えるまでもない。大誤謬だ。犯罪そのものだ。悪逆、悪辣の極致だ。

悪いのは行為をした個々の人間であり、恨みを晴らす権利があるのも個々の人間だ。他人には報復の権利はない。

それとも『同じ民族なら他人ではない。兄弟も同じだ』とでも言うのか。笑止！

同じ民族のマフィアが娘を強姦して殺したら、兄弟と呼ぶのか。

そんなものは嘘偽りだ。

何と愚かな感傷主義か、事実をまったく見ていない。

ここで言う、民族を宗教に置き換えても同じだ。

それが事実にそぐわないのは自明なのに、感情は理性に叛逆する。

又それを利用して人々を集めたり煽動したりして、自らの邪な欲望を遂げようとする狂人もいる。集められた人々は感情に駈られ、騙されていることに気がつかない。

畢竟は、それと同じことなのだ。あのアーガムンのやっていることは。

いや、大袈裟ではない、極論でも誇張でもない。

あゝ！

正論を言って虐げられる、この世は何と住みにくいものか。まったく以て

迷惑千万な話だ。僕は被害者だ。何という不幸だろう。無知蒙昧な輩に囲まれて生きるとは」

そんなウゾーニの無礼で滑稽な言い草に一瞬かっとなるも、いつものことだと憤りを抑制し、

「おまえの教授批判が正確な洞察なら、まだしもよいが。おまえが偏った考えで、妄(みだ)りにきっとそうなんじゃないかと決めつけているだけだ。

それこそ事実にそぐわない」

蔑みのまなざしで見下ろすような眼つきをするウゾーニは、

「情緒的であるか、理性的であるかは、誰にでも明晰判明にわかる。よいか、これが文献学者だからまだ救いがあるが、もしこれが裁判官だったら堪ったもんじゃない。情緒で法を捩じ曲げかねない。人間社会を動物の域に堕とす、驚嘆すべき愚行さ。

あゝ、何ということだ！」

そう言って、せせら笑う若輩者を、同僚のルンは憎々しげににらんだ。『こいつ、まだ二十歳のくせに』

しかもルンがまだ研究員なのに、こんな嫌味な奴が准教授なのだと思うと

余計腹立たしかった。

しかしなるべく冷静に反論を試みる。

「それがいけないのさ。

アリアドネの悲歎を累々述べることも、あってもおかしくはないだろう。修辞や用語の使い方で年代や時代背景を分析することばかりが能じゃあるまい。時には芸術的感興がなくてはならない場合もあるだろう。

心も参入して初めて了知に達する事実もあるのだから」

眉を上げてわざとらしく驚いたような顔を作り、若僧は、

「だからと言って、六十の老人が感傷的に語るのか。そのような非科学的な態度では、白髪三千丈とか言い出しそうだな。ふ」

ルンは呆れて眼を丸くする。

『こいつ…李白の詩のことを言っているんだろうけど。

あれは長江の景色を白髪三千丈に仮託したという説もあるし、そもそも、韻律上の制約から「三」と「千」（いずれも平声の字）しか使える数字がなかったということも関与しているのを知らないのか。

…まあ、めんどくさいから、もうこれ以上、言わないでおくか』

間違った喩えを使って偉そうに教授をこき下ろす、やせっぽちの准教授に呆れ、研究室を出て行った。

後に残ったウゾーニは満足げな薄笑いを浮かべている。

蔦の絡まり蔽う煉瓦造りの建築。アラン王国の学問の中核となるユブロ大学のアイビー学寮。

ウゾーニの出自や育ちについて知る者はいなかった。ただし、仲間内で一度だけ話題になったことがある。

「何だ、それじゃ誰も知らないのか」

「聞く機会もないしな。奴と親しい友人もいないわけだし」
「そうだよ、彼が自ら身の上話をしない以上、採用担当官とか、学長くらいしか知る者はいないってことだよ」
「いや、奴はここの学生だったんだ。入学事務を扱う者も知っているはずだろう。ただし、同級生や先輩・後輩で知る者はいないらしい」
「無口ではないんだがな」
「真逆だ」
顔が細く小さいのに鼻が高くて大きい。顎も細く尖って短い。太くて濃い、

長い髪を肩にずしっと乗せ、どことなくロングヘアードのカニンヘン（ウサギ）・ダックスフントに似ている。

カニンヘンとは、耳の先にウェーブのかかった長い毛を垂らすダックスフントの一種のこと。ただし、彼の場合はまったく可愛くないし、可愛げもない。

偏屈だし、変わり者だし、自己中心的で人を蔑み、傲慢だ。

あざな名のウゾーニは日常使う呼び名だが、仲間内では厭な奴という意味でウザニとも陰で呼ばれていた。

ちなみに、イヴィは諱（本名。他人にめったやたらには教えられない）で、リャドは苗字（出身地に関係する）、クロは姓で、元は王から氏族に与えられた称号であったが、次第に一族の名称と混同し、今では単に地域の氏族を表すようになっていた。

ただし、誰もクロなどという姓を聞いたことがない。

カリカチュアのような細いからだを、大学教師らしく見せようと、注文服専門店で奮発して買ったツイードを毎日着ていた。

パイプをくわえるのは、好きなシャーロック・ホームズの真似だが、煙草

を買うお金がないので、滅多に火は点けない。ちょっと香りを楽しんで、しけらないようにすぐに木箱に入れて、きっちり封をしていた。

吸うときは周囲の迷惑など考えない。

さて、話は皇帝薨去の三日前に遡る。

その日、前触れもなく、クルアールの大使が象牙と金の壮麗な馬車で現れた。きらびやかな装甲の供を従えている。色彩のない、数百年前の石造りのユブロ大学の、暗鬱なアイビー学寮の前に停まったのだ。

前触れもなくとは言ったが、実はウゾーニには予感があった。なぜならパ

ウルという学者から次のような〝丁重〟な手紙をもらっていたからだ。、

『前置きは時の浪費だ。率直に申し上げよう。

貴殿は余計なことに首を突っ込まぬ方がよろしい。折角、若くして得た稀有な名声も喪われるであろう。

なぜなら、貴殿には勝ち目がないからである。

当方はすでに重要な資料を手にし、もはやチェック・メイト寸前である。貴殿はせずともよいことにいたずらに手を伸ばし、将来のつまずきとする必要もあるまい。

先達より衷心よりご忠告申し上げる』

先方はわかっているのだろうが、ウゾーニには何のことやらさっぱりわからなかった。だが、自尊心の強い彼は大いに不愉快に感じる。

いずれにせよ、ここに書かれているような、何かの依頼のようなものが自分の身に舞い込むのだろうと漠然と考えていた。

それがこの日の華やかな馬車の到来であったというわけだ。

舎監はびっくりしてウゾーニを呼ぶとともに、学長に報告する。

狭く乱雑で書籍と埃の積もった暗い研究室にあざやかな赤や青のシルク

で身を飾る沙漠の宮廷人が質素な樫の木の椅子に腰掛けて言う、
「先生の専門に関することで、特に依頼申し上げたい件がございます。どうかご同道願いたい」
「ご同道？
調査旅行のようなものですかな」
二十歳には似つかわしくないもったいぶった口調。
「そのようなものです」
「いったい、どのような内容でしょうかね。講義の予定もあるし、休講にし

た上に、休暇も取るとなれば、それなりの説明を学長にさせられるから」

口調とは裏腹に、彼はここを出たくて仕方なかった。

同僚とも上手くいかず、雰囲気が悪い（彼が悪いのだが）からである。

「それは今ここでは申し上げられません。しかるべき場所をご用意しています。そちらでしかるべき方からお話があります。

大学のことは心配いりません。学長には私からよくお願いしておきます」

「しかし」

「報酬は、金貨三千枚の年金と、今後のすべての研究費用の全額負担です。

また、調査中は好きなだけ経費を使っていただけます。調査に関係のない経費でも湯水のように使っていただいて結構です。

パイプもかなり倹約されているとうかがっておりますが、どうぞこれからは最上級のものを惜しむことなく吸ってください。

衣類や飲食も贅沢のできる限りしていただいて結構です」

「え！」

破格な申し出であった。

「凄い！　やったー、いや…ぅおっほん、まあ、やむを得ないでしょうな、

お頼みとあらば」

彼がアイビー寮を出発したその日に皇帝が薨去した。

第6章　ホテル・プーゾ　究竟の数式

サルーと名乗る美麗な服装の侍従が迎えに来た。

髪も鬚も白い柔和な人物である。

出発と同時に、ウゾーニは馬車の中で自分の携る文献学及び古文献に秘められる暗号に就いて話し始め、研究成果を自慢し、他の研究者の劣った見解を上げ連ね、得意げに延々と語り続けた。

美麗な馬車はまず半島を廻る海岸の街道を往く。

街道を往く人は、皆不安げで、暗鬱な表情を浮かべ、小さな声で話し、何かに怯えていた。ウゾーニだけが意気揚々。

アラン王国最大の港町リプルーにある豪華ホテル・プーゾの壮麗な正面玄関の車寄せに馬車は停まる。

二日間に渡る自慢話に疲れ切った侍従は疲労の色を浮かべながらも、礼儀正しくドアを開ける。

降りて見上げれば、プーゾの華やかなファサードは一部がバロック様式で、ほとんどが第二帝政期の様式を模していた。

ますます有頂天なウゾーニにサルーは恭しく言った。

「どうぞ。最上階のスイート・ルームにご案内します」

しかし、広大で贅沢な部屋に着くと、独りにされた。

絢爛な室内に悄然と坐る。

「むむ。何だか落ち着かないな」

ふと、葉巻の箱があることに気がついた。開けると、高価な葉巻がずらっとならんでいる。

「おお、何て素晴らしい」

パイプも好きだが、葉巻も大好きだ。しかし、安月給で、日常的に吸うことなどとてもできない。

ウゾーニはマッチで紙に火を点けると、その火で入念に葉巻を炙る。ウォームアップが終わってから、おもむろに火を点けた。

「あゝ、最高だ。これでスコッチがあれば」

満足げに煙を吐く。

ノックの音が聞こえ、給仕がコーヒーを持って来た。

コーヒーの香りと交ざり、芳醇なハルモニアを生み出す。

気分が落ち着くと、ツイードのポケットから皮革装丁の小冊子を出し、開く。革の匂いが加わり、三重奏となってさらに耽美を増す。

今度はノックもなく、ドアが開く。

「あれ？」

少し驚いて振り向く。見てもっと驚いた。

入って来たのは頭巾と長いマントの下に、黄金の装甲を隠した騎士二人と、その間に立つ黒衣の人物だった。

全身を黒い布で覆っているため、男か女かさえもわからない。だが、かなり細身で、女性ではないかとウゾーニは思った。

黒い衣の人物はすたすたと部屋の中央に入って来ると、ウゾーニの眼の前に繊細なミュールをぞんざいに打遣り、ソファの上に胡坐する。素足のなめらかで繊細な指を見て、女性に間違いないとウゾーニは確信する。

「ウゾーニか」
「はい」
黒衣の人はそれを剥ぐ。
「うわっ！」
ウゾーニは思わず声が出た。
美しい少女だった。
沙漠の民の民族衣装を身にまとっている。しかも相当高価な。
精緻な刺繍のある短い繻子の袖なし上着。その上に羅紗、幾条もの耳飾り、

金細工や宝石の首飾りを幾重にも首にかけ、黄金の腕輪に、手首にも幾重もの黄金のリング、瑠璃色の革ベルトはいくつも宝石を鏤めて、たっぷりした絹のズボンを留めている。

「聞け、我こそは」

華奢にもかかわらず、人々を畏怖させるオーラを炎のように輝かせて言う、

「クルアール帝国第十二代皇帝アルペジアぞ」

ウゾーニは唖然とした。あんぐり口を開けたまゝだ。

声にならず、そ、そんな莫迦な…心中でうめくのみだ。

彼を驚かせたのはそればかりではない。美しくも、頬や四肢には、まだ幼さが残っているその微妙な美しさである。

騎士が凄味のある声で刺すように言う、

「頭が高いぞ、ウゾーニ」

反射的にウゾーニはソファから降りて絨毯の上にひざまずいた。強きを助け、弱気を挫く彼なれば。

「ど、どうかお赦しを」

少女は冷厳なまなざしで、

「構わぬ。坐れ」
「あ、ありがたき幸せ」
「依頼の件、これより言う。よく聴くがよいぞ」
「は、はい」
アルペジアは瞑目して語る。
「三つのパスワードの件は知っておるな」
「はい、この島の王政から帝政への移行にかかる古文献を研究していますから。不陥落城の成立に関する古文献も含めて。

失われた古文書の再生が僕の研究です」
「我の持つパスワード以外のパスワードが知りたい」
「え？　しかし、それは」
「皇位を継承するのに、いちいち三皇帝が会するは、面倒臭い。正統な者が皇位を継ぐに何ゆえに他の皇帝の干渉を受けるのか。わずらわしい。ま、そんなふうに思っておけ。
それ以上、理由を問うのか」
「あ、いいえ、いいえ、滅相もない」

「よし。
では、我がパスワードを見せよう。こればかりは、腹心の家臣であっても預けられぬものゆえに、直々に来たのだ。
おまえを帝都に呼ぶこともできたが、我が来た方が早い。
さあ、心して見よ」
「あゝ、お待ちください」
ウゾーニは両手を振った。
「いくら、陛下のお言葉とは言え、神とのご盟約があるはずでは。僕の記憶

する限りでは後継者にしか見せられないはずです。

さように相違ないと心得ますが。

従って、僕が見ることは、赦されぬことのはずと心得ますが…」

だが、不思議なことに、ウゾーニの顔には、言葉で言うほどの狼狽はなかった。むしろ、ある種の興奮しかなかった。決して畏れている人間のそれではなかった。

まるで当然の権利と言わんばかり。

それぱかりではない。

少女皇帝のまなざしも、確かめるような、手探りのようなまなざしであった。

しばしの間の後、アルペジアは、

「ふ。

いや、構わぬ。だが、今は多くは言うまい。

見よ。見るがよい。

これだ」

緋色の四角い板を差し出す。石で作られたものだった。そこには図柄が浮

き彫りにされていた。

それは『緋色の龍神が緋色の三叉戟に絡みつく図』であった。ウゾーニは息を飲む。

「わかりました。

手に取ってもよろしいでしょうか」

少女皇帝は冷厳なるまなざしで応え、

「気にするな、取れ」

辞儀をして手にすると、ウゾーニは眼つきが変わり、寡黙になった。何度

も入念に眺め直す。充分仔細に眺めた後、

「皇位継承の際、不陥落城に行っておられると認識しておりますが」

「そのとおりだ」

「このパスワードは実際、どのような使い方をされるのでありましょうか」

「石でできた匣に数式が刻まれておる。

ペンをよこせ。それからパピルスだ。羊皮紙でもよい」

少女皇帝は図を描いた。

「数字を入れる部分が四角くへこんでおる。そこにこの四角いパスワードの板を嵌め込む。これだけだ」

「なるほど。

だとすれば、お言葉ですが、わざわざ調べるまでもないのではないでしょうか？

なぜならば、他の皇帝がパスワードを嵌め込むときに、相手のそのパスワードの図柄が、当然のことながら見えているでしょうから」

「見えぬ。

図を下にして嵌め込むからな。

そんなわかり切った過ちを冒すものか」

ウゾーニが眉を深く顰めた。

「では、もう一つ伺います。

この四角くへこんだところの底（へこみの底）には、浮き彫りの浮き上が

った部分と、凹凸が合うように、『緋色の龍神が緋色の三叉戟に絡みつく図』が凹になって彫り込まれているのでしょうか。

つまり、そのかたちにへこんでいるのでしょうか」

「わかりにくいな。どういうことだ」

「ええ、ですから、パスワードの四角い板の方は、龍神の図柄が浮き彫り（凸）になっていますよね。

それとは反対に、パスワードでは凸になっている部分が、パスワードを嵌める側の四角いへこみの方では凹になっているのでしょうか、と伺っていま

す。

すなわち、凹と凸とが合うようになっているのでしょうか、ということをお伺いしているのです」

「いや。

四角い凹みの底は平らだ。何のかたちも彫り込まれていない。真っ平らだ」

ウゾーニは安堵の溜息を吐く。

「よかった。よし、よし！

わかりました。これなら何とかなります」

自信ありげにウゾーニが胸を張る。

疑わしさを残しながらも、少女皇帝は眼を瞬き、驚嘆の意を表し、

「ほう。

すると、おまえはこの一つのパスワードがあれば、他の二つがわかると申すか、この数百年の謎が」

「恐らくは。

もし、これが数式でなかったら、かなり苦労したでしょう。できなかったかもしれません。

もう一つ確認します。陛下がパスワードを嵌める四角はどこですか。つまり、どこの四角いへこみに嵌めるのでしょうか、ということですが」

「そんな説明をつけ加えなくともわかる。

真ん中の四角だ。

クルアールは代々、真ん中の四角となっている。アモールが一番左だ。シューニャは数式の答の部分、一番右、＝の先のところだ。

わかったか」

ウゾーニはニッコリした。

「はい。もう、わかったも同然です」
依然として疑惑を霧のごとくに漂わせながらも、驚きと感心の眼のアルペジア。強く念を押すように問い、
「まことか」
「ただし、今はまだ答を出せません。いくつか確認と調査をさせていただきとうございます」
うなずきながら、
「もっともだ。

では、調査の後は、不陥落城へ行って、確かに、あの匣が開けられるということか！」
「恐らくは」
「うむ。わかった。では、さっそく出かけようぞ」
「ええ！」

第7章　苦難の逃亡　零からの出発の象徴

「ただし、おまえと我とは、ここでお別れだ。我は王宮に帰る。一度（ひとたび）はな。不陥落城へ行くとなれば、よくよく準備せねばならない。ハイリッヒトゥムへ入るなれば、三帝がそろわずにはならぬことだが、さようなことに逡巡する場合ではない」

ウゾーニは唖然とした。

「しかし、軍を伴うということですか、我らがシューニャ帝国は今、混乱して反発する勢力もないかもしれませんが、アモール帝国が黙っていないはず。

戦争にもなりかねません」

「ふふ。

安心しろ。そのようにはしない」

少女皇帝はそこで言葉を切った。

むろん、それは嘘だ。むしろ、彼女は不陥落城を攻城することを欲していた。

アモール帝国が立ち上がれば、大いに歓んで戦うつもりである。

勝算もあった。

だが、さすがにウゾーニに対し、

『匣を開けて、こちらの望む者に神授の皇権を与え、シューニャ帝国の皇帝にしてしまえば、我が帝国との連合軍を作り、皇帝ネイロ・カリグアを斃せる。

いずれにせよ、パスワードが解明できようが、できまいが、不陥落と言われた城を陥落させることが我が望み』

とまでは言わない。

ただ、そのとき、ウゾーニがどういう出方をするかが気になっていた。

状況に応じて、別の対応も考えなくてはならない。
それは、ともかく。
「さて、出発の用意をして国へ戻ろうぞ。おまえは不可侵領域に向かえ。そこで再会する。よいな。
では、さらばだ。彼の地で再び」
あっという間に黒い衣で全身を蔽い、席を立つ。
「お見送りを」
ウゾーニも慌てて立ち上がった。

港へ向かう。皇帝は船で来ていた。高速帆船サークはすぐに出航する準備が得来ている。別れの前に、ウゾーニは不陥落城の様子を手短に確認した。

そして、

「実は、おうかがいしたいのですが」

「何だ。構わぬが、急げ」

「我らがブドゥ皇帝の死に就いて、諸王が絡むとお考えでしょうか」

「何？」

「分に過ぎた質問であることは承知しております。しかし、民としては知り

たいのです。陛下にあられては我々の知らぬこともしやご存知ではと」
「たとえ、それを知っていようと、おまえに漏らすと思うか」
「いいえ」
「ならば、問うな」
「申し訳ございません。、何とぞお赦しを」
「一つだけ言おう。
諸王にはアリバイがある。彼らは常に一緒であった。彼らの臣下も同様であった。当然であろう、暗殺を懼れて厳重な警戒があったはずだ。

皇帝に直属するに者以外で、単独で皇帝に近づける者はいなかった」

「しかし集会した上で、諸王が後継者を誰にするかをうかがうため、王の部屋に入室する機会はあったのでは・・・」

「それは、むろん、あった。だから、単独で入った者はいないと言ったであろう。

シューニャの諸王らは十二人そろって入室した」

ウゾーニの眼が鋭く細まる。

「そうですか。

これでわかりました」

翌朝、壮麗な大型馬車は出立し、不可侵領域へ向かう旅が始まった。侍従サルーは辞し、代わりにアンドリュー・ルーグという、若者が乗り込んできた。馭者に行先を告げると、彼は軽薄な挨拶を述べる。

「よろしく。当座は俺があんたの面倒を看ます」

聞くとまだ二十歳、『何だ、同じ齢じゃないか』とウゾーニは思った。

ハンチング帽を粋にかぶり、スマートな高級ジャケットに細身のスラックス、ローハーを履いてサングラスをした細い鼻の尖ったシャープな顔立ち。

表情はクールだ。

「僕はウゾーニ。どうか、よろしく」

「さて、ウゾーニ、これからのルートだが」

敬称なしか、ウゾーニはむっとした。アンドリューはふっと微笑を浮かべ、話続けている。『こいつ、僕が気分を害していることに気づいているな』

「当面、警護の兵が間に合わない。二、三日は二人っきりだ。なので、多少遠回りでも人の多い街道を往く。山や森には入らない道を選ぶ。夜は動かない。宿泊地は大きなホテルを選ぶ。

そういうことで理解してくれ」

「危険が予想されるということか」

「暗号を探る者は古来、絶えないが、みんな危険に遭っている。それを知らないわけではあるまい。

もっとはっきり言えば、ほとんどが何者かに暗殺されている。そんなにショックな事実じゃないよな？

文献の研究をしながらでも、そういう周辺情報は知っているだろ？」

『なるほど、この男は調査の概要は知っているらしい。どこまで話してよい

のかはわからないが』

「むろん、知っているさ。ただ学術的な調査だけなら、今までもしているので、問題ないと考えるが」

「それはどうかな。今後の動きにもよると思うが、少なくとも皇帝の要請は学術調査では収まらないのではないかな」

『ふむふむ。その程度までしか知らないと言うことか。何となくわかったぞ』

「自分は大丈夫と信じてる」

「そういうのが危険なのさ。まあ、いい。最善を尽くすのみだ」

そういう心配とは裏腹に、しばらくは好天でのんびりした旅であった。

ウゾーニはそれ見たことかと言わんばかり。楽しそうにパイプを燻らしながら本を読み、ときどき得意げにアンドリューを見遣る。

アンドリューはただシガリロをくわえながら窓の外を見ていた。

「ところで、ウゾーニ、文献学ってのは、何をするんだ?」

「ははーん」

顎を上げて得意の表情を浮かべる。その『ははーん』には、そんなことも知らないのかという感じがありありとにじみ出ている。

「昔の文章を研究するのさ。
僕の場合はだね、原典考証を専門としている」
「それは何なんだ？」
「ま、簡単に言えば、いくつかの異なる写本を研究して、失われた本来の原典を再現するのさ」
「へー、面白そうだな」
「ま、君には、想像も尽かないだろうけどね」
「そうかもな。じゃ、難しく言うとどうなるんだ？」

「ん？

ま、ええっと、そうだな、だいたい、そういうような感じだ」

「ふふん」

アンドリューがにんまりすると、ウゾーニは気分を害し、しばし沈黙が続く。

しかし、やがて、

「わかっている人間にとっては、わかり切ったことっていうものは、反って説明しにくいものさ」

今ごろになって唐突にさっきの続きを言うのか、という気持ちをおくびにも見せず、

「だろうね」

と、いかにもその辺のことはよくわかってるよという、わざとらしい顔でうなずくアンドリュー。

「ふん。

ところで、アンドリュー、君の名前はどう綴るんだ？」

「綴るも何も、安呶劉（アンドリュー）って書くんだ」

「へえ、じゃ、エステ（東大陸）の人間か」
東大陸には漢字を使う民族が多い。
「僕の名前を漢字ではどう書くんだ？」
「〝有象二〟だな。有象無象（うぞうむぞう）（「すべてのもの」の意）の有象さ」
「面白い。今後、サインにはそれを使おう。
ちなみに、エステのどの辺かね？」
「リョフ（龍不）という国だ。オウルダムという町がある。知らないだろう。
で、ウゾーニ、あんたの出身は？」

「僕は生粋の島人だ。フロンク王国で生まれ、そこで育った。メロヴィングという村だ。カロリングやクロヴィスという村にいたこともある」

「家族はフロンクに残したのか？」

「家族のことは知らない。物心ついたときにはもう親戚の家をたらい回しだった。その方が良かったのさ。お蔭で無事だし、大学も卒業できた。

兄弟はいたかもしれないが、わからない。第一子以外の子はすべて他所の家の子に（養子縁組ってことかな）してしまうのが、我が家の習わしと言うことらしい。

こどものころ、そういうふうに聞いた」
「変わった家だな。
まあ、そいつはまた、大変だったな。親を探したか？」
「そういう時もあった」
「何かわかったか？」
「まあね。
でも、君に言う必要はない」
「そうだな。アラン国には、何で？」

「ユブロ大学に進学するためだ。どういうわけか、あの当時に限って、いい奨学金制度があった。

ユブロの教員になるという条件がついていたが、むしろ、望むところだったね」

「なるほど。ユブロの教員になりたがる奴は少ないのか？」

「そうでもないさ。優秀な人材もいる。僕のようにね」

「そうだろうな。

何でアルペジアがあんたを抜擢したのか、不思議に思っているんだ」

「むろん、天才だからさ」
「天才は多い。でも、何で、あんたなんだ？」
「そんなに稀有なことかね？」
「俺はそう思う」
その後は再び沈黙に戻ってしまった。
太陽が傾き始めた頃、ヴィンチ村に着いた。大きなホテルはなかったが、立派な旅籠があったのでそこに泊まることとする。最初、満室でと断られたが、アンドリューが交渉し、結果的には二つ部屋を取った。

予備にキープしている部屋ということらしい。

一階の食堂でジビエ料理の後、ウゾーニはフロアの暖炉の前でスコッチを舐めながら本を読むうちに眠くなり、部屋に上がってベッドに入った。

何かに気がついて目を覚ます。何だろう？　耳を澄ました。

深い闇。漆黒しかない。

雨だ。いつの間にか激しく降っている。いや、それだけじゃない。

ドアが開いた。心臓が高鳴る。緊張しながら、そっとベッドから起き上がる。何か武器になる物はないか？

「俺だ。ウゾーニ」
「何だ、アンドリューか」
ほっとする。しかし、
「そうだ。急げ、ここを出るんだ。５秒で着替えろ」
「ムリだろ」
「早くしろ」
「何があった？」
「聞こえないか。蹄の音だ。今にも」

激しい雨に半ばかき消されつつも、ばたん！という大きな音がする。
「宿の門扉が壊された。早くしろ！」
アンドリューはそっと窓から外をのぞく。
「今、玄関の前に馬を止めた。入って来るぞ。もう、この窓から逃げるしかない」
「この雨の中をか！　名案とは言いがたいぞ」
暗闇の中、ザアザアと音を立てて降り頻る雨を見遣る。
「そうだ。だが、考える暇はない。行動のときだ。

ちっ、そんなことより奴ら、見張りを一人残しやがる、ちくしょう。
ウゾーニ、いいか、人生のどんなときよりも、焦るな。急げ。慎重に行動するんだ。いいか、出るぞ、気がつかれないように」
静かに半分だけ窓を開け、土砂降りの中、そっと出る。カーテンが舞い上がり、風が吹き込む。
「馭者や馬車は」
「捨て置くしかない」
「しかし、そんなことをしては」

「駅者まで殺しはすまい。いたぶって、行先を聞き出すくらいさ。これ以上、もう言うな」

「しかし」

アンドリューは応えなかった。窓の外の闇に姿を消す。

「うわ、待ってくれ」

ウゾーニも表に出た。『うひゃ』　冷たい！

たちまち服はびしょ濡れだ。頭巾とマントに全身を包み隠す騎乗の見張りの姿が眼に入る。こちらの動きに気がついていないようだが、頭巾の奥が暗

くて、どこを見ているのか、いや、どちらを向いているのかさえよくわからない。顔がないように見えた。

玄関の扉を破壊する音がする。物を薙ぎ倒しながらエントランスをドタバタと進み、階段を駈け上がる音。

ウゾーニはもう無我夢中だった。

庇の屋根を忍び足で小走りに走り、雨どいから降りて裏口から街道に出る。すると、旅籠の庭から馬のいななきが！　蹄の音もする。玄関を発ち、門から街道に出ようとしている。

「来るぞ。もう俺らがいないってわかったんだ。道はだめだ」

アンドリューが草薮に突っ込む。ウゾーニも従うしかなかった。考える余裕はない。

「草の音を立てるな」

雨と濡れた草と小枝と泥濘のせいで、びしょびしょのどろどろ、さっきまでの優雅さはどこへやら、無残な姿であった。

中腰で音を立てぬよう、足場の悪い雑木林の草薮を奔る。ウゾーニは髪も乱れ、顔もくしゃくしゃで、息をぜいぜいさせ、

「ま、待ってくれ、アンドリュー、少し休もう、少し」
「そうだな。
休もう。猟犬を連れている様子はなかったから、こういうふうにしていれば、おいそれとは見つからない・・・ことを祈ろう」
「ぶるるっ」
濡れたせいで、急激に体温が奪われている、からだが凍えた。その上、へとへとのくたくただった。
「まずいなあ・・・」

アンドリューも震えながら独りごつ。

胸の内ポケットを探っていたウゾーニががっかりした声を出す。

「あゝ、葉巻もパイプの刻み葉も、ぐちゃぐちゃだ…何てこった…」

アンドリューは呆れたように鼻で笑った。『少し安心すると人は生活を思い出すものだ』と思い、少し安堵。

ウゾーニはむっとする。でも、

「あ！」

声を出さず叫ぶ。

馬の蹄の音。

「莫迦な」

息を殺し、耳を澄ます。

「思ったより、街道が近いようだ」

アンドリューがかすれ声で小さく言う。

蹄の音が止まった。まさか！

往ったり、来たりしながら何かを探っている。

ほんの十数秒であっただろう、数時間のように感じられた。静かに蹄が遠

ざかる音がした……

「よかったな。往ってしまったようだ」

「いや。

アンドリュー、念のため、もう少しだけ、じっとしていよう」

「…そうか。そうだな。わかった。いいだろう」

五分。

いきなり馬のいななきとともに、数頭の馬が立ち去る蹄の音。

血の気が引いた。震えながらウゾーニが言う、

「いるはずないが、念のためにと思っただけだったんだ…何と本当にいたのか！　あゝ、怖ろしい。奴ら、きっと息をひそめて様子をうかがっていたに違いない！　待ってよかった、本当によかった！」

安堵で脱力しながらも、恐怖で震えている。

「そうだな。幸運だったとしか言いようがない。あんたに礼を言わなければいけないな。しかし、奴ら、何でわかるのか」

「嗅覚か、気配なんだろう、たぶん」

「うむ、それ以外考えられない。俺らが相手にしている奴らは普通じゃない

ことを肝に銘じておかないといけないな」

「いったい、何者なんだ」

「不可侵領域ハイリッヒトゥムの〝守り〟の眷属さ。だとしたら、ああいう異能も説明がつくだろ。

不正な方法で神のセキュリティを破ろうとする者には神罰があるのさ」

「そんな莫迦な」

「不信心者だな」

そう言って笑うアンドリューにウゾーニは真顔で、

「本当に、神なら僕なんか即殺さ。
神のはずがない」
意味を理解してアンドリューが歎息混じりに、
「ふう。…そうでもないさ。
そんなことしたら、世の中は面白くないだろ。考えてもみろよ。
なら、悪人を即殺して、生まれてくる人間をすべて善人にすればよい。神ならできる。なぜ、しないか、あんたに答えられるか」
「あゝ、わかったよ。もういい。神慮は計り難い。そういうことだろ？　通

俗な説だな。もうたくさんだ。凍えそうなのに、そんな悠長な議論する気になれない」

「あんたが振った話だろ」

「そうさ。でも、どうでもいい。

ともかく、あゝ、そうだな、これ以上動くのは止めよう。どうかな？凍死しそうだが」

「動けばからだも暖まるような気もするが…、一理あるな。

確かに、今は動けない。仕方ない。じっとしていよう。ちょっと死にそう

なくらいなだけだ」

「あとはどうする？　つまり、明日以降だが」

「ともかく朝を持とう。朝になったら、郵便を出せるところを探して、手紙を出すんだ。護衛が捜し出してくれる。

今もこっちへ向かっているはずなんだ。そんなに遠くにいない。遠くにいないが、こんなことになっているとは知らない。

それを手紙で知らせるんだ」

「わかった。希望の欠片が見えたような気がする。

気のせいかもしれないが」

「まあ、そんなもんさ。

それより、あそこへ移動しよう」

少し移動して大樹の陰に身を寄せる。何の足しにもならないが、やや雨のあたりが弱まる。それぐらいしかなかった。

日が昇ると、冷たさは極まる。

「歩こう。、もういいだろう。よく気をつけて歩けば」

「…そうだな、動けば少しは体温が上がる…かもな」

二人は森や山間を彷徨った。どこを歩いているかわからない。空腹だった。

ウゾーニは疲労困憊し、

「アンドリュー、もうだめだ」

「弱音を吐くのが早過ぎるぜ、ウゾーニ」

道なき山奥で、打ち棄てられた小さな、崩れた木こり小屋を発見する。

「あゝ、極楽だ」

乾いた藁があったのだ。二人はそこで、ぐっすり眠った。

眼が覚めると、再び激しい雨が降っていた。夜だった。

「ここで足止めか」
ウゾーニがうつろにつぶやいた。
そのときだ。
「静かに！」
遠くに蹄の音が聞こえたのだ。
「アンドリュー！」
「黙って、とにかく静かに。藁に潜るんだ」
蹄の音を聞き分ける力なんてない。

あの音があいつらかどうかの区別なんかできない。
でも、それがあいつらのものであることがはっきりわかっていた。身を潜め、静かに静かに待つ。待つしかない。
音は次第に遠のき、山々の遠い夜の闇に消えていった。
それでもウゾーニもアンドリューも動けなかった。
お互い何も確認するまでもなく、じっとし続けた。
雨の中にもかすかに黎明を感じる頃になって、ようやくアンドリューが藁の音を立てずに首を上げる。

「行ったようだな」
「助かったのか？」
「そのようだな」
「あゝ」
魂の底から安堵の歎息をする。
雨は翌々日まで止まず、ようやく乾いてきたマッチで葉巻を吸うも、湿気っていてまずい。
「ないよりはましさ」

アンドリューが缺け毀たれた素焼きの壺を見つけて、うまく雨水を溜め、木の実を茹でた。食べる。

「とてもうまいような気がする」

ウゾーニは久々の食事に涙が零れた。

郵便局のある村を見つけたのは、雨が止んだ日の翌々日だった。

雑木林と村の境から、家屋の裏庭の藪を匍匐して、裏道に出る。様子を見ながら、慎重に歩いた。よく気をつけて、広い路には出ないようにした。幸いなことに、郵便局は路地にひっそり建っていた。

「あった、あった。あそこだ。あれだ、俺が行くから、あんたは見張っていてくれ」

道を横断し、入って行く。

数分後、局を出たアンドリューを街角の陰から見ていたウゾーニは激しく手招きをする。

「早く、早く」

黒い頭巾とマントで騎乗する人物が２００m離れたところにいることに気がついたからだ。

アンドリューもウゾーニの様子から何事かを覚り、血相を変えて走って、路地のさらに裏に身を隠す。

「見られたかな」

「たぶん」

全力疾走で二人は雑木林に突っ込んだ。無我夢中で突っ走る。獣道を使うことすらも避けた。絶対に何者も往かないようなところを選び、突っ込み、突っ走った。山を登って下からは見えぬ岩棚に着くと、倒れ込む。

「ここならいいだろう」

アンドリューが言った、ぜいぜいしながら。
ウゾーニも返事もできない。
二人とも何時間も放心状態であった、
夜に雨が降り、ずぶ濡れになると、まるで最初に回帰した錯覚が起こる。
すべてが振り出しに戻った感じがした。

第8章　傭兵たち　―まずは武力を―

もう一生このまんまなんじゃないかと思えた日々もわずか数日であった。兜からはみ出す髪を靡かせる荒武者が数騎が来て、泥まみれで凍えている二人を雑木林の奥に発見し、麻布に包んで隠し運んだ。郵便を出した翌々日だった。

数十キロメートル離れた山奥まで来ると、念を入りに周囲に敵がいないかを偵察した上で、素朴な野営地を作り、焚火で二人を暖めた。

ウゾーニはバーボンをもらって、血の気が戻るのを感じる。木のコップで

アンドリューと乾杯した。

魂も、自分も、欲も甦る。自然と人間らしい気持ちになり、笑顔になる。

「あゝ、最高だな、アンドリュー。フレーバーがたまらない。オークの樽の香りまで感じられる」

「あゝ、そうだな。俺もこんなに旨い安酒は呑んだことがない」

お互いに肩を叩いて意味もなく、笑った。杯を重ねる。

一時の苦労がまるで二十年来の親友のようにさせた。

しばらくしてから思い出したように、アンドリューは振り返り、隊長らし

き男に声を掛ける。

「ストランド、あんただけでもウゾーニに自己紹介してくれ」

そう言われた男は近づいて来た。

背が高く髭を生やした長髪の男。二十代後半か。痩身だが、鋼のように精悍だ。

「ストランドと言います。ガリア・コマータの隊長です」

「何と！」

ウゾーニは愕いた。

長髪のガリアを意味するガリア・コマータは、ノルテ（北大陸）で活躍する有名な傭兵隊だ。

確かに皆からだが大きく、筋骨たくましい。表情も厳しく、精悍な者たちばかりだ。鬚を蓄え、鋲を打った鉄の兜に獣の角をつけている。獣の毛皮のマントを羽織り、革鎧は胸筋や腹筋のかたちを象っている。

からだの一部のように、龍馬を巧みに操った。

動くたびにベルトの金具や幅広の鞘や、鎧の金具などがぶつかるため、近づいてくると、重金属が歩いて来たかのような感がある。

剣をガチャガチャ鳴らし、ガラガラ声で呶鳴り、大きな手でハイタッチしては、

「やっちまえ！　マック」

「やったぜ、イエイ！」

奇声を上げて大木を殴ると、樹幹が拳のかたちに凹む。

指笛を鳴らし、

「おい、ウッディー、のろのろしてんじゃねーぞ」

「じゃかましいぜ、ロッキー、俺は上品なのさ」

そう喚いて大哄笑。

常に何かをむしゃむしゃ食ってる奴もいる。

そんな様子をウゾーニは数分ほどつくづく眺めて思った。

「何から何まで外国人なんだな。そりゃ、クルアールの人が大ぴらに関与できないからだろうけれど……」

それはともかく、葉巻はないか」

ストランドは後ろを振り向いて部下に呶鳴った。

「葉巻だ！」

「へい、了解です、隊長！」

ストランドは再びウゾーニの方へ顔を戻して、にっこり微笑み、

「葉巻はたんとありますよ。

俺らは虻除けに使っています」

「ありがたい。

ついでに、パイプ用の刻み草もあると、幸せの極致の極上なんだが」

食事は簡素で、干し肉とワインだけである。それでも、彼らは豪快に、たらふく食べた。

ワインは革袋から木のコップに注いだ。

「たんと呑んでください、こいつだけはたっぷり持ってきました」

そう言って哄笑する大髭の大男。

ウゾーニは借りた兜を枕に、革のコートに包まって眠る。靴は脱がない。皆、地面に平気でごろ寝する。

さて、アンドリューは置き去りにした駅者と馬車とを気にする余裕ができたので、調べてもらうと、馬車は旅籠に残されていることがわかった。

しかし、取りに戻るのはいかにも愚行であろう。当面は馬に乗って移動す

ることとなり、ウゾーニは騎馬に乗る練習を兼ねて出発した。

駅者は行方知れずである。

マンゾー村でペンと紙を買うと、アンドリューは紙に文を認め、サインした。封に入れて兵の一人に渡し、クルアールの大使館に持って行くよう命じる。

「郷里の家族に年金を支給するように書いた指令書だ」

ウゾーニの方を振り向かずそう言った。

旅を再開する。と言っても、街道を通らない。

「この人数では、いざというとき、太刀打ちできない。敵もいつまでも少人数とは限らない。軍隊の呈をなすまでは、当分の間、道ならぬ道を往こう」

アンドリューが言う。一同は獣道を進む。数日が過ぎ、或るとき、ふとウゾーニは気配を感じた。

地鳴りのような異様な威圧感、緊迫を強いる雰囲気がある。

一同が焚火を囲んでいたときだ。

その男は現れた。

「彼も俺が雇った傭兵さ。独りの軍隊だ」

そう言いながらアンドリューは立ち上がった。
黒い皮革のスーツを着ている。サングラスで表情は見せない。レーヴン・〝マリー〟・ブリード。そういう名だった。
「何で〝マリー〟なんて言うんだ？」
「ブラッディ・マリー（血まみれのメアリーBloody Mary）のことさ。ウゾーニよ、彼はかつて『屍の軍団』だったんだ。これで千人の軍隊を得たよりも心強いぜ」
『屍の軍団』とは、ノルテ（北大陸）にある宗教国家にして超大国、神聖シ

ルヴィエ帝国の特殊部隊で、聖教のために命を捨て、生きながら屍のごとくに死を恐れず闘うため、諸国から怖れられる無敵戦士で、苛烈な訓練を経て、尋常ならざる身体能力とスキルを持ち、独りで千人の武装軍を凌ぐとさえ言われている。

ウゾーニは彼を見ながら、何となく、凄惨な人生の背景があるのだろうな、と空想した。

ストランドは握手しようと〝マリー〟の方へ手を伸ばしたが、無表情な男は何の反応も示さなかった。傭兵隊長は肩をすくめ、再び坐る。

彼はほとんど言葉を発しなかった。

それぱかりか普段は姿も見せない。だが、必ず傍にいることがわかった。

山奥をかきわけて進んでいたときだ。

「おい、気をつけろ」

突如、グリズリー（灰色熊）が現れた。立ち上がった丈は４ｍを超えている。

ウゾーニは腰を抜かした。アンドリューが助け起こそうとする。ガリア・コマータたちは一斉に剣を抜いた。

〝マリー〟が突如現れ、グリズリーの前に立ちふさがる。
狂憤して襲い掛かる猛獣の顎を拳で殴る。そのスピード、ぶぅおんと空を切り裂く音も凄まじく、雷撃のように熊を一撃で弾き飛ばし、殺した。
手刀突き刺し、頑丈な毛皮と分厚い皮下脂肪と硬い筋骨を貫いて肝臓を取り出し、むしゃむしゃ食べる。
呆気に取られている仲間が我に返った頃にはまた姿を消していた。
ストランドが近付いて灰色熊を調べる。
「即死ですね。

顎も頭蓋骨も砕けて脳漿が飛び出した眼の跡から流れ出ている。脳もね」

ナイフで皮を裂き、内臓を晒す。

「おい、ジョニー」

部下の兵を呼ぶ。

「はい」

赤い巻き毛で雀斑だらけの若い傭兵（まだ少年と言っていい）が返事をする。

「解体して鍋にしよう。今日食べる分以外は塩に漬けて保存しろ。皮は剥い

で、近くの農家に売るんだ。

わかったな？」

「はい」

数日後、ガリア・コマータの人数が増えた。その次の日には大幅に増え、総勢百人を超えた。

「これだけいれば」

アンドリューが言う。

「もう隠密行動の必要はないな。敵が来ても対応できる」

ウゾーニもうなずき、

「戦争ができるくらいのレベルだ」

「あゝ、そうさ。

それに、幸か不幸か、皇帝の死のせいでどこも騒然として軍が動いているし、街道は逃げる民衆や王侯貴族の馬車と彼らのお供の者どもでいっぱいだからな。

俺たちが百人ぐらいで移動していても、まったく目立たない」

街道を轟々と進む。この辺は、人でいっぱいになるほどではない。いつも

より多いかなと思わせる程度だ。

鬱蒼とした森の中に入る。紅葉も落葉もない森だった。それでも春の暖かさがある。鞍の皮の匂いがほんのりと昇り立つようにも感じた。

ウゾーニは騎乗で、旅行のように周囲を眺めつつ、楽しむ。しかし、そんな夢を破るかのように、

「間もなく国境だ。ローディンに入るぞ」

アンドリューがそう言った。

外国人なのに詳しいなと、ウゾーニは内心では感心するも、ふと、百数十

m先に高い木の柵があり、装甲した兵士が槍を持って、数十人立っているのが見え、驚いた。

「あれは何だ？」

ウゾーニが言うと、アンドリューが、

「見てのとおりだ。関所さ」

ストランドもうなずき、

「戦争になるかもしれない状況ですから。今までなかったのが不思議なくらいです」

そう言って、寸前で隊を止める。

旅人は集団ごとに検閲を受け、身許や目的や所持物などを改められていた。順番が来るまでは列を作って待つ。呼ばれると、柵の傍らにある建物に入り、質問を受け、荷物や持参している書類などを見せなければならない。

傭兵隊や義勇軍などが数十人単位で行軍する場合は、その目的によって、通行が赦されず、追い返された。だが、数百人単位や、どこかの国の正規軍であれば、制止はできなかったであろう。幸い、今のところそういう実例がないだけのことだ。ただし、どこかの国の正規軍ならば、いずれは国同士の

戦争になるが。

さて、帝国のある方角から反対の遠い方へと遁れる人が多いから、ローディンからアランに行く方は長い列をなしているが、逆はほとんどない。

アンドリューが独り進み出た。

「正直な話はできない。ここは俺の仕事だ。適当な説明をする。少し待て」

皆思い思いに待った。ウゾーニは木陰で本を読む。

数名のガリア・コマータは自然に散歩するような感じで、さり気なく周囲をチェックした。

「特に危険はなさそうです。
まあ、あまり遠くに離れては役人に怪しまれるので近くしか見ていませんが」
ストランドがそう報告する。
「何か作りましょうか」
ボーナムという中堅のガリア・コマータがニコニコしながら大きな鍋を出し、ポトフを作った。ウゾーニは賞味し、コップでバーボンを呷る。
数時間待たされたが、無事通過できた。

不思議に思って、ウゾーニが騎乗で訊く。
「何て言ったんだ？」
物憂げに振り返り、
「そうさな、帝国の奸臣フランク王を討伐に行く、そういう感じの義勇兵だ、っていうようなことを、まあ、いろいろと言ってみたのさ」
「なるほどね」
「奴らだけでは決めかねたらしく、上の連中に確認しに行ったらしい。それで少々時間がかかった」

「ふん。いつも思っていたことだが、普通の人間の納得なんて、まったくいい加減なものだ」

「ちょっとしたニュアンスの違いで物事ってのは方向を変える。それは確かにある。

だから、説得力は伝える側の気持ちの問題でもある。

今回は、相手の求めているものがはっきりわかっていたから、簡単だったな。

どこの王も、自分が覇権をなそうと野望していて、自分の国以外の国を叩

くと言えば、悪い気はしない。

特にフランクのように、帝都に近くて、不可侵領域にも近く、国も強大である国を叩くとか言えば、大々歓迎だろ？

義勇兵なら、特に証明もないのが普通だからな、この島では」

「へー、他の土地では証明が必要なのか」

ウゾーニは好奇心を駈られ、そう尋ねた。

「教会や王の許可や、又は義勇兵の発起人の起請文、誓約書、血判状などの提出を求められる場合がある」

「ふうん。世界中のことを知っているんだな」
「まあな」
「僕も見てみたいものだ。人の空想は無限だという者もいるが、書物だけではなかなかわからない。叡知なんて儚いものだ」
森を抜けて、彼らは草原の海に緑濃い森が点在する丘陵地帯を逝く。やがて、荒涼たる高地が現れた。わずかにヒースが風に揺れる土地。この季節、すべてが枯れ果てていた。岩は非情を露呈する。乾いていた。殺伐たる風景、血を吸っていない土地などない。

どこもかしこも古戦場だ。寒さを感じた。

第9章　馬車の旅　―次は食糧を―

道は一時よりも、避難民の数が減り、旅は順調だった。
荒涼たる岩だらけの街道を行く。
路の傍らに、唐突に一台の立派な馬車があった。

勇ましい龍馬が繋がれ、その見事さ。
「来た、来た」
アンドリューが嬉しそうに言った。
「騎乗の旅は飽き飽きしていたからな」
「これが僕らの乗る馬車なのかい？」
ウゾーニは眼を丸くした。
「こりゃ、贅沢過ぎるな。
調査旅行ではないみたいだ。まるで大名の物見遊山だな」

「何だ、不満か？　替えてやってもいいぞ、もっと貧相な、ストイックなものに」
「いや、ま、それも手を煩わせるから、そうだな、ま、仕方ない、僕は構わないよ、これでいい」
「そりゃ、どうも」
アンドリューは嘲笑を泛べた。
馬車はかなりの大型で、七頭の龍馬が牽いている。
龍馬とは、龍と馬との間に生まれる半神獣で、駿馬の数倍から数百倍の身

体能力を持ち、翔けるように走って、千里（四〇〇〇㎞）を一日で駈けた（平均時速一六七㎞）。蹄が龍爪になっていて、断崖を上ることもできる。十頭の馬で運ぶ荷車も、一頭で軽々と牽き、空身の馬よりも速かった。鬣が長いのが特徴である。

馬車は普通のものよりも幅があり、太い四輪にはオーバー・フェンダーを備えていた。前後のフェンダーは繋がっている。そこに欄干がついていて、まるで縁側か、外づけの廻廊のようであった。

屋根と後部に大きな荷台があり、特に後部の荷台はバルコニーのように広

い。転落防止の鉄条の柵がついていた。

全体が取り外し可能なモジュラー装甲で装甲されている。

弩（おおゆみ）が設置されていた。馭者席の両側に一台ずつの計二台、屋根の荷台の前後に四台ずつの計八台、後部の大荷台に四台、全部で十四台である。

ウゾーニは特に内装が気に入った。

主賓室は、あざやかな繻子と白く柔らかい革張りと、繊細な黄金の細工装飾、象牙の取っ手、マホガニーやメイプルなどのパネルがふんだんに使われている。

深く坐り、パイプを燻らしながら、コニャックを舐めた。

主賓室の後には仕切りがあって、簡素だが、座席とテーブルと書庫があり、作戦会議室と呼ばれる。

その後にも仕切りがあり、作業台と戸棚・保存庫があって、調理室と呼ばれた。焼いた石を入れる籠（内側が鉄で外側が木製）があり、火を熾さずに湯を沸かすことや、煮炊きなどができた。

なお、そこは武具の修理など簡単な作業場も兼ねる。

馬車とともに、五人の男が旅に加わることとなった。

シフネとボーノとリオンとレオンとリュージュである。いずれも質素な鎧の剣士だが、調理人や馭者や鍛冶屋を兼ねていた。

太ったからだに宗教者のような貫頭衣を着た若い男がシフネで、いつも微笑を湛えているような円満な顔をしている。屈託のない表情で、たらふく食べさせてくれそうな料理人だった。

「この季節は山鳩やカモがいいですね。いやいや、本当は熟練のスタッフを連れて来たかったのですが、どうにも間に合わず・・・

まあ、ここにいる傭兵さんたちを少し仕込もうかな、と思っています」

そう言った。

ボーノは剣士と鍛冶・大工を兼ねる工匠戦士で、真っ赤な長髪を靡かせ、普段着も革の鎧で、全体的に唐紅を多用し、古代唐朝の戦闘衣のようであった。武具や馬車の修理を行うとのことである。

ぶっきらぼうな職人気質の男であった。濃い眉毛が強情そうだ。

「ウゾーニ、あなたにも剣を誂えようか」

「ふ。僕は結構」

その後、巻き髪の派手好きな洒落者の青年が挨拶した。

「リオンと言います。どうかよろしくお願いします。あゝ、素敵な香水ですね。

オー・ド・アクリオンですか？」

安い香水の名を当てられたのでウゾーニは不機嫌な顔になり、

「さてね。

何だか忘れましたよ。僕は質実剛健な性質でね。

ちゃらちゃらした香水なんかに興味はないのだよ」

リオンの後に控えていたのが、さらさらした柔らかい髪のレオンで、内気

な感じの繊細な青年であった。

「よろしくお願いします」

最後のリュージュは挨拶に来なかったので、ウゾーニはしばらく観察していた。

氷柱のような髪を持った青年だ。

まなざしの冷たい強者という印象を受けた。

龍馬の手綱を確認し、馬車のサスペンションを手で触っている。ガリア・コマータたちから、声を掛けられもしたが、返事すらせず、（自分も似たよ

うな者なのに）ウゾーニは生意気な奴だと結論づけた。
愛想の欠片もなく、不退転な無表情さがあり、どことなく冷笑的で、二十代半ばくらい、リオンやレオンよりは年上だ。
なお、リオンもレオンもリュージュも剣士兼馭者である。
「どうだい？」
アンドリューがウゾーニの感想を訊いてきた。
「別に」
「そうか、ちなみに、彼らも」

五人ともノルテの出身であると聞いて、ウゾーニは眉を顰めた。

「クルアールの者を雇うわけにはいかないだろうが、だからって、違う大陸の人間をこんなに雇うことはないと思うけどなあ。本当に信頼できるのだろうか。まあ、どうでもいいか。

アンドリューとは上手くいってるし」

アンドリューが合わせてやっているのだが……

再び快適となった旅が始まって早々に、豪農の家があったので、さっそくアンドリューが降りて、熊の生毛皮を売り込みに訪ねる。

「僕も行っていいかな」
「構わんよ、ウゾーニ」
「では、私もお供しましょう」
ニコニコしながら太っちょ貫頭衣のシフネも降りて来た。
敷地に入りながら、ウゾーニは眼ざとく、ヤギが放し飼いになっているのを見つけた。
「シフネ、君は料理人ということだが、どう思う」
「おいしいチーズが期待できますね」

「同感だ。僕は濃厚なヤギのチーズが大好きなんだ」
「それに、あの斜面をご覧ください」
見事な葡萄畑が見えた。
「最高だね。生ハムもあるといいんだが」
「ありますね。勘ですが、そう感じます。
私はかつてバール（立ち飲みを中心とした庶民の酒場。イギリスのパブのようなもの）を営んでいたときがあったんですが、休みの度に田舎の農家を廻って、秘蔵のチーズやワインや生ハムやソーセージを買いつけるのが趣味

でした。

その経験から言わせてもらえば、この雰囲気は抜群です」

アンドリューが主人と交渉を始めると、ウゾーニとシフネはおかみさんをつかまえ、

「さぞかしおいしいチーズがあるんでしょうな」

などとお世辞を言い、案内してもらう。

地下にはチーズの保存庫やワインセラーがあった。チーズにもいくつかの種類がある。シフネは味見をし、

「うーん、芳醇だ。何て豊かなんだ」

シフネは相当気に入り、

「早くワインと合わせたいですね」

そう言って満面の笑み。かなりの量を買い取った。

農場主も大いに喜ぶ。自作を褒められたうえに、たくさんの現金が手に入るのだ。歓ばないわけがない。どこの農家にとっても、現金収入は魅力なのだ。

ワインセラーを見るなり、ウゾーニは大いに気に入った。

壁面は石灰質の土壌で、さらに石灰の粉が塗って在り余計な菌の繁殖を防いでいる。

樽は何十年も使ったもので、ワインの生命となる微生物が何代にも亘って住みついて、彼らにとっては楽園に違いない。

試飲した結果も文句なしだ。樽ごと買う。帝国の資金は潤沢であった。

「華やかな香り、タンニンの渋み、強めのアルコール度、芳醇な味わい、ボディもしっかりしている」

「こういう掘り出し物があるから田舎廻りは止められないのさ」

シフネがほくほくした顔で言う。
生ハムも熟成して滋味豊かであった。
「原木を数本買おう」
「原木？」
「意外ですね、ウゾーニ、あなたが知らないなんて。
どうやらスライスされた生ハムしか見たことがないようですね。
スライスされる前の生ハム、つまり、塩漬けにしてから低温で燻煙し、熟成させた豚足、又は塩漬け後、（燻煙せず）乾燥させて熟成させた豚足は、

水分が抜けて固く、見た目が木のようなので、原木と呼ぶんですよ」

「あゝ、そうだったな。

むろん、知っていたさ」

「そうだと思いました」

その夜の野宿は贅沢なものになり、いつもは厳しい傭兵たちも上機嫌であった。ウゾーニはブルーチーズをつまみにスコッチをちびちび舐める。

二時間おきの見張りと偵察も少々酒気を帯びていた。ひと時の幸福な時間である。

翌日夕方、久々に大きな街に着いた。
ヴィヨンという都市だ。

第10章　攻城作戦　地を這う

「はあ、こりゃ、凄(すげ)えなあ、恐い、恐い」
舵を取りながら、ジャックは湖から眺めてそう言った。

不陥落城ウロヴォスを蔵する不可侵領域ハイリッヒトゥムは異様な構造をしている。

渦巻き状に連なるウォール山という山がなす渦巻きの最奥中心部に城があり、城が山によって渦巻き状に取り囲まれるような構造になっていた。

しかも、山は壁のように四十五度から九十度までの角度をなす絶壁で、まるで人工物のようでもある。

「ともかくも、トムと合流を急ごう」

スミスがそう言いながら、櫂で漕ぐ。相棒のジムは黙って漕いでいる。

「あゝ、遅れちまったなあ」

ウォール山の前にはシス湖という湖があった。

彼らは今、その湖にいる。

眼の前には不気味な岩の岬があった。

渦巻きをなすウォール山の、その渦の始まりは、この湖から立ち上がって、岬をなしている。

その形が蛇の頭に似ていたので、蛇頭岬と言った。

確かに、二対の大きな洞穴が眼窩のようだし、少しせり上がって左右に小

さな洞窟がある先端部など、まるで鼻先のようである。

まさしくそのありさまは、湖面に、生気も動きもない巨大な蛇の骸の頭が乗っかっているかのようであった。

「あの岬を超えると、蛇の関という、左右をウォール山の絶壁に挟まれた蛇の関というのがあるんだ。

つまり、ぐるっと連なり廻ってきた山が、再び初発であった蛇頭岬の首肩の部分とかち合うところ、渦巻きの巻込の最初の部分、螺旋の入口の部分、通称『渦巻きの通廊』という場所だ。

その先は、左右を絶壁のウォール山に挟まれたまま、螺旋状に奥へ奥へと進む通廊のようなので、その名がある。

通廊をぐるぐると廻って行けば、最後に行き着くのが峰だ。最終の目的がある」

そこが不可侵領域ハイリッヒトゥムの中心であった。

最真奥部の峻険な峰を尾蛇峰と言う。

不陥落城ウロヴォス城はその峰に鋭利な尖塔を持って聳えるのであった。

「これから、凄まじい難儀だな」

ジムが溜め息混じりに言う。もう何度目だろう、それを言うのは。

しかし、それもゆえないことではない。

ここを攻める者は渦に沿って、ぐるぐる廻りながら進まなくてはならないが、ウォール山の絶壁の各所に貼りつくように城砦がいくつもあり、攻撃を仕掛けてくるため、大いに難儀する。

しかもその砦の数は、外側だけでも九十九箇所もあった。

渦巻きというのは途中から内側に廻り込んでいくので、どこまでが渦巻きの外側かと言えば、渦の巻込み部分のところまでである。

従って、第一砦と第九十九砦とが、渦の入口である蛇の関を、左右から挟むようなかたちで屹立するのであった。

「しかも、内側に入ってからは、やっぱり絶壁の高いところに砦があって、しかも、それがまた九十九もあるってんだから、こっちは堪んねえよな、おい」

舟の上で弓を持つイワンも愚痴を言った。

蛇の関に入ってから先、すなわち渦巻きの中に入ってからは、ウォール山が左右に峻嶮に聳えることとなる。この左右にも、絶壁にへばりつくように

砦があって、それもまた左右合せて九十九あった。

ちなみに、渦の中心には、半径一kmの平原があり、蛇頭峰はそこに半島のように突き出てあり、不陥落城ウロヴォスが偉容を天に聳やかす。

「ジャック、舵取りしっかり頼むぜ、しっかり、俺ら、クルアール帝国領の岸に着かなくっちゃいけねえんだぜ。

あ、おおっと、危ねえ！　おら、おら、頼むよ」

鱗に長い水藻を生して幽玄で、鯨のような大きな魚がゆったり過ったのだ。

「聞いてねえぞ。

あんな化け物がいるのか」

「早く上陸しようぜ」

「俺らの領土の岸に間違いなく着くんだぞ、いいな」

「おおよ、任せとけって！」

不可侵領域の入り口でもある『渦巻きの通廊』の入り口『蛇の関』に接する岸は三等分され、各々の帝国の領土とされていた。

帝位継承のときもまずは自国の岸に船を寄せるのである。

それとは別に、不可侵領域ハイリッヒトゥムの外周は三等分され、それぞ

れの帝国の守備領域となっていた。

これはウォール山が三つの帝国の領土に対し、平等に接していて、それがハイリッヒトゥムと各帝国との境になっている。すなわち、国境＝渦巻き状のウォール山の外円周ということであった。

クルアールの特殊部隊の兵たちは着岸すると、装備をつけ始める。ハンたちはクルアールの国境側から登ることとなっていた。

そして、アモール軍が護る第一砦を目指す。

なぜそこがアモールの護る砦なのかと言えば、不可侵領域の各帝国との境

となる渦の外側の絶壁は三つの帝国がそれぞれ分担して（自分の帝国以外の帝国の侵略から）護っていた。

渦巻き状の渦をなす山の内側は、神の兵が護っているが、外側は三つの帝国の義務とされていたのである。

蛇の関に向かって右側にある第一砦に始まって、蛇の関に向かって左側にある第九十九砦で終わる、九十九の砦のうち、クルアール帝国国境部分はアモールの直属軍が護っていた。

ちなみに、アモール側はシューニャ軍が護り、シューニャ側はクルアール

軍が護っていた。

すなわち第一から第三十三砦まではアモール、第三十四から第六十六砦までがクルアール、第六十七から第九十九砦までをシューニャが担当し、兵を駐屯させ、防衛の義務を負っている。

夜になり、ハンは岩の色に合わせた布を剥いで活動を始める。岩と同じ色のロープとくさびを出した。

麓はごつごつした岩の累積で、粗い石垣のようだったが、十数mも登ると、壁のようになった。

ちょっとした凹凸を探し、指やつま先を引っかけ、クライミングする。適当なところでくさびを打ち、ロープをかけて垂らした。トムがそれを登って来る。翌日はまた違う仲間がこのロープを登って来るのであった。

ハックも反と同じような作業をする。その後をサムが登る。休憩するときは、ロープにぶら下がった。食事も睡眠もそのようにする。トイレも。

彼らは十分な訓練を積んだが、専門家ではないし、真っ暗闇なので、一日一〇〇m進めばよい方だった。

薄い壁のようなウォール山は麓から平均一kmである。麓から向こう側の麓

までの距離は何と二〇〇mくらいしかない。まるで人工物のようであった。

尾根までは十二、三日を予定している。

一週間ほどして。

「近くなってきたな」

ハックが言った。鬚は伸び放題だ。

「ああ、そうだな」

サムが応えながら、スキットボトルのバーボンを呷った。

二人が見ているのは、外（側）第一砦と呼ばれる砦であった。岩と同じ色

で、窓が少ないが、銃眼が多く、それが冷徹な眼のようだった。
不気味な、無表情な建物である。
ただ風のびゅうびゅうと唸る音しか聞こえない。

第一砦のアモール帝国の守備隊の兵卒、偉丈夫のティラノスは城壁の上を歩き、鋼の装甲で巡回をしていた。
「う、何か聞こえたぞ」
そう言いながら振り向いた途端、黒い影に襲われ斃れる。

「よし、上って来い」

簡素な革鎧のみで、筋骨たくましいクルアール帝国特殊部隊のサムはハックに向かって言った。

「わかった」

彼らは二、三人で一チームを作り、眼も眩むような絶壁にさらに九〇度以上の角度で建つ第一砦の城壁を素手で登る任務を命ぜられていた。

一つの城砦に守備兵は三十人ほどしかいない。

トムのような特殊部隊のチームが二〇〇〇チームで一連隊をなし、波状的

に侵入を始めていた。

その総数は実に五連隊もあった。トムのチームの後からも、後続のチームが次々這い上がってくる。

トムの次に上がってきた部隊は砦の連絡通路を探す。

実は、砦と砦は秘密の連絡通路で結ばれているのだ。

ただし、その通路は帝国単位で仕切られており、他の帝国が守護する砦には行けないようになっていた。

ハックはさらに数百メートル上にある山頂をにらむ。

「さて、次はあそこだ」

彼らは山頂めざし、再び昇り始める。

山頂まで行くと尾根を移動し、内側外側の砦を上から奇襲攻撃する。第一砦の下から登って、（自国の守備範囲の外側第三十四から第六十六の砦を除いて）尾根を渦巻きの奥に向かって移動し、内外のすべての砦の上に布陣する。

ちなみに、自国の領域については、外側の第三十四から第六十六砦の兵がそのまま（職務放棄して）山頂に登り、尾根を移動する予定であった。

さように、蛇尾峰に至るまでの尾根をすべて占拠し、一斉に攻城を開始する。不陥落城をも上から攻城する計画である。

これが彼らの作戦であった。

歴史を顧みれば、通常、不陥落城を攻める者は渦巻きの内側、『渦巻きの通廊』と呼ばれるところを進軍している。

そして、それら過去のすべての軍が殲滅の憂き目を見ていた。

そこで『渦巻きの通廊』を行かずに上から攻めようというのである。

その作戦を初めて聞いたとき、アルペジアは、妹レイアの髪を手ですくい

ながら、そのつややかさと、指の間を滑るさらさらなめらかな感触とを恍惚と楽しんでいた。

天蓋附きのシルクのシーツの上に素足で胡坐をかき、直立する将軍の方を向かないまま、眸の奥に叡知と企みを秘め、言う。

『渦巻きの通廊』は両側を岩壁にはさまれ、その岩壁には神兵の待ち構えるいくつも城砦がある。

上からの攻撃は激烈だ。

だから、その上（山頂から）から攻めるというアイディアは良い。この場

合、単に上から攻めているというだけではない。
守備する側からすれば、想定していない背後からの攻撃だ。これは奇襲と言える。奇襲はタイミングを損なわなければ、効果が大きいのは定石だ。
そういう意味ではよい」
「では、そうでない意味では、いかがでしょう」
大きな口髭を左右に翼のように広げて伸ばしているイスカンデル将軍は勲章で満艦飾の軍服の巨体を屈めて尋ねた。
アルペジアは冷たいまなざしで蔑むように、

「上からの攻撃が激烈だからと言って、それだけの理由で古今東西の英雄や名将の率いた過去のすべての将兵が殲滅したというのは理解しがたい。渦巻き状で逃げ場のない狭隘な路で、上から攻められるから、というのが殲滅の理由のすべてではあるまい。

上からの攻撃を避けただけでは、完璧な作戦とは言えない。

なぜ、いかなる軍も殲滅なのか。その真の理由がわからない限り、完璧な作戦、確実な勝利とは言えない」

「しかしながら、他に手の打ちようがありません」

「いや、さようなことはあるまい。
ネイロ・カリグアならば奇想天外な作戦を弄しそうな気がする」

ウゾーニたちは街道を中心に進んだ。
街道は中立地帯としてどこの国の支配権も及ばないからだ。百人の軍隊を連れていてもどこの王にも干渉されない（但し、程度による。他国軍が縦横無尽するのを許す王もない）。
だが、難民であふれる場所は避けた。

また、諸王の軍隊が東奔西走するのにぶつからないよう、先遣隊や斥候を入念に計画的に使い、徹底して避けた。

そのあたりのマネージメントはリュージュがやる。彼が派遣した先遣隊と斥候の情報を整理して、レオンが行路の原案を作り、宿泊地をアンドリューと相談して決めた。

リオンはレオンが忙しいときは、馭することを交替せずに、ぶっ通しで頑張ることにしている。

「いいさ、レオン、俺にはそれができないからな」

「すまないね」

だが、レオンは知っていた。彼がいなくて、独りで長い時間、リオンが手綱をにぎるときにふと見せる、虚空のような哀しい表情を。彼は独りの時間を欲しているのでもあった。軽佻な男であるばかりではない。

その理由は誰も知らなかった、つい先ごろまで。

第11章　古戦場の国ローディン

高い木々が少なく、乾燥した、岩がむき出し、短い草の生える荒涼たる丘陵地帯、岩山や渓谷の国。なぜか、ここでは風も殺伐とし、強く冷たいような気がする。

そんな中に忽然と現れる街々。

ローディンの町はどこも無骨で厳つい。ヴィヨンのような都会であっても、ロマネスク様式の建築群は古代の鉄仮面のようだった。

鎧のような市街と言ってもいい。武が尊ばれる気風だった。

ここでは逃げ惑う人々をほとんど見ない。

伝統的な騒乱慣れというものであろうか。帝政になる前は、どこの国よりも領主同士が争い、国が興っては滅ぶこと、五百年の間に二千五百七十二か国であった。

又そういう伝統から、体躯が大きくて壮健な男女が好まれ、実際、そういう者が比較的に多い国でもある。

リオンは物珍しげに周囲を見廻しながら手綱をにぎっていたが、ふと四階の窓からこっちをじっと見ている金色の双眸が眼に留まり、どきりとし、気

になった。
その人物は頭巾で顔を隠しているので、蛇のような金色の眼が光っている以外に何も識別できない。
…何だろう。
そう思ったが、たちまち仲間たちの会話に意識を奪われ、ぼんやりとした疑念などはかき消されてしまう。
「街に来たのはいいが、百人も泊まれる宿があるかな」
ウゾーニが言うと、突っ慳貪にリュージュが、

「難しいな」

「かと言って、分散するのは好ましくないし」

さらりとシフネが言葉を挟んでそう言う。

リオンとレオンはおとなしい若者で首をかしげたが、何も言わなかった。

論ずるも時間の無駄と言わんばかりのアンドリューは、

「俺に任せてくれ。いい場所を探さないとな。

ここでは数日、滞留するからな。戦争の準備をしなくちゃならん。最後は不陥落城に入るって聞いているからな」

そう言って、着替えてから、颯爽と出掛けた。

どういう手を使ったのか、地区の公会堂を借り切って隊の宿営地としたのである。中世的な武の街には珍しく、古典ギリシア・ローマの建築のような、カノン（規範）の美を湛える建築。

「奴の交渉の力は尊敬に値するな」

ウゾーニそうつぶやいた。その日は簡単な食事で済ませ、眠る。

爽快なる朝、皆は活動を始めた。

都市には大きな市場がいくつもある。

シフネはガリア・コマータ数人を連れて買い出しに行った。
乾燥した木の枝や不思議な木の実や種や乾燥した蛇やトカゲや獣の骨や石などを買い集める。
「これらは皆、生薬さ」
又、胡椒やシナモンや生姜や唐辛子などの他に見たこともないようなさまざまな香辛料をも大量に仕入れた。
それらをする潰し、きめ細かい粉末にした。
「薬膳というか、ま、カレーみたいなものだな。

戦闘が近いから。精力をつけてもらわなきゃな」

粉末を溶かしながら練って、大鍋でぐつぐつ煮る。上等な肉を四角く切ってボトボトと入れた。別の鍋では魚介類や甲殻類や香味野菜をたっぷり入れたブイヨンを作る。

またブイヨンをベースに、仔牛の肉を入れてフォン・ド・ボーも作った。レードルですくって味見し、

「んー、最高にデリシャスだ」

また別の大鍋では野菜を細かく切ったものを煮て、ミネストローネ（野菜

スープ）を作る。昼食の準備はできた。

さて、同じくボーノもガリア・コマータたちを連れて武具の補修素材の買い出しに出ている。兵たち自身も武器やメンテナンス品等を買い求める必要があった。それゆえに食材チームとは違って、ボーノが必要とした以上に参加者が多い。

さまざまなものを見ながら、購入しながらも、刀剣商や刀鍛冶のところに来ると、刃を斜めにして吟味し、

「この輝き、刃紋の美しさ。なかなかの刀匠だ…

名人の技という者は言説を超える微妙に達していて筆舌に尽くし難いな。
こういうのが真の芸術であり、真の哲学なんだ」
そう言って一頻り感心した後、事務的に、
「で、在庫はどのくらいある？　明日までにどのくらい作れるかな」
また武器商のオフィスを訪ね、
「矢を数千本仕入れたいのだが」
「お客さん、ご存じないですかね。
今、武器の類は大量に買い占められています。王侯貴族や傭兵隊長さんら、

値を吊り上げようとする商人らのせいでね。

ここにはもう、ご要望にお応えできるほどの在庫はありませんや」

「地方領主の武器庫でも襲うか」

そう言ってボーノは高笑いした。

それら以外の者たちは公会堂内にテントを張って思い思いに休憩している。

レオンはまめまめしく馬車のメンテナンスをしたり、ちょっとした工夫を加えて快適さや耐久性を向上させるような試みをしたりして、〝いじる〟こ

とを愉しんでいたが、リオンのようはそれを見て軽口をたたいて冷やかすばかり。

まあ、それでも、見ているだけでもまだましであった。同じ剣士兼馭者でも、リュージュは誰にも声を掛けず独りさっさとバールに入ってウシュクベ（オー・ド・ヴィー、命の水）をちびりちびり。

ガリア・コマータたちはどこまでも陽気で楽天的、常に集団でジョークを言い合っていた。くよくよすることなどない。

「まったく以て屈託のない連中だ。あの向かいの屋敷の窓に立つ少女の悲恋

も知らないのだろうな」

リオンが鼻歌を止めた。

「アンドリュー、それは、いったい、何だい？」

「よくある話さ。幼馴染の恋愛だ。だが、少年は聖騎士になるために修道院に入ってしまったんだ。

数年が経ったが、終に或る凍てるような雪の夜、少年は寄宿舎を抜け出してしまった。そしてこの窓の下で、哀れにも凍死していたのさ。

窓に声も掛けることができず、かと言って戻れずにな」

驚いたことに、リオンが啜り哭きを始めた。
「俺も幼いころに好き合っていた子がいた。家が貧しくて傭兵に出された俺は遠い異国で、彼女が病に死んだ知らせを聞いたのさ。
俺にとっては永遠の天使になってしまった。忘れることができない」
彼の軽薄さは装いでしかなかったのだ。
そんなことも知らず、後から来たストランドがガリア・コマータたちの様子を眺めながら、
「実によい場所だ。野外と違って見張りも少なく済む。セキュリティ的には

最適ですね。さすがだな、アンドリュー殿は」

と感心して言う。

アンドリューは軽くうなずいて、寂しげに微笑んだ。

ウゾーニは簡易ベッドを用意させ、読書に耽った。大理石の列柱とアーチのならぶクラシックな公会堂は心の波を鎮め、静かな波長へと宥める。気持ちが集中して来た。思考作業に入る。

『パスワードと数式。

龍神の三叉戟が示すものは明白だ。

我々島の民族が使う言語はほとんど同じだ。文字もそうだ。だから、僕の知る言語と文字を基に分析して間違いはあるまい。

だとすれば、簡単だ。

僕らの言語に於いて否定を表す接頭語の文字は、蛇又は蜥蜴の象形文字に由来する。龍神は蜥蜴や蛇の親玉とも言える。

三叉戟は破壊。

つまり、龍神の三叉戟が意味するものは、攻撃、破壊、否定、逆説、無みする、死歿などだ。

それがアモールの持つパスワードと足し算されてシューニャのパスワードとイコールになる。

もう一歩踏み込んで、大胆に推理すれば、三叉戟の三という数字は、三つのパスワードを象徴しているのかもしれない。

いずれにしろ、数式が成り立つということは、類語や反語が入るはずだ。少なくとも類の同じような概念がそこに嵌まるはずだ。馬とか、石とか、青とか、暑いとか、数字とかでは成り立たない。

たとえば、防衛、創造、肯定、定説、存在、誕生などだ』

無意識に刻み草を出し、パイプに詰めている。マッチを擦る。紙に点火する。煙草を炙る。

香りが漂った。

『そう、概念だ。

形態・形状ではない。

パスワードは浮彫として表されているが、その形がパスワードとしての符合をなしているのではない。

飽くまでも、彫りが表す概念だ。

意味が符合するようになっている。

なぜなら凹の側には、凸と重なるような彫りがないからだ。つまり、問われているのは意味だ。形ではなく、内容だ。

僕には一つの推断がある。

だが、それが正しいかどうかは、どうやって確かめられるだろう』

思案する。パイプを燻らす。

『逆に考えてみよう。

なぜ今までの研究者は謎を解析・究明できなかったのか』

考えるといくつか思い当たる。

『まず、パスワードを見ることができる人間が少ない。数式であることや、匣に四角い窪みがあって、そこに嵌める、ということを知る人間も少ないはずだよな。

それから、推理する人間が暗号や歴史の研究者で、言語や文字についての知見が少なかった、などだろうかな。

あとは、…運命だろうな』

思いついたことをメモにしておく。

『さて、もう一つの謎、不陥落所はなぜ陥落しないのか。その城とどのように対峙したらよいのか』

眉を顰め、考え続ける。

午後、宿を確保してからも休むことなく出掛けていたアンドリューが帰って来た。

「ぅおほっ、ぅおほっ、何だ、こりゃあ、火事か」

「ん？　あ、この煙か。パイプだよ」

「わかってるさ。酷いな、よく窒息しないな」

「煙が籠っている方が集中力も籠って逃げないような気がする」
「気のせいだろ」
「むろん、思い込みだ。人間は思い込みで幻影を見ながら生きているんだ。真実を観たら生きることに堪えられるわけがない」
「だろうね、
さ、そんなことはともかく、パウルの情報だ」
「僕は特に興味がないが」
「そう言うなよ。

奴はフロンク王国内の古文書を片っ端からあたって、クロード王の語録や事跡について調べているらしい」

「ふふん」

「何だよ」

「二百五十年の間に文書は調べ尽くされたよ」

「他にどうする？」

「アモール、シューニャ、クルアールの歴代皇帝の語録や事跡について調べたい」

「なぜ？」

「普通の人間だからさ。失敗があるものだ。たとえば」

ウゾーニは講釈を垂れるときの尊大な態度になり、

「歴史上、一度だけパスワードが奪われた事件があった。

百年前、この帝国で、だ。

シューニャ帝国第七代皇帝ルイードは、アモールの新皇帝に皇権神授の儀を行うために不陥落城に向かう途中、道中で見初めた花魁にパスワードを奪われてしまったのだ。その女の手を介して、パスワードは盗賊団の首領の手

に渡った。

盗賊団はローディン王に雇われた者たちで、彼らを取り押さえる手筈はすぐに整えられたが、儀式の時間が迫っていたため、とにもかくにも南下し、ルイード皇帝は不陥落城へと向かった。

数日後、盗賊はローディンで取り押さえられ、パスワードは取り返したが、ローディンから不陥落城までは数日かかる。儀式には間に合わない。

だが、皇帝はフロンクの高名な鍛冶屋に命じて一時間足らずで同じものを作り、それで対応したと伝えられている」

「そんな話があったのか」
「この帝国ではあまり知られていない。皇帝の恥辱だからな。だが、他の帝国では、知る人は知っている」
「しかし、パスワードはそんなに簡単に複製できるものなのか。しかも原版なくして」
「そう思うだろ？
これは大きなヒントだ。こういう逸話を少し集めた方がよほど良い」
「なるほど」

「と言うわけで、街の古文書館及び文書館に行く。連れて行ってくれ。そして無制限に閲覧できる手筈を」

「了解」

ウゾーニは一日中、蔵書を渉猟し、漁りまくった。

その読むスピードは驚嘆すべきもので、一時間で数百冊を読んだ。

帰って来ると、アンドリューに得意げに話す。

「成果はあったよ。

興味深いエピソードだ。

まずは神統記だ。これは皇帝ルイードの時代の神学者メゾンの書いた研究書なのだが、恐らくは皇帝の恥辱を少しでも釈明できるように凄まじい人数を使って存在する記録すべて調べ上げて作られたらしい。

体裁は神話時代からの歴史だが、実は言いたいことは次の一節だったようだ。

こう書いてある。

『余は研究の末、それを見出した。素焼きの壺に入れられた古文書に「イヴリャド神話」の秘伝が記されていることを。その巻子に拠れば〝島神は、シ

ユーニャの皇帝に於いては、特にパスワードの複製を赦すと告げた〟と記録されている』

どうだい？

だが、なぜだろう、シューニャの皇帝にだけ許されたのは。

これはパスワードの内容に深く関わりがあることだと思う。

複写が差支えない内容だったということだ。

これに関連するヒントが逸話として残っていた。

これは六十年前の『皇帝列記』という公文書で、こういう内容だった。

『又或るとき、三帝会談で、シューニャ皇帝フランセは、クルアール皇帝ダイオレスから「パスワードの複製などそうたやすく造れるものではない」と言われたとき、驚いて、「そんな莫迦なことがあるものか」と笑った』

筆者はパスワードの内容を知らないので、さように簡単に言う豪胆さを賛美し、シューニャ皇帝の豪放磊落な性格を描写したつもりらしいが、図らずも大きなヒントとなっている」

アンドリューが手を上げた。

「俺にはさっぱりわからん」

ニンマリ得意げに笑うウゾーニは、

「そのうち教えてやるさ。

あゝ、今日は実に愉快だ。さっぱりした」

その後、ウゾーニは数時間を費やして少女皇帝に報告を書き、自らの成果を大いにアピールした。

親書として蝋で封印されたそれは、体裁は整っているが、内容的にはまるで自慢話のようである。

しかし、今後を左右するいくつかの重要な依頼が含まれていた。（少女皇

帝が親書を受け取ったのは、その翌々日であったが、依頼は速やかに実行された）

その日の夕方、シフネがやって来て言う、

「ウゾーニ、いいワインが手に入ったよ。

高貴な香りだ。凛としている。歴史の気品を感じさせるんだ。

都会のいいところだな、良い品が集まるってことが。これが結局、人が集まるってことなんだ。

都会ってのは、欲望の集積だからな」

半ば皮肉めいた言い方も、気に留めず、ウゾーニは満足げにうなずき、

「最高のタイミングだね。

さっそく祝杯だ」

第12章　夢

第一砦の攻略が概ね終わった翌朝、城砦の監視機能がマヒしたそのタイミ

ングで、チャーリーとリックは尾根に向かって（監視を気にする必要がなくなったので、昼間に効率よく）登り始め、翌々日の朝に到達した。

登り切ると、尾根伝いに移動を始める。

渦巻き状に連なる山の尾根は渦巻きの中央に当たる蛇尾峰の頂上までの距離は約二〇kmであった。

わずかな距離である。だが、細く尖った岩の嶮しく高低差のある道なき道なので、最長で五日間を見込んでいた。

風が凍るように冷たく身を切る。しかも飛ばされそうなくらい強い。尖っ

た岩にしがみついて、一歩も進めぬときもあった。

「以後の攻撃は一斉に行う」

簡単な作戦会議でそう確認した。

会議で念のために、当初からの計画を再々度確認したのである。

それぞれの砦を攻める担当は決まっていた。先に尾根に登った者から順次奥へ進む。後から登った者は前に往った者らよりも手前に布陣することとなっていた。すなわち、最後のチームは第一砦の上に布陣することとなるのである。

全軍が同じくらいのタイミングで布陣するよう想定していたが、もし最深部のチームが布陣するより前に定位置に着いた場合は、そのまゝ最深部のチームが布陣するまで、布陣して待機することになっていた。

チャーリーとリックは最初に登ったチームのうちの一つなので、最深部まで行き、不陥落城を攻城する予定である。

なお、外側第二砦を攻めるチームは、『渦巻きの通廊』の側（内側）第二砦の攻城も兼ねていた。以降、外側第九十九砦まで同じような要領となる。

その先は、両側とも内側砦を攻めることとなっていた。

ちなみに、内側第一砦は、（渦巻き通路の奥に向かって進行するときの左側にあるため）ウォール山の尾根を挟んで内側第五十二砦と背中合わせになっているため、内第一を攻めるチームは内第五十二の攻城を兼ねることとなる。

なお、さらに補足すれば、五連隊で約二万五千人であるから、単純に割り算をすると、一つの城を約百二十人強で攻める計算だが、実際には不陥落城に人数を裂くので、百人ほどになる。

登り切った朝、リックは風を避けられる場所を懸命に探した。日中に眠る

場所を確保するためだ。尾根を移動するときは第二砦以降の監視を避けなければならないので、またもや夜行生活に戻るのである。

強風荒れる尾根での夜の移動によって、からだは冷え切った。その上に、吹き飛ばされそうな風である。

防寒着は風を塞ぎ、空気を溜め、なおかつ軽量で強靭なものを選んだが、それでも風に体温を奪われ、火も焚けないので、冷たいものばかり食べ、体力は奪われた。

チャーリーが眠りかけにつぶやく。

「無事に帰って家で温かい物が食べたいな。家族と一緒に」

特殊部隊に入って二年目のマイケルはチャーリーの傍で寝た。極寒に堪え、防寒具に包まり、背を丸めて眼を瞑る。火を使った暖が取れないので、凍えるように寒い。

どうにか眠ったとき、家族の夢を観た。それはいつしか死んだ友人や身内の夢にすり替わった。眼を冷まして風の吹く過酷な真っ暗闇を眺め、しばらく自分がどこにいるのかわからなかった。

亡霊のような者がまだぼんやり見えていた。手招きをしている。

「あゝ、母さん」

マイケルは歩き始めた。家の暖炉が見えている。

「あゝ、暖かい……」

そして滑落して死んだ。

翌朝、マイケルの死を知ったチャーリーは他の隊員とともに石を積んでお祈りをした。

「すまんな、マイケル。
今、これしかできない。おまえのお袋は哭くだろうな」
トムが肩を叩いた。
「さあ、行こうか。行くしかない」
「むろんだ」
『渦巻きの通廊』を征く者は攻撃を受けるが、尾根を征く者は受けないのか、尾根は不可侵領域侵犯と見做されないのか、さまざまな疑問が湧くも、今のところ不可侵領域の守護者からの攻撃は受けていなかった。

「反って気味が悪いな」
「あゝ、静か過ぎる」
「風のぼうぼうという音しかない。何かそれが時折、スローモーションのような、静寂さを感じさせるんだ」
「不思議なところだな、やはり」
砦は閑として寂莫を湛え、野晒しの髑髏のようであった。
進めば進むほど何か音のない世界に閉じ込められるような感覚を覚える。
「ときどき空間がゆらりとゆがむように感じるんだ」

夜、シルベスターは震えて語った。

確かにそう感じるときがある。よろめきのように大きくゆがみ、バランスを喪って転落しそうになるときがある。チャーリーもそれは感じていた。

毎日、転落者が絶えないのもそのせいか……

「ジョージ、おまえはどう思う？」

口髭を蓄えた兵は応えた、

「それがハイリッヒトウムの呪いなのかもな。

気にしなければいい。大昔は呪いが横行したが、今はそれがない。なぜだ

と思うか？」
「さあな」
「気にしないからさ。意識が変わったんだ」
「夢みたいなものか」

さて、ウゾーニ一行らはヴィヨンを出てから、サクラという村に立ち寄った。例によってシフネは仕入れに行き、リュージュはバールに入った。
レオンは馬車の手入れが早めに済んだので、かつての学友に手紙を書き出

した。

捨て子だった彼は傭兵になったが、殺伐の暮らしに心苦しみ、いつしか聖なる教義を学究するようになり、そういう友だちが数人いて、文を交わしていたのである。愛されなかったということが、潜在意識の中で常に彼を苦しめていた。彼の優しさは、その哀しみが奏でる繊細な旋律であった。

「郵便局に行って来る。…それと、書店があれば、地図を見て来るかもしれない」

アンドリューはそう言って、出て行こうとした。

「あ、待って。もうすぐ手紙が書き上がるので、持って行ってもらえませんか」

「何だ、家族へか？

作戦に支障がるから、親族への近況報告などは禁止だぞ」

「いいえ、そういう支障などありません。疑念をお持ちなら、どうぞ封を開けて検閲してください」

アンドリューはしばし考えたが、黙って封を切って呼んだ。

「ちっ、時間の無駄だった。読むんじゃなかった。じゃ、行って来るよ」

「よろしくお願いします」

ウゾーニは古老の話でも取材に行こうと、広場に出かける。露天商の獣脂の瓶を眺めながら、何か交渉しているボーノを見掛けた。

「本当に職人気質だな」

アンドリューによれば、ボーノは元来、貴族の生まれだが、剣術にのめり込むあまり、家を出て家族を捨て、武者修行に励み、傭兵生活も修行のためらしい。或る意味、リュージュに似ていた。ただし、リュージュの場合は、彼のニヒリズムからではあるが。

そんなことをぼんやり考えながら、ウゾーニはふとボーノの様子がおかしいことに気がついた。急に商品への興味を喪い、顔に冷厳な殺戮の表情を浮かべている。

「どうした、ボーノ」

ボーノはキッとしたまなざしで振り向いた。

「おお、ウゾーニか。

いいか、きょろきょろしないで聞いてくれ。俺たちの右の方、建物の影からこっちを見ている金色の眼の男がいる。

マントや頭巾で隠しているからどんな人間なのか、さっぱりわからないが、金色の気味の悪い眼だけが、頭巾の影からはっきりわかる」

ウゾーニはごくりと喉を動かした。

「敵か」

「恐らく。しかも、ただ者ではない。殺気だ。もしかしたら、アモール帝国の手の者かもしれない」

「どうする？」

ウゾーニは熱くもないのに汗をかいてきた。

「様子を見よう。
今のところは、こちらを襲うような感じはないようだ。近くに〝マリー〟もいるし。敵もそれを知っているだろう。
あいつは存在だけで役に立つ」
しかし、ウゾーニは急にすっとぼけたような声になり、
「なあ」
怪訝そうに応えるボーノ。
「どうした」

「どこにいる？」
「バカ、見るな」
「しかし」
「やめろ、あ…」
「いないだろ？　もう消えちまったようだが？　それとも白昼夢でも見たか」
「バカ言うな。それより油断するなよ。
消えたかどうかはまだわからない。ちょっと待て」

ボーノは手を振り、叫ぶ。

「おーい、リオン、聞こえるか！　ちょっと来てくれ。それから、〝マリー〟だ、聞こえるか、〝マリー〟を呼んで来てくれ！」

周囲を探したが、何の痕跡もない。

「まあ、当然だろうな、プロだ」

そういうボーノの言葉を聞きながら、アンドリューは顔を顰める。最近は毎日顰めてばかりだ。

「十分気をつけよう。特に、これからは鬱蒼とした森が続くからな。できれ

ば街道を外れたくはないのだが……」

そう言って、ウゾーニの方を見る。

ウゾーニは肩をすくめ、

「洞窟には行ってもらわなくっちゃ困る。真理の探究はいつも命懸けなものさ。究明しなくては、旅そのものが無意味だ」

「だろうな」

第13章　森深きゲルームア王国

ゲルームアの国境を超えた。

ここも森が豊かであったが、規模が大きい。どこまでも続く、黒い森の大海のようであった。古樹鬱蒼と深く、人も疎らな森は幻想的であった。苔やツタが妖しげでもある。鳥の鳴き声もない。

時折、繁縟な文様の彫られた石碑があった。どれもとても古く誰が建てた

かも知られず、毀たれていた。
手綱をにぎりながら、レオンは隣に控えているリオンにぽつりと言った。
「リュージュは家族を捨て、傭兵として彷徨っているというじゃないか」
「それがニヒリストなのさ」
「僕には考えられないな。そんな莫迦なことがあるものか。いったい、何が彼の意義なのか」
「ふふん。
そんなものは、人それぞれさ。事情も知らずに言うべきことじゃないぜ」

「そりゃ、そうだけど。こういう命懸けの仕事をともにする気になれない」
「青臭いこと言うなよ。おまえも相当殺してるはずだぜ」
「非戦闘員を殺したことはない。戦士は皆、死を了解し、了承している。合意の下で殺しているんだ。これはルールだ」
のどかな陽射しであった。
馬車に揺られながら読書をしていたウゾーニがふいにアンドリューに言う、
「クロード王が籠った洞窟がこの辺りにあるそうだ。

ただし、どこにあるのかは、はっきりわかっていない」
「最後はアランで果てたと聞いたような気がするが」
「むろん、そうだが、クロードはフロンクに家族を残し、北上しながらも、あちこちを彷徨した。
ここの洞窟にも滞留したのさ。洞窟には古代の壁画があるらしい」
「行くのか？」
「あゝ、行くさ。場所を特定しないとな」
そう言いながら、地図を広げた。

「地元の人間に訊けばいいだろう」
「地元の人間でもほとんど知らないらしい」
地図を見ながらウゾーニは深い空想の世界に入っていた。自分がクロードになって山野を廻り、心に適う洞窟を発見し、そこで偶然に古代の壁画を発見する…その驚嘆と感動。
夢から覚めたように顔を上げたウゾーニはアンドリューに言った。
「わかったよ。
ラスクという山のアリュミラ洞窟だ。ここに行こう」

そこは簡単に行けるような場所ではなかった。

街道を外れて一本道を進む。ラスク山の偉容が見えた。わずかに樹木を横向きに生やし、岩がいくつも嵌め込まれ、槍のように突き立つ。絶壁だった。

洞窟は中腹にある。

「龍馬の爪ならば、登れなくはない。

しかし馬車は壊れてしまうでしょうね」

ストランドがそう言い、さらに言葉を続け、

「それ以外の問題もあります。

どう考えても敵に狙われやすい。攻撃するには絶好の場所でしょうね」

アンドリューは〝マリー〟に言った。

「斥候を頼む」

鉄面皮の男は何も応えず、歩み出し、岩から岩へ飛んで、岩山の麓まで行く。麓から跳ね上がると、わずかな凹凸をつかんで、軽々と岩壁を登って行った。人間業とは思えない。まるで山岳地帯の羚羊だ。

「俺たちも行こう」

リュージュが言った。

彼は無気力なニヒリストではない。

ドライにただ行動するニヒリストだ。ハードボイルドというわけだ。

「おうとも」

血気盛んな緋髪のボーノも龍馬を激励し、叱えさせる。二人は龍馬を駈って岩山を登り始めた。

大小の岩石の壁をすいすいと登る龍馬の姿は、このときばかりは馬よりもトカゲに見える。

「さあて、と。

では、我々はここいらに屯するとしましょう。馬車をベース・キャンプの中央として、司令塔にします。

ただし、その前によく周囲を偵察し、確認してからにしますが」

ストランドがそう言って、ガリア・コマータたちの数騎を偵察に行かせた。

アンドリューは渋い顔だ。

「こういうところは、トロールやオークがよく出るんだよね。ゴブリンとかドワーフとかね。ワーウルフやエルフもいるかもしれない。

偵察や斥候もいいが、あまり分散するのはよろしくないぜ」

レオンとリオンは馬車のメンテナンスを始めたが、何度も周囲をきょろきょろと見廻し、警戒と緊張が張り詰める。どこかすぐ傍らから、怪物どもが飛び出してくるような気がしてならないのだ。

「や！」

「どうした、レオン？」

「そこの草薮がガサガサしなかったか」

「あゝ、ガリア・コマータの一騎が過ぎっただけだぜ」

そんなこともどこ吹く風とばかり、シフネは石で囲みを作って火を熾し、

木の枝を組んで鍋をぶら下げた。たちまち鶏スープの準備ができた。

偵察隊のうち、一組が帰って来た。

「五kmほど先の谷にオークの集団が野営していました。川沿いの洞窟に潜んで百三、四十匹というところです」

もう一組も帰って来た。

「ここから三km離れた山の斜面に三匹のトロールがいます。かなりの巨体でした」

最後の一組も帰って来る。

「七㎞向こうの森にワーウルフの群れです。およそ五、六十匹」

報告を聴いて、アンドリューとストランドは考え込んでしまった。

「ここを早々に引き上げるべきと思うが」

ストランドがそう言ったとき、〝マリー〟が戻って来た。返り血を浴びている。

低くかすれた声で言った。

「ウゾーニの言う洞窟は在った。

ゴブリンの巣になっていた。元はドワーフの砦だったようだが、追われた

か、殲滅させられたかしたようだ」
「そのゴブリンと闘ったのか、相手はどのくらいいる」
ストランドが剣に手をかけてながら訊いた。
「百二十三匹いた。
洞窟の外にいた見張り十二匹、洞窟に入って九十二匹、逃げ出した奴を追い、隠れていた奴ら十九匹、すべて屠った」
さすがのストランドもぞっとした。まさしく殺戮神の異名は伊達じゃない。
「リュージュやボーノがおまえを追ったはずだが」

アンドリューが訊くと、〝マリー〟が、
「奴ら二人は洞窟を調べている。
穴は深いが、ゴブリンを始末した後、もう何も気配を感じない。何者もいないと教えてやった。
だが、奴らは調べたいと言った」
無味乾燥な事実しかない報告に、ストランドがうなずきながらも提案した。
「それはわかった。
だが、〝マリー〟よ、敵はまだ多い。この場を去りたい。

二人をすぐに呼び戻してくれ」

しかし、ウゾーニは、

「待ってくれ。

どうしても見ておきたい。僕と〝マリー〟とで行くから、君らはここで総勢を結集して自己防衛していてくれ。そうすれば安全だろう。

僕が戻って来てから、さっさと逃げよう」

アンドリューが言う、

「なら、俺もついて行こう」

「構わんさ」

というウゾーニはさほど龍馬を巧みに操れるわけではないので、手綱をにぎるアンドリューの背にしがみつき、素手で登る〝マリー〟の後について岩山を登る。

ほぼ垂直の岩壁を登るときなど、ウゾーニは悲鳴を上げることすらできなかった。むろん、命綱はつけている。しかし、途中、何度も声を上げ、ようやく着いたときには、顔は真っ蒼にであった。

リュージュとボーノが洞窟の入り口にしゃがんで待っていた。さすがの歴

戦の剣士も顔色が悪い。
ボーノが言った、
「周囲に異常はない。
あ、入るなら、覚悟してから行った方がいいよ」
「〝マリー〟が敵じゃなくてよかった、というのが率直な感想だな」
皮肉な笑みを浮かべてリュージュもそう言う。
「どうやら相当らしいな」
何も言えなくなっているウゾーニに変わって、アンドリューが応えた。

鯨油ランプを灯す。めまいを抑えつつ洞窟に入ったウゾーニを待っていたのは、血や臓器の散り乱れる凄まじい惨状であった。

嘔吐をこらえ、壁画を見る。

たちまち関心が甦り、頬に血色が戻った。

「おお」

ウゾーニは思わず感嘆する。壁画は素晴らしいものであった。

洞の壁面に、さらに顔を近づける。

バッファローやオオツノジカが狩られている様子が描かれていた。

拡大鏡を取り出し、ウゾーニは調べる。ナイフを出して何かを削った。

「これは恐らくロウソクの残骸のなれの果てだろう。たぶん、数百年もこんなところにあったのだろうな。ほとんど何だかわからないモノになっている。これは祈りの跡だ。

ドワーフではないだろう（ましてやゴブリンではない）からクロード王の祈祷の跡かも知れない。

おや」

岩に何か刻まれていた。文字だ。読み上げた。

「ええっと・・・、『我が島の文明の曙の地に於いて祈りを記す。まさに祈らんとするイヴリャド神への願い、成就せんことを。いかなる真理も奥義も、言辞にしかず。人は自然がその人に与えた、その人の自然の命ずるままに、その人の幸福を求む』、・・・ふむ、これは」　※「その人の自然」とは、その人の本質・魂・生命・本性をいう。

歎息する。紛れもなくクロード王の残したものだ。

深い感動がウゾーニを襲った。

アンドリューが問う、

「神に祈願する前にここに寄ったということか」
敬虔に近いまなざしでウゾーニが応える、
「そうだ。恐らく古い順に古跡を廻って大願成就を祈っただろうと推測する。あゝ、君にはわからないだろうな、今の僕の気持ちが」
「どういうことだ？」
「いや、何でもない。何でもないんだ。そう、何でもない・・・」
刻まれた文字を書き写すと、ウゾーニは洞窟の外に出た。
しばらくは遠景を見渡す。

深い感動を抑制するように、心を整理するように。一頻り落ち着くと、

「さあ、アンドリュー、それはさておき、この発見は歴史学者たちにはさぞかし悦ばしい発見だろうな。

クロード王は長い間、虚無主義者だった。

人の知恵などというものは、地盤に基礎の届かぬ、宙空に泛んだ、基礎のない伽藍のようなものだと言った。竟まで究め問えば、畢竟のところ『え答えずなり侍りつ』と常に言わざるを得なくなってしまう、と。

どのような考えも、理解も、理論も、そうだと言い切った。

愛や正義や真実などという価値観は、人が創った架空に過ぎぬと断じていた。

いやさ、架空だの空しいだの虚儚だのと蔑むことすら、人の架空の価値に過ぎぬと言い放った。

それは自らの尾を噛んで自らの口で自らの口までも喰らい尽くそうとする原蛇（ウロボロス）の矛盾だ、そう言った。

そんなにニリズムの王がなぜ人類皆幸福の永遠平和を希うようになったか。

その答の一端がここに在る」

「そうなのか。

どの辺に？」

「これを見たまえ。僕が書き写したメモだ。これさ。

『いかな真理奥義も言辞にしかず。人はその人の自然が呼び覚ます幸福を求む』

さっきの壁画の傍にあった〝ラクガキ〟だ。

前段では、真理も言葉に過ぎない、と言っている。ここまでは、我々のよ

く知る彼のニヒリズムだ。

けれど、ここから先が違う。

真理は言葉に過ぎないから、人の行動原理ではない。人は自然によって与えられたその人の命題(性)に随って、その人なりの幸福を理屈抜きで求めているものなのだと言っている」

「あたりまえ過ぎるな」

「そうさ。

だが、それが彼にとっては長い道程だった。

そして、永遠平和のために、自らの王権を捨てるという壮挙に及んだのだ。
あたりまえ過ぎる事実に遵ってね」
「その辺、少し理屈が飛躍していないか？」
「そうだね。
つまり、彼の自然な感情は、幸福を求める、と言うことだったのさ」
「それは、多くの人間がそうだろう」
「幸福になるためには、皆が幸福にならなければ、本当に幸福になれない。
心に疚しさも、他人の不幸を悼む気持ちも起こらぬようになることが必要だ

と彼は感じたのだろう」

「なるほどね。

欲張りだな」

「究竟を目指す人間はそうなる」

「よくわかったよ。

さ、帰るか。それが俺の自然な感情だ」

「あゝ、そうだな。帰ろう」

〝マリー〟は傍らで彼らの話を聞いていた。「帰ろう」という言葉を聞くと、

無言で絶壁を下へ降りはじめる。一度だけ一瞥をウゾーニらへ投げ、ついて来いと言わんばかりであった。

リュージュは、

「俺が殿（しんがり）をやる」

ボーノもうなずき、

「むろん、俺もやる。独りでは仕事に不備が生じ易い」

「そうか。頼んだぜ」

そう言ってアンドリューはウゾーニとともに再び龍馬に跨った。

しばらく降りてから気がつく。

「騒がしいな」

それもそのはずだ。

ベース・キャンプを見下ろす場所に来ると、大変なことになっていた。

百人の傭兵たちはワーウルフに前方を囲まれ、欣喜雀躍。闘っていた。

「ひゃっほう！　一丁上がり！」

巧みに龍馬を操っては巨狼を惨殺。

「ううらあああぁぁぁーっ！　どけ、どけいっ！　うらあ！」

龍馬の鬣を靡かせ、怪物狼たちの間を突っ切り、駈け抜けてはまた戻り、往復し、哄笑する。

「さあ、来いっ、寄らば斬る！」

龍馬の上から剣の切ッ尖を、ワーウルフの鼻先に突きつけて威圧する。

「そりゃ（バサッ！：斬殺音）、そりゃ（バサッ！）、そりゃ（バサッ！）、そりゃ（バサッ！）、そうりゃ（バサバサッ！）、そおりゃあぁぁぁーっ（ズバババサバサバサバサバサッ！）」

髪長きガリア・コマータたちは龍馬を縦横に駈り、実に楽しそうに、命懸

けで戦っている。

ところが、そこにトロールが棍棒を持って現れ、挟み撃ちになった。

しかも、街道へ戻る一本道を、オークの群れが武器を手に喚きながらふさいでいる。街道へ戻ろうとしたときを狙って、迎え撃とうとしているらしい。

「俺がトロールを殺す」

〝マリー〟が言った。殺戮の闘気が靄のように全身から立ち昇る。

その獰猛冷酷な闘犬のようなさまを横目で蔑むように眺め、欠伸をしながらリュージュが、

「じゃあ、そうだな、俺らは待ち伏せしているつもりらしい愚かなオークどもを攪乱してやるか」

ボーノに向かってそう言う。

ボーノは高らかに笑ってうなずく、

「面白い。

びっくりさせてやろうぜ」

それらにうなずきながら、アンドリューはウゾーニに言う、

「じゃ、俺たちは彼らに任せて、その後に静かに続こうか。

安全が確認されたら、本隊に合流するとしよう。無事にな。それがあんたの役目だ」

かくして、さように行われた。

第14章　激戦と逃走、そして最後は家令の話

トロールの顔は大人の背丈よりも大きいが、からだ全体のバランスから言

えば、トロールの頭は小さい。〝マリー〟は何の迷いもなく、その巨大な妖精の類である怪物に突っ込んだ。

飛ぶ。

巨体の肩の上に飛び乗ると、拳を固めて頭頂部を殴る。拳はそのまま突き刺さり、貫いた。

「うぐぁおおおおーっ！」

凄絶な絶叫。

もう一匹のトロールが棍棒を振り上げても、虚しく仲間の死骸を打つのみ。

足刀蹴りで、棍棒を振ったトロールの顎は飛び、最後の一匹は〝マリー〟に襲い掛かるも、回し蹴りで倒され、こめかみを殴られ、息絶える。

ワーウルフさえも、そのあまりの凄まじさに怯むとき、ガリア・コマータたちが怒涛のように切り込み、巨狼たちは一時退散した。

その頃、リュージュとボーノの二騎に急襲されたオークが体勢を立て直すも、ガリア・コマータたちに襲撃されて散り散りになる。

「さあ、今だ。

行くぞ。ここで無駄に戦っても仕方ない」

ストランドの掛け声で馬車が動く。
「よし、俺らも行こう。馬車に乗るんだ」
アンドリューが龍馬を駈る。
一気に斜面を下って馬車に近づこうとするも、ワーウルフが襲って来た。
「それ！」
アンドリューが剣で払う。
気がついたガリア・コマータ数騎が斜面を駈け上がって援護に来る。
このとき、龍馬の牽く馬車を疾駆させ、必死に手綱をにぎっていたリオン

は傍らのレオンに言う、

「手綱を頼む。アンドリューはウゾーニをこちらに乗せたいようだ。俺はウゾーニを受け留めよう。こっちから手を引く者がいなければ、到底、疾走する龍馬からこの烈しく上下しながら激走する馬車に移れない」

レオンが叫ぶように（そうしないと聞こえないから）言う、

「危険だ。僕がやるよ。君には家族がいる」

「バカを言うな。同じ戦士だ。どうしても、これは俺にやらせてくれ。頼む！」

レオンは一瞬リオンの眼を見た。いつになく憂鬱なまなざしをしている。

しかし、その奥に滾る燠火のような炎。
「わかった。じゃ、手綱を替わるよ！」
縁側のように車体を廻るフェンダーを転落しそうになりながらも渡り、アンドリューの操る龍馬が近づく側に回る。
「こっちだ、早く！」
リオンが声を張り上げて呼び掛けた。アンドリューがちらっと見る。
ガタン！と音を立てて、ちょうど、そのタイミングで街道に飛び出した！。
馬車と龍馬が平行に走る。

「飛び移るんだ、ウゾーニ」
「だめだ、できない」
「バカ野郎、やれ」
「ムリだ！」
駅者席の補助席から廻って来たリオンが日ごろのキザもどこへやら、フェンダーの上に立ち、ドアを開け、必死に叫ぶ。
「さあ、ウゾーニ！　手を伸ばせ！」
だが、アンドリューの背にしがみつくだけで精いっぱいのウゾーニは、

「こんなに揺れてちゃ、無理だって！」

「くそったれ！」

そう唸ると、アンドリューが馬車に体当たりするくらいに荒々しく急接近する。

「うわー」

ドカン！と音を立てて、アンドリューとウゾーニの脚がフェンダーの欄干に激しくぶつかる。

その一瞬だ。リオンがウゾーニの腕をつかんで無理やり引っ張り込む。

「ぇえいっ！」
「うわ、助けて！」
情けない声を上げて車内のソファに突っ込むウゾーニ。
「よし、できた！　大丈夫だ！」
リオンが言うと、アンドリューが、
「すまない！」
馬車を先導するのは、冷静な虚無主義者リュージュと炎の荒武者ボーノ、街道をめざして突っ走る。めちゃくちゃに跳ねる馬車、もう転がらんばかり

だ。手綱で巧みに意思を龍馬へ疎通させつつ叫ぶ、

「ぅらあ、ぅらあ、走れ、走れ、早く、早く！」

それを逃すかと、一度退散したワーウルフたちが引き返し、狂ったように唸り吼え、双眼に憤りと憎悪を滾らせ、息荒く迫る。雑木林を横切って道の脇から飛び出し襲おうとした。オークたちも再び群がる。

「虚しき獣ども、地獄の番犬でもやってろ！」

リュージュがせせら笑い、薙ぎ払う。

ボーノは激しく上下左右するも意に介さず、ひらりと屋根に乗り、四方に

群がるワーウルフを次々と射た。
必死の形相でレオンが転倒すまいと手綱をにぎり、リオンは設置された弩の太い矢では裂くように射抜く。
リオンが脇から襲われそうになった。
「うわっ」
ストランドがとっさに走り寄り、その巨狼を斬る。
ガリア・コマータの数十騎がたちまち駈け寄って、馬車の脇を固め、防禦し、敵を討ち払った。彼らの中には、雑木林に入って、道に出て来ようとす

るワーウルフやオークどもを叩っ切る者らもいる。

〝マリー〟は殿を引き受け、追う者を威嚇した。

気迫が火焔のごとく周囲を威圧する。慈悲の欠片もない無表情、冷厳なる鋼のような非情さが近づく者どもを震え上がらせる。

一匹の白い特に巨躯を誇るワーウルフが狂ったように襲いかかったが、獅子の歯牙にかかる小犬のように、鼻先をつかまれて口から裂かれ、二枚の敷物のように斃れた。

それだけでオークもワーウルフも近づかない。

「そら、一丁上がり、えい、二丁、おりゃ、三丁上がった！」

隊列後部のガリア・コマータは掛け声とともに、襲い掛かるワーウルフを振り下ろす剣で一刀両断にした。ゲームのように楽しむ。

巧みに龍馬を乗りこなす荒武者たちは、こんなスピードで不整地を上下してもまったく平気で、上半身をひねって後ろ向きになったままで、弓を連射する。

街道に出るとスピードは上がったが、森を横切ってショート・カットしたワーウルフが前方に現れ、道をふさぐ。

「行くぞ！」
炎のような赤髪のボーノは剣先のようにスピードを上げて突っ込み、蹴散らす。後続のガリア・コマータがさらに踏み潰す。
「ぐわおおっー」
凄まじい方向で突如飛び出してくる巨狼ども。
「そいや」
たちまち斬り捨てられる。
街道の脇の森から、奇襲しようと飛び出して来るワーウルフやオークをも、

リュージュは次々と叩き斬っていた。
何匹かのワーウルフが馬車に体当たりするたびに馬車が揺れ、そのたびにウゾーニが「うわ、うわわっ！」と声を上げて座席にしがみつく。
アンドリューは龍馬を巧みに操り、馬車に近づくオークやワーウルフを剣で刺し、弓を射る。
ストランドが疾駆し、馬車の前になり後ろになりして次々薙ぎ払う。
「うらあああーっ！」
五、六kmも行くうちに敵の数も減り、オークもワーウルフもいなくなった。

しばらくはそのまま疾走したが、ストランドが、
「よーし、そろそろ、いいだろう」
速度を緩める。
「あゝ、助かったあ・・・」
ウゾーニが豪奢な座席で安堵の溜息を吐く。
味方側は若干の負傷者はいたが、誰も欠ける者はなかった。
ストランドがアンドリューの傍に寄って来た。
「部下が気になるものを見つけました」

「何だ」
「これです」
差し出されたものをアンドリューは手に取って観察する。
「青いダイヤの指輪だ。どこにあった？」
「オークが斃れたときに落ちたそうです」
「奴らがこんなものを持っているはずがない。これを褒賞にして俺たちを襲わせたってわけか？」
「この台座は。この紋は」

そう言いながら、ウゾーニが割って入って来た。
「我が帝国の皇室の紋だ」
「おい、おい、アモールだけじゃなく、あんたの帝国も邪魔をするんだな。ま、考えられなくはないが、誰か指揮を取れる奴がまだいたか？　いるとすれば、執政官だな」
アンドリューはそう言ったが、ウゾーニは黙っていた。
ボーノは見た男のことが気になっていたのだ。
「どう思う？」

ボーノに訊く。訊かれた男は腕を組んで考え込んでしまった。
「おい、おい、何なんだ」
アンドリューが不審がるので、ウゾーニとボーノがかわるがわる説明する。
それを聞いてリュージュが、
「なるほど。
金色の眼の奴はアシンだな。アモールの諜報部にいる暗殺者だ。ならば、青いダイヤは疑惑をシューニャ帝国に向けるための偽装だな」
アンドリューが肩をすくめた。

「まったく以て、面倒臭いな」

その夜は用心を重ねながらも、人も比較的多い、駅馬車駅のある小さな村の傍らで野営する。

火を焚き、湯気が立つと、皆がようやく緊張を解く。ほっとする。黄昏が深くなっていった。

アンドリューとストランドが相談する。

「今晩は特に警戒を強くしよう」

ウゾーニは傍らでそれを聞きながら、チキン・スープを啜り、幸福な気分

に浸った。シフネが温めたフライパンにオリーブ・オイルを引き、そこに切ったガーリックをこすり擦りつけて、これから炒めるものに風味をつけようとしている。赤々と頬を照らす別の焚火では湯が沸騰していた。

生きている気がする。まさに平和こそが幸福で、幸福こそが真理だと思えた。

「先祖とは偉大なる言葉を残すものだ」

その夜、皇帝の家令であったシューが駅馬車を使ってやって来た。ウゾーニが呼び出すように、アンドリューに以前から頼んでいたのだ。

どのような手を使ったのかわからないが、例によって巧みな外交・交渉能力で、すべてを上手く手配したのであった。

ウゾーニはいくつか質問する。

「わざわざ遠いところをすまない。

皇帝の亡くなられる直前のことを訊きたい。

十二王は皇帝の部屋に入ったと聞いたが、何ゆえに入ったのか」

「見舞いの花と献上のお茶です。

養生のために茶を献上する礼法があるのです」

「それぞれの王がその二つを持って入ったのか」
「そうです」
「それではかなりの数であろう。しかも十二人一緒だと聞いたが」
「さようです。
先ほども申し上げましたとおり飽くまでも儀礼なので、お茶は必ずしも飲むものではありません。
献じることに意味があるのです。神に供物を捧げることと同じです」
「花もそうなのか」

「特にしきたりではありませんが、花で見舞うのは一般にあることではないでしょうか。

特に皇帝陛下は繊細な方で鼻を愛でるお方でしたから、むしろ、茶よりも、花を手に取ったかもしれません」

「なるほど。さように愛好されるなら、さぞかし手にして顔を寄せ、匂いを愉しみ、仔細に眺めたりするであろうな」

「健常であったなら、必ずしたでしょうが、あのときがいかがであったかは詳しく存じ上げません」

「そうだね。
もう一つ訊こう。
皇太子失踪の直前に、皇帝と皇太子が何か密談したり、皇帝から何かを渡したりした様子はなかったか」
「実は」
家令は言葉を止めた。
「まるで千里眼のようにお見通しですな。
ありました。話の内容はまったくわかりません。しかし、私がお薬を持っ

て入りましたとき、皇帝陛下が皇太子閣下にお渡ししていたものは」

ウゾーニは思わず身を乗り出し、

「何だ、早く言え」

「あの、パスワードの入った小箱であったような気がしてならないのです。実際に、それをそれ以前にはっきりと意識して見たことはありません。なので、実際にそうだったかどうか、確信はないのですが……

しかし、何となくではありますが、長い生活の中の、どこかで見たような、そんな微かな記憶の感触がありまして、そのように感じたのです。

第六感とでも申しましょうか……」

「なぜ、今まで黙っていた」

ウゾーニは意図的になじる。

家令は蒼白になった。

「あゝ、隠すつもりはなかったのですが、確かなことではありませんし、色々考えますと、怖ろしいことのように思えまして……。

ですが、あまり公にしなかったというだけのことです。

執政官殿にはお伝えしなければと思い、お役所の方には申し上げました。

ただ、一度だけですが」

「わかった。もうよろしい。

なるほど。いくら探しても見つからないはずだ。皇太子はパスワードを持ってさらわれてしまったのだ」

ウゾーニはマシューを帰した後、アンドリューと相談した。

「もし奪ったのが、アモール帝国の手の者だったとしたら、彼の帝国は二つのパスワードを把握してしまったことになるな。

パウルはアモール帝国側に雇われているという話だったようだが」

「そのとおりだ。何か？」
「この旅の出る前に、彼から手紙をもらってね」
「ほう。
その時点で、すでに、あんたがクルアールに雇われるってことがパウルにばれていたのか」
「彼が言うには、もう資料を手に入れて、チェック・メイト寸前だ、と。わざわざご丁寧にも、そういうふうに書いて寄越してくれたのさ。今になって、それが意味深に思える」

「なるほど。そうかもしれないな。
そうかもしれないが、どうにもならない。やれることをやるしかない」
「あたりまえなことだ。あたりまえ過ぎるな。
あたかも空気のようなものだ。無空に等しい」
そう言って、気の利いたセリフでも吐いたかのように、ウゾーニは愛想の良い笑みを泛べた。

第15章　諸々の策謀　*Mosaic*

クルアールの女官パミュルが黄金の間に入った。
少女皇帝アルペジアは双子の妹レイアの髪を梳っているところであった。
パミュルが報告のためにひざまずいても、一瞥することすらもなく、その髪を手に取って愛でる。
「いつ見ても美しい」
「お姉さまの髪と同じですから」

「その肌のきめ細やかさ。なめらかな張り。赤みを孕んだ生命力の漲り、血潮が生き生きと躍る。それでいながらも初々しい乳白色が萌え出ずる初芽のように柔らかい」

「あゝ、お姉さまの指先こそ、優しくて柔らかい」

「その凛とした双眸の何と美しいことよ」

「お姉さまはわたしの眸に映るお姉さまの眸を愛でていらっしゃるのです」

「同じことじゃ」

妹のまぶたに口吻する。

そして、

「パミュル、よいぞ。語れ」

「はは。

先遣隊に続き、いよいよ本隊も出発の準備が出来たとのことです。

イスカンデル将軍は海軍に令を発し、軍艦を整えました。テムジン将軍は陸軍の兵の鎧を揃え、騎馬をならべ、槍と楯を準備しました。

倉を開け、財務大臣は兵糧を車に積み終えています。

行軍ルートの下見は終わり、斥候がさまざまな報告を持ち帰り、その集約

が進んでいるところです。

戦略会議に於いては新旧の大将が作戦を練っております。書記が追いつかないくらいにさまざまな議論がなされています。

また、工廠では新しい作戦のための作業が突貫で進められております。まるで、蜂の巣を突っついたかのような大騒ぎです」

女豹のようにアルペジアは満足げに唸った。

「よろしい。

先遣隊はじょじょに軍を進めた。ひたひたと押し寄せる沙漠の大河の洪水

のようにな。それゆえに先遣隊の指揮には自制に優れ、知に長けたクトゥーゾクを任命した。

しかし、本隊は帝国の威信を賭け、堂々傲然と進め。よいな。

ところで、アモール帝国の動きはどうだ？

さぞかしさまざまな企みを孕んでいるであろう」

そう言って微笑した。

シューニャ帝国の執政官ロマヌフは情報部長官プーサンから由々しき知

らせを聞く。プーサンは細い眼に薄い唇、髪も薄く、全体に幽霊のような、薄くて気味の悪い印象を与える男であった。

「家令のシューがウゾーニと面会いたしました」

「何と！」

「どうやら魂を売ったようです」

「信じられん。代々皇帝に使える家の者が、あの温厚で忠実なる老人がか！」

「さようです。我が情報網は『天網恢恢疎にして漏らさず』です。大きく世界全体を網羅するが、瑣事にも遺漏がない。

どうやら当家のパスワードを密かに探せるようでございます」

「何と」

そんな莫迦な、皇太子とともに消えてしまったはずではないか、などと言って一笑に附したりはしない。

実はロマヌフはある筋から、「どうやら、皇太子の手に渡って皇太子とともに失われたと思われていたパスワードだが、実は皇帝の錯誤により、皇太子の手に渡っていたものは、盗奪に備えた模造品であった可能性がある」という情報を得ていた。しかも絶対に確かな筋から。

だからプーサンの情報が真実味を以て迫ったのである。

「赦せん！

しかし、どこを探そうというのか」

是非知りたい、こちらも探したい、という思いであった。

「墓陵です」

「何だと、陛下のか！」

「そうです、何という忘恩の徒でしょうか」

「ゆ、赦せん。

奴を密かに見張れ。よいか。監禁するのではない。監視のみだ。泳がすんだ。

奴だけではないはずだ。内部の者もさらにいるかもしれないし、外部の者もいるかもしれない。芋づる式に引っこ抜くんだ。

その微妙をよく心得てなせ」

しかし、さように命じておきながらも、その夜、宮殿の者しか使えない墓陵のカギを持ち、執政官は夜道に馬を駈けて出掛けた。

同行したのは、学生時代からの友であり、帝国の官僚や軍人である数人で

ある。

真っ暗な闇に炬火を掲げ、石の扉を開けて陵内に入り、石棺の蓋を開けて隅々まで探した。普段であれば、とても恐ろしくてできない行動であった。しかし、執政官は屍の衣まで脱がせて調べた。

ない。

『むむ。やはり痴れ言であったか』

しかし、兼ねて計画したとおり偽のパスワードを置いた。もしクルアール帝国側の賊が来てもガセをつかむことになる。

数日後、墓陵は荒らされていた。偽パスワードも盗られている。

不思議なことが二つあった。警戒していたにもかかわらず、何ものも網にかからなかったことと、扉は壊されておらず、カギで開けたようにしか見えないが、宮殿にしまってあったカギは盗られた様子がないこと（カギは一つしかない）であった。

家令のシューも刹那の間も空けずに常時、監視され続けていたが、動いた様子はまったくない。

いかにも不可解であった。だが、執政官は気にせず、密かにニンマリとす

る。いずれにせよ、パスワードを盗んだ者は間違いを犯すのだ。

「今度ともシューを見張れ。抜かるなよ」

そう言うことを忘れずに。

黄土色の頭巾をかぶったまま、パウルは溜息する。その手には情報提供者からの一通の手紙が握られていた。

シューニャ皇帝の墓陵が荒らされたという情報だ。彼にはその意味がわかった。

その盗人は皇太子が持っていたパスワードはニセモノだという情報をつかんだ者に相違ない。なかなかの情報通だ。

「さすがはクルアール帝国の手の者だな…」

しかし、執政官が用意したニセモノをつかんだということであった。

溜息には安堵が混ざっていた。

「ともかくも、これで奴らは勘違いする。つまり、余が間違わなければ、勝利は確実だということだ。

あゝ、決定的な証拠が欲しい」

彼がこのようなことを言うのは、本来ならば、おかしなことだ。なぜなら、その手許には、皇太子が渡されたパスワードがあるからだ。

しかし、それはどう見ても本物に思えなかった。

彼はクロードの軌跡から、何かをつかもうとしていた。しかし、徒労に終わりそうであった。

「何か新たな局面を見つけなければ」

頭を抱え、苦悩する。

ゲルームアの都市パラスに近い比較的大きな村である。泊まれるほどの民家や宿がないので野宿だ。

大いに蒼穹で、風は乾いていた。灌木の渋い緑が明るい黄土色の岩に映える。

ここ数日、ウゾーニが余裕綽々で上機嫌で、しかも口が軽い（もともと多弁ではあったが）ことにアンドリューは愕いていた。

「謎の答は出たも同然だ。神の言葉に従うべきだ。クロード王の精神に準ずると神は言われた」

すると、ガリア・コマータの若い戦士が訊いてきた。彼はまだ十代に見えた。

「クロード王の精神とはいかなるものですか」

「永遠の平和さ。

平和を表すのは鳥だ」

「でも猛禽類は平和には見えません」

「攻撃する武器を持たない鳥は平和の象徴さ」

「では、永遠は？」

「亀さ。攻撃する武器を持たない亀だ」
「なるほど」
「さすれば、永遠の平和が訪れる。
そこはまったくの平安だ。
寂滅為楽だ。
わずかなさざ波しかない。清らかな鏡のように平らかだ。何もない。
そうさ、何もないのさ」
「理に適合ってますね」

「そうだとも。
これこそが聖なる王、クロードの精神だ。
いかなる権威よりも高貴なる、聖なる権威だ」
それは人通りのいくらかある村の道端で語られていた。
こっそりと傍で立ち聞きしていた小僧がさっと姿を消した。ウゾーニがそれを抜け眼なく眦（まなじり）で追っていく。
「さて、一仕事した。食事が楽しみだ」
待ち兼ねていたかのように、さっさと集団へ戻った。

焚火を囲む。心が落ち着く。

酒が廻ると自然に笑いが起こり、炎に照らされる兵士たちがさらになごむ。

一日の疲れが飛ぶ。不安も消えていく…あゝ。

愉快だ。

喩えで言うなら、完成間近の彫像をうっとり見つめながら最後の呑みの一撃、二撃を打つ巨匠の心情であった。

ウゾーニは大樹の幹に寄り掛かり坐って、まるで老爺のように、若い戦士らの勇ましいにぎわいを眺める。

「この剣にかけて！」

そう言って剣を抜くガリア・コマータの戦士。

鞘から抜かれた大剣は炎に照らされ、陰翳に深く深く沈む部分と、鍛えられた刃紋のぎらぎら光りを放つ部分とにくっきり分かれて泛ぶ。

「無明の闇の中、勇気こそが強い光を放つ」

男は叫び、哄笑する。

剣舞が始まった。

その夜はシフネがどこぞから調達した去勢若鶏の肉を堪能する。コニャッ

クを片手にパイプを燻らし、瞑想に耽った。
歓楽とは言えない。だが、心から安らぐ楽しい夜だ。

アモール帝国の宮殿で、ネイロ・カリグアは将軍シーザルと神聖騎士団長ジークリフトを呼び出した。
「甲冑を磨いておけ。
兜を鬣で美しく飾れ。剣を研いておくのだ。脛当てを耀かせよ。燃え立つように槍の刃を光らせよ。流旗を鮮やかに染めるのだ。

戦こそ芸術の極み。

芸術は神へ捧げる至高の祈祷、素朴なる魂の祈りだ。現人(うつしおみ)こそ現人(うつしおみ)を超えて、真実への入口となる。現実こそが真実だ。現実に参入することが、現実を超越する、芸術の世界への飛躍なのだ。

生は芸術をなすためにある。鳥は歌い、魚は舞うように鱗を閃かせて泳ぐ。生命は躍動し、美しい。

軍艦を用意せよ。

華々しき勲(いさお)をなせ。人生を歴史の大河に於いて刹那輝かしめよ。

十二万の軍が黄昏のように亡ぶ。大地に呑まれる瞬間に、烈しく燃える太陽よ、何という芸術であろうか。

歴史は壮大なる美術だ。

あゝ、神は偉大なる彫師なるかな」

パウルは思案気に頬杖を突き、手紙を読んでいた。数通ある。

ウゾーニの動きの報告書であった。さまざまな機会にウゾーニは場所もわきまえず、パスワードに関すると思われる内容を語っているらしい。どの報

告書も同じような内容を伝えていた。

「これだ、うむ、なるほど」

思わず席から立ち上がる。

「いや、余もさように考えていた。そうだ、そのとおりだ。よし、光が見えてきたぞ。この思考をさらに進めよう」

彼は突如、晴れやかに顔を輝かすのであった。

帝都イシュタルでは武装した戦士を乗せた軍艦が次々と港から出航して

いた。南下し、西征する。

目指すはネブカド港であった。彼の港は未だクルアール帝国領内であったが、不可侵領域ハイリッヒトゥムまでは三五〇㎞

また陸路を征く軍は西北を目指す。総勢九万。

不陥落城とそれを囲む砦の群れから成る不可侵領域に入るためには、三人の皇帝がいなくてはならない。三人の皇帝がそろっていなければならない。むろん、ただその三人がいるだけではだめだ。パスワードを持っていなければならないのは、もちろんのこと、併せて次の三種の〝御徴（みしるし）〟なるものを、

それぞれの者が持っていなければならない。

一、帝国の旗

一、皇帝の紋入った楯

一、皇帝の紋入った剣

それらをそろえた三人がいなければ、不可侵領域に入った途端に、激しい攻撃を受けるであろう。

アルペジアは傲然と言い放つ、

「しかしながら、我はネイロと馬をならべて入城する気などさらさらない。

我は自由を欲す。いちいち三皇帝がそろわねば事がならぬようでは、思うような帝位継承もできない。さような戒めなどいらぬ。

島の神イヴリャドがそれを望もうとも、我が帝国の天神はそれを求めぬ。古代のクロード王などお節介なばかりぞ」

「つまり」

「匣はウゾーニの解くパスワードで開くであろう。

しかし、城は三皇帝の証がなければ、『渦巻きの通廊』の入口なる『蛇の関』を通過した瞬間、我らを不敬な侵入者として見做し、天の剣士らを遣わ

して、匣に到達する以前に、侵入者を屠り滅ぼそうとするであろう。
それに抗う。徹底して抗う。自由（人間の自由な意志）と必然（神・自然の掟・運命）との闘いだ。
匣に到達さえすればよい。パスワードを嵌めれば、正当なる者として認知され、攻撃も止むに相違ない」
少女皇帝にこの言葉に対し、歴戦の沙漠の戦士、無骨なる将軍パルメニデは厳しい面持ちで重々しく応え、
「匣に至るまで、持ちこたえなければならぬ、ということですな」

「そのとおりだ。
皇国の栄華のために命を賭せ。皇国の栄華こそ神の欲りし理、天の真義、神の栄光である。死して天界ノベルの原に生まれようぞ。永生の命を以て」
「御意」

第16章　暴君の芸術論

「陛下、クルアールが動きました」
侍従長が知らせに来たとき、皇帝は宮殿の尖塔のバルコニーで黄昏に溶ける地平を睥睨し、金杯の美酒を呷っていた。
「そうか。
では、こちらも動くか」
皇帝はしばし沈黙した後、
「ジークリフト」
「は」

騎士団長はいぶかしげに応えた。

「今回は負けかもしれんな」

しかし、そう言う顔は相変わらずゆったりとしている。それゆえにジークリフトは冗談かと思い、

「何をおっしゃいます」

黄昏を見つめながら、

「ふ。それもまたよし、だ」

ジークリフトはどう応えるべきか戸惑いながらも、

「では、いかがいたしますか」

ふ、と鼻先で笑い、

「問うまでもない。戦とは悲愴なるものぞ。詩歌のように。我が軍を動かす。兼ねて準備のとおり十二万の兵を動員せよ」

やや安堵して騎士団長は敬礼する。

「はは」

「海を往く者はクルアールの海軍を阻め。敵方の数は戦艦三百隻。我が邦は海軍力に優れる。同じく三百隻で迎撃せよ。

陸を往く敵軍は六万。我が邦は八万でこれを迎え撃て。
残り一万の兵は朕とともに進み、パウルと合流し、不陥落城へ迫る」
かくして、雄渾たる大海軍の軍艦数百隻が風に帆を孕ませ、白波を裂いて進む。艦隊は南下し、やがて東征する。
向かう先はクルアール帝国の領土内にあるネブカド港であった。
陸路を征く軍は東南を目指す。土埃を巻き上げ、地を揺らし、流旗を翻して美々しく進んだ。
アモールの陸軍は戦争に行くというよりは華やかな大名行列のようであ

った。

列の配置は、美のカノン（規範）といわれる理論に基づき、配置される。

長さ五ｍ槍を持った黄金の鎧兜に白獅子の鬣や孔雀の羽根を飾る騎兵が先頭を進んでいた。人種は黒人白人黄色人が同じ数だけいる。縦は大きく、金銀のコンビで装飾され、聖なる書物の言葉が象嵌されていた。

特に先頭の百頭は龍馬で、その中でも一番先頭は縦横五ｍの帝国国旗を風に翻して掲げている。

次にチャリオット（Chariot 二～四頭立ての戦闘用二輪馬車）の列で、虎

や豹の毛皮で飾られていた。

戦車は馬や龍馬が牽くものばかりでなく、（実戦で使えるかどうかは別にして）獅子や虎や豹が牽くものがあった。

その次が巨象の軍隊で、大きく湾曲した牙、白くて長い体毛を垂らすものばかりを千頭選んで、文様の入った絹の織物で飾り、天蓋附の馭者席には金銀がふんだんに使われている。

その次に歩兵で、美々しい型押しの革鎧に、帝国の金糸紋の入った旗を結びつけた長槍を持ち、宝石を嵌めた鞘に収めた、細工も精緻な大剣を佩き、

革サンダルを履いていた。

その中央に貴人の輿がいくつもあり、さらに身分の高いものには荘厳なる金銀瑠璃孔雀石縞目大理石象牙で満艦飾の馬車がある。

特に、皇帝の乗り物は、瑠璃色をした龍の牽くピンク・ゴールドとプラチナできた十六輪の超大龍車で、ベルベットの幕を垂らす天蓋のついた玉座を備え、プールやテラスのある内装は宮殿のようであった。

その後は、歩兵、象、チャリオット、騎兵、という順で、尖頭からの組み合わせとは逆の配置で続いている。

「これらはすべて神への供物だ。神への生贄だ。大いに荘厳すべし。なぜなら」

皇帝ネイロ・カリグアは言った、

「美とは歓びだからだ。

歓びは神の真義だ。生命だ。生命であるということは、歓喜、あふれる躍動、覚醒に及ぶ新鮮さ、聖の聖なる崇高の感激ということだ。

朕は神の与えたもうた感覚を疑うことはない。

美とは神への祈りである。人間のなすことに於いて、神への祈りこそが至

高の行為であり、行為こそが偉大なる哲学なのだ」

微笑する。

「そして、喪われ、亡び逝くものは美しい。ゆえに、死がある。世界は神への讃歌と生命の歓びに満ちている。

愚かしい執著さえなければな」

第17章　パラスのスカラ座

パラスは叙情に富んだ街だ。雨の日や霧に包まれた寒い日など、憂鬱と歴史とが心を夢想に誘う。芸術とロマンスの街。

「恋をせよ、涙を歌え、そして人生を笑え」

大河の中洲に初期の蛮勇の民が砦を作ったのが始まりと言われるこの都市は、ゲルームア王国の中では、特に古く、また繁栄した、裕福で大きな街だった。

悠々たる大河が往き、いくつもの立派な橋がある。

馬車の窓から、白波も立てずにゆっくりと流れる青灰色の水の満々たるを見て、ウゾーニは歎息する。曇天に見る建築は幽愁そのものだった。白いようであり、灰色のようでもある。ユトリロの白のような白。

古い市門を通過し、ゆっくりと進む。

逃げる人々数多なれども、あえてそれを拒み、勇を鼓して呑気に構え、日常のとおりに過ごす衆も少なくない。

石造りの様式は時代ごとに多々あるが、いずれも歴史を感じさせるものが多かった。旧市街と新市街があり、街中に旧市街の城壁が残っている。

河を使った船による輸送で栄えた商業市だ。

市の紋章にも表れている。

実務的なアンドリューは着くなり、さっさと宿営する場所を確保した。帽子を目深にかぶって、シガリロをくわえながら、次はさまざまな用事をこなすために出かける。役場や郵便局に行った後は新聞を数紙買って喫茶店でエールを飲みながら読んだ。

シフネは若いガリア・コマータの兵を連れて買い出しに赴いている。市場を往復しては値引き交渉し、スパイスや香草を仕入れた。

レオンはレンチやスパナを持って油で手を汚し、馬車のメンテナンスを行う。リオンは街で買って来たボレロを着てギターを弾く。レオンは一段落すると、手紙を書いた。

それを覗き込むリオンは、

「恋文かい？」

などとからかうも、レオンはただ真面目に、

「学友に手紙を書くのさ」

「ほう。絵が巧いんだな」

紙箋の挿絵を見て言うのだ。
「そうかな。好きなだけだよ」
「芸術の才があるな。武人には不要だが」
「別に。
心の赴くままにするだけさ」
「そりゃ、そうだな。
手紙は家族には書かないのか」
「この世にいない者にどうやって手紙を書くんだい」

「そうか。すまなかったな」

ボーノはいつも熱く、力強く歩む。かつかつと街を闊歩して鍛冶仕事のため、刃鍛冶の工房や金物屋などを眺めたり、街の鍛冶屋に寄ったりする。

「この砥石はいくらだ」

その夜は入念に刃を研ぐ。

ガリア・コマータの兵たちは（買い出し組を除いた）残り半数を警護として残し、街の様子を探った。

誰にも何も告げずに、リュージュはいつもどおりバールへ。

カウンターに肘突いて、ステムのようなスツールに細い足を組んで坐り、バーにヒールを掛けて琥珀の液の入ったグラスを傾ける。ミックスナッツをつまみながら。

ポケットから皮革装丁の小さな本を出して読み始める。

ウゾーニはせっかくのパラスを堪能しようと、大いに空腹を覚えたこともあって、まずは街で有名なレストランで贅沢な郷土料理を堪能することにした。行ってみると、予約なしでも入れそうだった。

「少しお待ちください」

そう言われて、ウゾーニは店内にあるウェイティング・バーで古いシェリーをアペリテフにして舐めながら待つ。期待を膨らませるこういう時間が楽しいものだ。

殷懃な給仕が来て、

「ご用意が出来ました」

席に案内され、着席した。ウゾーニは横柄にソムリエを呼び、数分にわたって入念に質問した上で、一本のワインを選ぶ。

「ワインはヴィンテージや産地ばかりではない。

どこの業者が扱うかによっても違うのさ。どんないいものでも保存が悪けりゃ、おじゃんだ」

そう独り薀蓄を傾けた。

ノゼワ村の藁で蒸したランカ産鳩の胸肉とモリーユ茸、ラングスティーヌのラビオリ、ロゼシャンパンのエマルジョン、パラスブレストという伝統菓子、ゲルームア産の仔牛と冬野菜の肉汁ソース添え…

「料理は厳密な科学であり、深遠な学問であり、また華々しい芸術だ。つまり、人間のすべてがある」

ナプキンで優雅に唇をぬぐう。

スカラ座で有名な歌劇があると聞いて、観賞に出かけた。警護数名を伴い。切符の手配はアンドリューがした。

設計者ゴリーニエにちなんで、『ゴリーニエ宮殿』と呼ばれる壮麗な劇場は弥(いや)が上にも気持ちを昂ぶらせる。

歌劇は古代風で、三人の役者が仮面をかぶり、複数の役をこなし、セリフは韻を踏む詩文調で、長音と単音の組み合わせに一定の規則を持っていた。

舞台と客席の間にオルケストラという円形のスペースがあり、十五人の歌

唱団が歌を歌い、劇を劇的にした。

ウゾーニはゆったりと席に着く。

演じられたのはオイディプスのような悲劇で、これから起こるであろう戦争を想起させた。

諸々の考えが脳髄の経路を廻る。サンサシオン（感覚・心的現象・受想）が揺さぶられるとウゾーニの集中は否が応にも高まり、思惟は奔るのであった。

アンドリューはウゾーニを警戒しやすいように、桟敷席を予約してくれた

ので、たっぷり堪能できたが、観劇中にガリア・コマータの一人の兵に肩を叩かれる。

「どうも怪しい動きの者がいます」

不機嫌そうにウゾーニは振り返りもせずに、

「どんなふうに？」

「こちらの様子をずっと見ていましたが、ふいに外に出て、入口に立っていた男に何かを告げました。

告げられた男はうなずくと、急いでどこかへと走り去りました。ジョニー

が今、そいつを追っています」

「僕にとって今は、舞台が現実で、現実は塩味のないスープか、夜明け前の靄のような夢と同じだ」

警告しに来たガリア・コマータは肩をすくめた。それでも守るのが仕事だ。主義主張は私事（わたくしごと）でしかない。

そのとき、若いジョニーが帰って来た。

「あらかじめ集合していたようです。

追跡していたのですが、空き家に入ったと思ったら、すぐに厳つい連中が

ぞろぞろと出てきました。荒っぽいそうな無法者ばかりです。
この劇場に向かっています」
「ここで乱闘はまずいな」
「どうしようか」
それを聞いて物憂げにウゾーニが言う、
「こちらも人数を集めて、ここを囲めばいい」
「しかし、それでは騒ぎが大きくなってしまうのでは」
「ジョークさ。だが、いずれにせよ、兵は伏しておかなくちゃ、いざという

ときに、ここを脱せないだろう」

「わかりました。

じゃ、俺たちも配置につきます。ここには数名残します」

そのように実行された。ガリア・コマータの兵は近くまで騎馬で来て、劇場周辺で龍馬を隠す。

公然としてではないにしても、殺気立った雰囲気が通りを蔽い、街は一時騒然とした状態となった。突如、騎乗のストランドが現る。昂然と龍馬に跨っている。

警官隊が態勢を整えて現場に来たが、そのときには、すべてが終わった。ストランドが親分らしきやくざ者を路地裏に連れ込んで襟首を左手でつかんだからだ。右手には剣を持って。喧嘩慣れはしていても、本当の戦闘を知らないマフィアは百戦錬磨の闘気にすっかり縮み上がった。

その二分後に、男たちは蜘蛛の子を散らすように消える。劇場から出て来たウゾーニに、ストランドは報告し、

「ボスらしき男の懐からこれを見つけたので、一つだけもらっておきました」

ウゾーニは一瞥した。

「アモールの金貨だ」

夜、一同が集まって諸々の報告をする。そのうちの一つとして金貨の話を聴くと、アンドリューは渋面を作り、

「なるほど。だが、もっと悪い知らせもある」

それを聞いて、ウゾーニが〝この上にもかよ〟という顔で訊く、

「何だよ」

「帝国が動きだしている。二十万の軍が動いている」

眉を顰め、

「どちらの軍が」

「両方だ。合せて二十万だ」

「バカな。帝国同士で戦争する気か。それとも、まさか不陥落城を攻城するのか」

「なぜ、まさかなんだ」

「だって、僕がパスワードを解明する意味がない」

ウゾーニは、このことで何千何万という人々が犠牲になることが許容できなかった。

「そうでもないさ。理屈どおりなら、世の中は面白くないだろ」
ウゾーニがアンドリューからそのセリフを聞くのは二度目だった。
「神慮みたいなものだと言いたいのか」
「皇帝にとっては聖なる行為だ、神への生贄に過ぎない」
ウゾーニは唇を噛む。『そんな莫迦な！』とは、もう言わない。
雨が降り始めていた。余計に憂鬱になる。
「調理場を借りて、パスタでも茹でましょう。最高のベーコンもあります。いい卵も手に入りました。なめらかな触感の濃厚カルボナーラにしますか」

シフネがニコニコして言う。ウゾーニは力なく微笑し、
「君のようなのが真の強さなのかもしれない」
料理人は拒むように両手を左右に振り、
「とんでもない！　私なんか、飼い猫が風邪を引いても、哀しくになってしまうくらいです」
ウゾーニは微苦笑した。
「そうだな」
微苦笑は風のような微笑みに変わった。

今宵、ここには泊まらず、出立することとなった。列は蕭々と降る暗い雨の中を、悄然と進む。

午後十時に着いたサンドーニという、城壁のある歴史ある町で、一軒のバールを見つけた。由緒ある店だった。古くて暗い街によく似合っている。

「皆で呑みに行かないか」

ウゾーニが言った。言葉にはしなかったが、愕く。まったく以て唐突だった。彼は今まで仲間を誘うことなどなく、常に一人でいたからである。

しかし、リュージュは意外そうな顔もせず、いつものことであるかのよう

に、さらっと、

「行くか。海から離れているのに、あの店にはラムもあるらしい。羊の肉と、豚の腸詰と、山羊のチーズで一杯やれば、からだも暖まる」

ウゾーニは黙ってうなずいた。※ラム酒は船乗りの酒とされていた。

「まあ、気分はテキーラだがな」

かくして、ウゾーニを中心に、アンドリューやストランドやボーノやシフネやリュージュやリオンやレオンや数名のガリア・コマータたちがランプに照らされた吊るし看板の下のドアを入る。

鉄条の吊るし看板に『憂悶の子らの集い亭』とあった。

ウゾーニが口上を述べる。

「さて。

奇しくも今宵はささやかな晩餐となったが、僕は今さらながら悔いていることを告白しよう。

不陥落城と匣への学究的な大いなる興味と大いなる報酬に惹かれ、またもう一つの今は言いたくない事情で、この件を引き受けたが、このことが最善の選択ではなかったと悔いている。

だが、事態をいくらかでもましな方向に変えることが、可能であることが、僕にはわかっている。

僕は大いなる謎を解いた。その仕上げは、『秘密の森』で、その神霊性を鍛え上げられるだろう。と言っても、何のことかわかるまい。

いずれわかるかどうかも、定かではない。これは大いなる高みで解く謎なのだ。

さあ、もうこれ以上、今は言うまい。語ることは虚しい。笑うべきなのだ。

呑もう、喰らおう。

ささやかな、勝利の宴だ。帝国の宮殿で行われる虚仮（こけ）の宴ではない。ここで行われるのは真実の宴だ。

乾杯」

そういう奇妙な、不得要領な始まりであっても、最初は酒あり肉ありで弾んだが、多弁なアンドリューやボーノやシフネとは反対に、リュージュやウゾーニやレオンは無口であり、リオンはこういう場ではあまり派手さも出ない中間的な存在で、ぼんやりしたまま最低限の受け答えのみ、ストランドは不必要なことしか言わず、じきに宴は沈みがちなものとなる。

薄暗い店内で、ロウソクに照らされる面々は顔に大きくはっきりとした陰翳をなしていた。

窓の傍で、店の一番隅にあるテーブル席の隅っこは、微睡むような深い闇に隠されているかのよう。レオンはまさにその〝隠れ家〟で、聖なる祈祷書を読んだり、手紙の草稿を書いたりしていた。

皆を誘ったウゾーニはパイプを燻らし、もの思いに耽るばかり。

リュージュは思案げに、どこということはなしに、どこかをじっと見ていた。

最も快活だったのはシフネで、彼は出された料理を吟味・分析して蘊蓄を語る。ボーノはそれを受けて味の見極めを刀剣の鑑賞に喩えて返し、刀の話からの連想で、アンドリューが良い砂鉄の産地と製鉄事業者の大きな買収があったことや、黒胡椒の相場で大儲けした商人の話などをした。

つまりは憂鬱な、寂しい晩餐である。

さように、弾まない会話がしばらく続いていたが、リュージュがまなざしにやや熱を帯び、

「あの隅にいる奴ら。熱心に話し合っている」

物憂げにアンドリューもそっちを見るも、
「酒場でだって、熱心に話すこともあるだろうさ」
だが、ウゾーニが蒼白になって、
「劇場の傍で見た奴が混じっている。打ち合わせをしているかのように見える」
「やれやれ」
アンドリューは歎息した。
だが、離れているので、何を話しているかはわからない。

「近くに行ければよいが」
ボーノがそう言ったが、リュージュがたしなめ、
「近づいたら、ばれるだろうな」
「でしょうね。俺は今日、会ったばっかりです」
ストランドがそう言った。
しばし逡巡するうちに……、隣のテーブル席で、老いた労働者がぼやく声が、
「やれやれ、だ。

おい、聞いたかい、相棒よ、あの噂だ。おい」
「あゝ、聞いたさ。パラスの話だろ、またもめごとだ」
「スカラ座の騒動な。密かに王の兵隊が動くって噂だぜ」
「金さえもらえれば、俺らの王は他の皇帝のためでも働くさ」
「俺らから散々絞り上げてやがるくせに」
彼らは眼で合図をし、言葉にするまでもなく、黙って一人ずつ適当な間隔を置いて席を立ち、ごく自然に、影のようにささと店から去った。
「着いたばかりだが、行くか」

「逃げるしかないでしょうな」

苦い顔をするアンドリューに、ストランドがそう言った。

リオンとレオンが急いで龍馬を馬車に繋いだ。騒がしくならないよう気をつけながら、戦士たちもあわただしく鎧を身に着ける。

夜の出立であった。

少人数で少しずつ移動を開始する。

さまざまな方向へ散った。いずれにせよ、裏路地を使ったが、なるべく、同じ道を使わないようにする。

二十人くらいが出た後で、呑気なふりをしてのんびりパイプを燻らすウゾーニの乗った馬車もゆるりと動き始める。

「静かに、そっと進め」

ウゾーニは空想に耽るかのように、幻想のような窓の外を、頬杖を突きながらじっと眺めていた。

馬車の周りに二、三騎ずつ、極小のグループを作って騎馬が散在している。東西南北それぞれの方角で、町のはずれに来ると、それぞれの門から町を出た。

そして、東西南北それぞれの街道に出ると、極小グループはじょじょに寄り添うように集まって、緩やかな大グループを作り、各々五つの街道を進む。

緩やかな大グループ、とは同じ街道を使いつつも、決して密着した一団にならないということであった。小グループか、極小グループの状態を維持して、少しの距離を置きながら、緩やかな大集団を作る、という意味である。

「何だか、緻密で楽しいな。いやいや、結構、まるで窓枠という舞台に映ろう芝居に牽き込まれる感覚だ。申し訳ないが、傍観者の気分だ。

パイプも余計に旨くなる」

しかし、ある程度、進むとその大集団も動きを変えた。
途中から道を離れ、雑木林をかき分ける。兼ねてから決めてあった集合場所で待ち合わせるのであった。
「よし、そろったな」
最後の大集団が来ると、先に到着して休憩していた戦士たちも黙って立ち上がる。
「おい、俺たちは今、着いたばかりだぜ。俺たちに休憩はないのか。させてくれよ」

ストランドは冷たく言い放つ。
「休憩はなしだ。厭なら来なくてもいい。ただし、斬り捨てる」
髯図らの傭兵は左右の手を上げて掌を見せ、
「わかってるよ、隊長。行きます。ええ、歓んで行きますとも。傭兵は不死身です。俺たちに疲れなんてありゃしません」
「よし、来い」
小雨が降って来た。氷交じりだ。

「ぶるるるっ、ぅう、さぶい」
老傭兵も振り返って言う、
「あゝ、だいぶ冷えて来たな」
そう言う息は真っ白だった。
そんなさまを、馬車の窓から、ぼんやりとウゾーニは頬杖突いて眺めている。どこか幻想のようであった。自分は暖かい膝掛を掛けて豪華な車内にくつろいでいる。
不自由があるとすれば、照明を消しているので、本が読めないくらいのこ

とだ。龍馬の牽く馬車は、普通の馬が牽く馬車では、到底、入り込めないようなところも、何ら支障なく、平気で進んだ。

尖頭で枝を払いながら進むストランドが、

「山に入るぞ」

その連絡は小さな声で、先頭から最後尾へと順次、口頭で伝言された。

鬱蒼たる山奥に分け入る。闇の中で草をかき分け、小枝を折りながら、斜面を進んだ。

「おい、先にいくやつに追従するんだ。見失うなよ。迷っても救わない」

午前2時に隠れやすい窪地を見つける。

「悪くないな」

ストランドがつぶやく。

野宿した。追っ手らしき蹄の音が遠く街道に聞こえたが、その夜はそれ以上は何もなかった。

睡眠時間も少なく、早々に出立し、国境を越えた。関所は通らず、百人以上の隊が山野を抜けて密入国したのである。

ウゾーニが言った。

「ブルーガにも寄りたい古跡がある。
そこは特に、寄らなければならない」
アンドリューは肩をすくめた。
「あんたがそこに寄ろうと考えるってことを相手は当然のごとく察するんだろうな」
「可能性は高い」
「絶対だろ。俺にはよくわからないが」
「そうだな。

絶対だ」

「むろん、それでも行くんだろうな」

「林檎をもぐために雇われたのに、危険だからと言ってそこに行かないなら意味がないだろう」

「まあ、理屈はな」

そう言うアンドリューの肩を軽く叩きながら、ウゾーニは真剣なまなざしで次のように言った。

第18章　ブルーガ王国　秘密の森　究竟の奥義

「ある意味これから見るものは、一連の謎の核心なのだ」
ウゾーニはそう言った。さらにつけ加えて、
「我々は謎を解きながらも、実は真理を学んでいるのだとも言える」
うんざりした顔でアンドリューが、
「いつも言うが、腹の足しにならないことに興味はない」

「君の言うことは正しいね。
これから見ようとしていることと、何の異叛もない」
「そりゃあ、ありがたいね」
肩をすくめてそっぽを向き、歩き始めた。
列をなし、鬱蒼たる森を深く行く。
神聖な静謐に満ちていた。樹木が繁っているのに風が通り、爽やかである。
径には（デコボコではあるが）石が敷かれていた。やがて日が差して少し明るい場所に出る。

そこに見た。

それは古く、毀たれた小さな神殿であった。

小さいが、それゆえに草創期のものであることを表す。

ゆっくり歩んだ。

中に入る。

天窓から日が差していた。美しい日射しであった。きらきらとまばゆく、

塵や埃を燦めかせる。

空気がもの凄く清浄であった。

ウゾーニは感嘆する。

「あゝ、これこそ究竟の実在する奥義なのだ」

神殿は一つの空間しかなく、その小さな方形の空間の中央に、一つのあざやかな立像があった。

乙女像、三叉戟を持った女神だ。

全身に泛ぶ聖文様は、青、蒼、碧、藍、紺、瑠璃、群青、青紫で繁縟なるまでに精緻に、烱(あき)らかに赫(かが)やく。

その中でも  の象形文字が一際あざやかであった。

トランス状態になって狂乱する巫女のかたちを表すという。神憑りの状態であり、そのときに発する言葉は、神の言葉であるがゆえに、必ずやそのとおりになる。

その意味するところは「然り」であり、「肯定」の義である。そのとおりの意であるから〝若し（ごと）〟（実際、漢字の「若」も狂乱する巫女の象形文字に由来する）のような使われ方もある。

さて、乙女像の髪の毛は、紫を帯びた銀と、緑を帯びたプラチナ色で燦め

き、神々しく睿らか。

絹糸のような毛がフレアのように浮いて揺れるのは、真義を顕す文様の聖性から籠れ揚がってゆらゆら燿える、光による円環と五芒星との、オーラによって、揺れているのであった。

青き林檎のごとく、生命の豊饒にあふれ、萌え始めの初芽のように柔らかで僂い皮膚も、白乳のように光燦々と眩い。

聖の聖なるイ・ゐあは炎のように屹然と立っていた。

未だ女性らしさすら芽生えぬ、男女の差異とてもない、両性のような年頃の姿ながら、そのまなざしは強く、決意に満ちている。

非情で、巖然（げんぜん）たる峻酷（しゅんこく）、全てを凌駕（りょうが）する超越の、射抜くような燦々たる放射の双眸、ブリリアント・カットのように燦熙（さんき）あふれ、強烈にて光裂く。

眸（ひとみ）の中央なる瞳孔を囲むフレアなる虹彩（こうさい）、薔薇窓のよう。

瞳孔は凄絶なる透明にて、水深十数mの底の砂の粒の影さえも、鮮明に透けて見えるほどの透明度の湖のようであった。

そのあまりの純粋清潔の真空に、人は息することすらかなわぬ。絶命す。温暖湿潤を好む地衣類のごときあらゆる生命は息絶えざるを得ないのだ。

究竟の〝ヰ〟

神殿を去り、場所に乗って再び旅を続けても、ウゾーニは呆けたように、恍惚としていた。

そして何度もつぶやいた。

「やはり、そうだ。そうでなければならないんだ。究竟の答は・・・」

やがて、フロンク王国に入り、数時間進むうちに、モルグルの森が見え始めると、彼の表情は変わった。

その表情は暗鬱で、深く、複雑であった。

皇太子の消えた森。冤罪に遭った番人がいた森。

蒼ざめたかと思うと、どす黒くも赤くもなり、最後は色も絶えた。顔は最初厳しく、やがて激しい憤りに満ち、終には悲しげな空漠、終には意味深げに。

森を眺める。

その晩、終に誰からの攻撃も受けなかった。

翌日、朝食を終えると、地図を閲しながら、ウゾーニが、

「ここに一応、寄ってみようか」

予定外のことを言った。

アンドリューはすぐに隊列の向きを変える。

古い修道院に附属する図書館で、三時間以上もウゾーニは書籍を渉猟した。

何も得られず、消沈するかと思えば、反って清々しく、

「こういう日もなければ嘘さ」

と言って、力なく微笑む。

再び街道を往き、日が大きく傾き始めた。

人里離れた場所では野営しかない。ただし、近くに一軒の農家があったので、ウゾーニやアンドリューらは、そこに宿を借りた。

金貨を一袋も渡すと、主人は歓声を上げ、上機嫌でごちそうを振る舞う。ワインを傾け、肉を炙り、パイを頬張った。薄くスライスした生ハムを浸すオリーブの実から搾ったオイルは実に上質で、舌鼓を打たざるを得ない。

「樽ごと買おう。このオリーブ・オイルは最高だ」

シフネが樽から柄杓で掬ったオイルを含みながらニコニコして眼を輝かせる。

リュージュが嘲るように微笑んだ。

夜、暖炉の炎を囲みながら、影が揺れるのを見つめていると、ウゾーニは深い幻想に捉われる。リュージュが胸ポケットからスッキトルを取り出した。

一口呷ると、バーボンだった。

「八年物か」

ウゾーニが不満げな顔をする。リュージュはククっと笑った。

そのとき。

「おじいちゃん、また昔話をして」

孫にねだられて、老農夫は語った。労苦の刻まれた皺は深く、炎に照らされて深い陰翳を湛えている。手は固く干乾び罅割れ、革のようだった。

語り出した話は、炎の不死鳥と龍の争いの伝説である。

不死鳥は或る日、人間の捧げた食べものを食べてしまった。

すると、まるで物事は『いみ』や『かたち』が決まっていないといけない

ような気持ちになる。

不死鳥は言った、

「決まった形じゃなくちゃいけない。

石はいつでも石だから本物の石だ。

砂になったり、火になったりしてはいけない。

正義は曲がってはいけない。正義の味方はいつも正義でなくてはいけない。

黄金は錆びないから価値がある。

そういうふうに変化しないものには『価値』が定住する。

あゝ、『価値』があると何と心が安らぐことだろうか。『価値』はダイヤのように明晰だ。我々は輝くものを好む。

だから、『価値』を追い求めない者は愚かだ」

すると、何でも否定したがる龍が嘲笑した。

「あはは、造られたものは幻だ。希望も絶望もない。なぜならば、造られたということは捏造されたということだからだ」

不死鳥は激怒し、叫ぶ。

「生を否定する悪辣者よ」

龍も言い返し、

「否定も生の営み。すべては生の手のひらの上で躍るにしかず」

激しい争いになった。

二つは絡み合い、巨大な渦になった。

真逆が一つになったので扉が外れ、柵が壊れ、無際限な自由の舞いになった。

四方と八方に自由で、行き止まりも袋小路も作れなくなってしまい、距離も時間も四方と八方に拡がり進んだ。先も後も定かにわからず、いや、拡が

りもあまりに自由で拡がりでなく、始まりも始まりでなくなってしまった。
その途方もないミート・ローフは切り方によって無限のかたちが現れる。ナイフを入れると、一つの切り口が十一の面を持ち、それを切ると十方の面になった。
そして、無数の宇宙が生まれた……
ウゾーニは眼を啓いて聴き入った。
聴き終えると歎息し、アンドリューに言う。
「あゝ、世の中は、不可思議な契機に満ちている。

昼間、あんなに努力しても無駄骨を折ったのに、今、安らぎ微睡みながら、このように探していた答を見つけてしまった。

あゝ、何ということだろう」

そう言って楽しそうに笑った。アンドリューは意味がわからず（かといって尋ねようともせず）肩をすくめる。

まったく自然体のウゾーニは、あたかも天地の理と呼吸の合った人のようであった。

翌朝、霞を分けて湖に沿う道を往く。山に接する湖はその狭き道も嶮しく、

正午を前に隊は大いに疲労した。
やがて、湖の傍に残滓を晒す、古い砦の跡を見つける。
「あそこで休憩しましょう」
ストランドがアンドリューに提言し、了承される。
ウゾーニは湖畔を歩いた。
壁だけが無残にたつ。
廃墟のその壁を眺めると、文字が刻んであった。
最初からあったというよりは、この無常を露呈するさまにあわれを感じ、

旅人の誰かが想うところを彫ったのであろう。誰だかはわかりようもない。
男性言葉なので男だとわかるだけだ。

人は何もできない
何も遂げられない
何もかも無意味だから
それは絶望ではない
それは自由の歌

ウゾーニはしみじみと味読した。

「良い言葉だ。

だが、彼は世に認められることはないだろう。なぜなら、彼は真の詩人だからだ。殺戮の世界で真の芸術家が認められることは稀有だ」

フロンク国の文字の綴りに拠れば、斉しいという文字は3つが揃うという象形文字であった。三叉戟の尖端と同じ形をしている。

三つが斉しいという意味だ。またそれは巫女を表す象形文字にも似

ていた。

彼は大いに感慨を深くした。

三つのパスワードは確かに斉しい。クロード王の精神は確かに清々しい。

第19章　飛翔する叙事詩は空挺部隊の喩えか

クルアールの巨大軍艦による大艦隊は予定よりも一日早く接岸し、兵士が

次々と上陸していた。それでも、兵隊や兵糧や武器等々を降ろすのに二日はかかる。

「急げ、ここで戦う暇はない」

アモール帝国が迫っていることを彼らは察知していた。すべては遺漏なく、迅速に行われる。

しかし、このときに限っては、神は彼らに微笑んだ。

接岸の翌日である。

「おい、見ろよ、西の方、あの遠い沖の方だ。何という、凄い黒雲だ」

「凄まじい嵐のようだ」
「しかも、あそこばかりに」
「こちらに影響がなければよい」
「アモールの艦隊が迫るという情報だったが」
「まさに今、あの辺りでは」
「我らには好機、幸運」
「あれならば、アモールの軍艦がここまで到達することはできぬ。いや、辛うじてできても、もはや軍艦の残骸の群れに過ぎない」

しかし、実際はそうでもなかった。

不可侵領域へ向かう軍を降ろした後、帰りを待って係留していた大艦隊は（当然、襲撃を想定して、抗戦する装備を充分に持っていたはずであったが）嵐を越えてやって来たアモールの強靭な艦隊によって、あえなく撃沈されてしまうのである。

とは言え、運命のような激しい嵐によって満身創痍であったことも事実である。

その自然の災いが来るまでは、実に快適な航海だった。

爽やかな潮風、白雲に碧海である。

アモール帝国の大艦隊は縦横に整然とならび、その中央部にいる将兵らは、まるで陸地を行くような安心感であった。

アモールは（他の二帝国も同じだが）ヴリアート石によって潤っていた。特別な産業もない島国が貿易で巨万の富を築き上げたのは、この島にしかない、ダイヤモンドよりも希少な貴石のお蔭であった。

その透明な石は石の中に透明で見えないいくつもの面を持っていて光が

無限に屈折し反射され、ブリリアント・カットされたダイヤモンドに光線を照射したときの数十倍の輝きを見せる。

その耀きはまさしく眼がくらむものであった。

価格はダイヤモンドの千倍で、1カラットで豪邸が買える。島全体でそれが年間で八十トンも掘り出されるのであるから、帝国の富の測り知れなさがうかがえる。

富裕な三帝国の中でも、皇帝の趣味で怖ろしく豪奢なアモール帝国軍は世界で一番贅沢な軍隊と呼ばれ、行軍する人員のうち、兵士は半数強程度で、

料理人やソムリエ、荷役夫や雑役夫、掃除夫やベッド・メイキング師、菓子売りや花屋、ビリヤード場管理人やバーテンダー、鍛冶工や大工、俳優や歌手、医師や按摩師、靴職人や仕立屋、彫金師や宝石商、髪結いや爪磨き職人などなどである。

食後は午睡（シエスタ）の時間があり、今日も好天で、甲板にはいくつものデッキ・チェアを出し、幾十人もの兵士が日光浴をしていた。

「シャンパンを持って来てくれ」

将校が雑役夫に頼むと、すぐに冷えたシャンパンが銀の盆に載せられ、運

ばれる。

「気持ちのいい風だな」

「あゝ、最高の天気だ」

「このまま続いてくれるといいが」

だが、そのときすでに局地的な暴風が迫っていたのである。

突如、現れた黒雲があっと言う間に空を蔽った。さあ、急げ、嵐だ、と警鐘を鳴らす暇もない。たちまち暗くなり、豪雨と強風だ。しかし、遠くの空は青々としていた。まさしく運命としか言いようがない。

「まるで龍神様の怒りのようじゃ」

遠くの浜辺から見ていた漁師たちは口々にそう言った。

あまりにも突然で、限られた狭い地域にしか起こらなかったからである。

強い風が吹く荒れ、激烈な雨が甲板を割らんばかりに叩きつけ、大暴風雨となった。凄まじい風がマストを折ろうとする。

アモールの大艦隊と言え、自然の前では、まるで木の葉のようであった。無力で脆弱な存在でしかない。

赤い顎鬚の巨漢ムバーラ船長が大声を張り上げた。

「急げ、帆を巻き上げるんだ。
いざとなったらマストを切り倒せるように、大斧を用意しておけ」
顔色の悪い尖った顔のルー少尉が報告する。
「ハムバール提督、帆はすべて巻き上げました」
提督の傍らにいたマール将軍がうなる。
「幸い風は弱まってきたようだ。甲板の水をバケツで汲み出せ、全員でやるんだ」
誰かが叫んだ。

「詩人を呼べ。歌って神を宥めよ」

さっそく詩人ホムレスが朗々と歌ったが、声は風にかき消されてしまった。

「だめだあ、神の怒りが鎮められない」

詩人は綱で縛られ、生贄として海に放られた。

ハムバール提督は歎息し、

「これも天命か。

芸術も神を慰められないとは。どうやらクルアールの艦隊を阻止することはできないようだ」

しかし、白皙金髪碧眼のゾルゲ大尉は反論し、
「まだ停泊船を襲うことができます。金剛石のような意志がすべてを決めるのです」
ハムバールは双眸を翳し、遥か遠くに見える陸地を眺め、
「意志ならば敵にもあろう。奴らだって奇襲に備えているに相違ない。むろん、我らが向かっていることも知っているはずだ。だが、闘うまでよ。いずれにせよ、帝国の作戦が根底から狂うことはない」

強靭なるアモールの艦隊は木の葉のように翻弄されながらも、大きく戦闘能力を削がれるようなことはなかった。

クルアールの軍隊が楽観的に観測したようにはならなかったのである。少女皇帝の軍が着岸した日の三日後に、アモール軍は停泊中の敵艦隊を視野に捕らえた。

「もはや出撃の後のようですな。お留守番しかおらんようだ」

マストの上に昇って、双眼鏡を覗くマール将軍はわかり切った事実であるとしても、歎息する。

海路を阻止しようとしたネイロの考えは実行できなかった。しかし、攻撃の機会はまだある。

「夜だ。日が暮れたら、一気に進軍しよう。奇襲をかけるのだ。それまでは錨を降ろし、ここに留まる。奴らからはまだ見えない」

クルアール海軍は数千の兵を残して地上へ降り、不可侵領域へと行軍していた。最終部隊が出立するまで二日以上。わずかの差でアモール軍と入れ違うようなタイミングであった。

さて、上陸軍は河を使って北上し、ハイリッヒトウムを目指す。

初日の午後に出立した少女皇帝アルペジアの近衛部隊は黄金に輝く小型戦艦で、岸に沿ってならぶ百頭の龍馬に牽かせた。

その甲板に据えられた大きな天蓋附きのベッドに横たわり、蜂蜜の入った生薬のジュースを黄金の杯で飲み、物憂げに楽人の奏でる楽曲に耳を傾け、停泊している自軍の艦隊が壊滅の危機にあることなど夢にも思わず、空想に耽っていた。

そしてその夜、奇襲は行われる。

実際、停泊中の艦隊を襲撃した知らせは、すぐにアモール皇帝ネイロ・カ

リグアの許に届いた。

そのとき、皇帝は行軍中とは思えぬ贅沢な大理石造りの広い蒸し風呂に入り、重臣や将軍らとともに、数多の女奴隷に美しいからだをオリーブの石鹸で洗わせていた。

「微涼室で聞こう」

そう言った。

微涼室で、ひざまずく使者を前に、長椅子に半ば横たわりながら、

「では、かなりの打撃を与えたのだな。

まあ、それでも良い。阻止が目的であったが、朕はさほど固執してはおらん。

下がれ、褒美を取らす。今宵はよく休め」

周囲をソファで囲み、深い絨毯を敷き詰めた小会議用の個室に重臣と将軍を呼び集め、貴腐ワインを飲みながら、

「翼有る龍の用意はできたか」

シーザル将軍が立ち上がった。

「応龍は間もなく帝都を飛び立ちます。

空からの攻撃を想定する者は、この島にはおらんでしょうな。勝利は確実かと思われます」

「この世に絶対はない。

あるとすれば、絶対がないということのみが絶対だ。

龍にも天敵がある。または、龍と一口で言っても、多種多様で、力の差もある。成果の得られない場合の策を充分に練っておけ」

「御意」

「そろそろ、シス湖にも近い。

今宵からは兵に肉をたくさん食べさせろ。諸王から差し出させるんだ。民衆からもぎ取るようなまねはするな。飽くまでも領主の倉庫から奪い取れ。よいな」

「御意」

「それから、晩餐の前に詩人ウキリヤと彫刻師ミケーノをここへ呼べ。朕の黄金の杯に琥珀（色）の酒を満たしておくようにせよ。

以上だ。諸卿、また晩餐時に会おう」

詩人と彫刻師が来ると、皇帝は言った。

「ウキリヤ、この戦争叙事詩の出来栄えを、朕に歌って聴かせよ」

「ありがたき幸せ」

詩人はアモールの歴史から始まり、今回の遠征と、皇帝の英雄的言動を頌め、戦に臨む兵士の勇壮と悲愴を朗々と歌い上げた。

皇帝は杯を傾けながら聴く。

この世の憂さを忘れさせる詩の天翔る崇高と高揚、雲を越えて碧空を舞う。

「あゝ、詩は素晴らしい。この世のモノはすべて地を這う。それは魂を疵つける。人間的な生き方から乖離している。人間性を疎外する。

さればこそ飛翔するものは神の心臓だ。
芸術は神への讃歌に他ならない。さて。
ミケーノよ、作品の進捗はどうか、おまえは神に愛でられた才能の男だ。
汝はいつも朕を恍惚とさせる」
「はい、クルアール帝国を打ち砕き、女帝アルペジアを屈服させる皇帝の偉容は美の極致に至り、史実を燦々と輝かしめます。
柔らかな肩の筋肉から胸の盛り上がり、わき腹に捻じれる筋肉、太腿からふくらはぎに優美に流れる線、少女のように柔らかくも無駄のない、少年の

ような青い繊細さ。

アンドロギヌスを完全なる美というものもありますが、そのような者を遙かに超える微かに妙なる美しさです。

しかし、その双眸は雄渾に遥か彼方を見つめる…あゝ、陛下は真に偉大です。

ネイロ・カリグア陛下こそは、歴史という怒濤の史劇に、刹那一際強き光を輝かしめます」

ミケーノは自らの演説に感極まったかのように陶酔の表情を泛べる。

「善きかな、善きかな」

皇帝ネイロ・カリグアはやや嘲笑も交えながらも、満足げにうなずいた。

「戦争は芸術の劇的装置だ。ドラマだ。

思えば、人生そのものが芸術のためにあるのではないか。リアリティは鮮烈さのためにある。カノンにヴィヴィッドを添える。

天界のごとく静謐なる均整の古典主義と、悪魔的・邪教的なまでに激情的で、劇的で、悲愴なる荘厳をなすロマン主義との完全なる融合、これこそが極致なる完璧であり、完璧をなすことこそが〝生命〟ということそのもので

ある。

芸術こそは神に捧げて歓ばれる最高の生贄だ」

応龍とは翼のある龍である。その速さは千里（四〇〇〇㎞）を一時間で翔ける。

龍はもともと翼なくとも飛翔するものであるが、この世界では龍神のように特に神性の高いもの以外は翼がないと飛ばない。

ノルテ（北大陸）北西部の聖地周辺に多く棲息する。

その日、アモールの帝都コンスティーヌの空を奇怪な生物が舞った。

「あれは何だ」

庶民は怯えた。

風に靡く長髯の陰陽師イグラーは皇帝の宮殿の尖塔に逆光を浴びて立ち、応龍の群れに向かって言った。

「さあ、行くがよい。

我らが鋼の装甲の軍兵を乗せて、黄金の騎士を乗せ、勇ましき猛将を乗せて。

ハイリッヒトゥムの空を蔽え。
不陥落城を陥落させよ。
あゝ、我らが皇帝は偉大なるかな。
彼の城を、史上、空から攻めた者は誰もいない」

さて、空挺部隊の先頭を行く龍神に乗る龍騎将校ワルクレ少尉は兜からはみ出る髪を靡かせていた。顔は鉄の面で覆っている。そうしないと息ができないからであった。

応龍は超音速で飛ぶ。

龍の背に乗せた屋根の低い一階建ての楼閣に空挺部隊の二十名を乗せ、騎手一名と副騎手二名で操るが、手綱を使うのではなく、首筋に指先でなぞるように決まった記号を書いて指示を出す。

ただし、手綱に変わる物がないとからだが安定しないので、龍の首輪に鎖を繋いでそれをにぎっていた。

つまり、操るというよりは、龍へ依頼する、というのが正確で、信頼関係の下に成り立つものである。

また、応龍と応龍の間では、飛行中も鳴き声や手足の動き、姿態のさまで、意思疎通ができるので、編隊を組んでいるときには便利だった。そのときそのときで、随時、臨機応変な作戦の変更ができるからである。

騎手は自分の乗る応龍の鳴き声で概ねその意を知ることができるので、間接的に騎手同士の意思疎通も可能であった。

応龍は島には棲息せず、主に北大陸や東大陸に多く、今回、特に呼び寄せたのである。龍を戦友とする騎士か、もしくは龍そのものに、来てくれるよう依頼するのであった。

帝都を発った応龍の空挺部隊は、一時間もしないうちに、不可侵領域ハイリッヒトゥムの上空を飛行する。

「見えたぞ。あれだ」

ワルクレが副騎手ドーンに言った。

ドーンもマスクの下でにやりと笑う。

殺戮の予兆を感じた微笑だ。

「いる、いる、あいつらクルアールの特殊部隊ですね」

ワルクレが剣の柄をにぎる。靡く髪のごとく、魂が勇躍する。

「さあ、ショー・タイムだ」

第20章　山上の決戦

アモールの軍とクルアールの軍がウォール山の狭い尾根で激突する。戦は始まった。絶壁から絶叫とともに落下する兵、数多。

重たい鋼の剣が烈しくぶつかり合い、せめぎ合う音。ぎりぎりと鍔迫り合

う互いの眼の気迫の凄絶。

チャーリーやリックがウォール山の尾根の進軍を始めてから二日目であった。

「うらあああああ」

防備など考えず、跳び上がり片手に剣を振り上げ襲い掛かる剛の者。

「さてこそは我が名を聞け、世に轟き渡る雷剣のゴーディンじゃ！」

さように自らの名を大声する者もいる。

楯を剣で打ち鳴らし、ずいずいと進んでは次々斬り裂く重装甲兵の列。た

だし、幅がないので、方形は組めず縦一列だが。

まさに命をたやすく消耗する白兵戦であった。長薙刀で我武者羅に突撃する猪武者を飛び越えて頭上から刺す。巨漢の兵が二人の戦士の頭を鷲づかみにして断崖絶壁を放って投げ落とす。

トムは驚嘆した。なぜなら空飛ぶ龍を始めてみたからだ。しかもその龍の背からアモールの強兵が次々と降りてくる。

「こんなバカな。あり得ない、こんなことは」

低空飛行する応龍が歴戦の猛者十数名をいともたやすくにあっと言う間

に薙ぎ倒し、突き落とす。

クルアール帝国軍はたちまち殲滅の危機に瀕す。

「投石機はまだか」

「まだ上がって来てません」

「巻き上げ機は？　滑車は？　もう来てるか」

「はい、そろそろ」

「急がせろ」

アモールの空襲！　その知らせを少女皇帝へ届けるべく、すぐに使者が発

った。しかしその使者は哀れ、途中の森でアモールの暗殺部隊につかまり、帝国軍の駐留地までに牽かれ連れられる。

クトゥーゾク将軍は麓にいたが、空から攻撃してくる龍の軍団を見て、

「何てことだ、太刀打ちできない。どこまで耐えられるか。援軍は、あゝ、しかし、少女皇帝がこのことを知るまでには、相応の時間がかかる。何か手を打たなければ、全滅だ」

「は。すでに巻き上げ機や滑車を用意し、引き上げつつあります。そもそも攻城用に使う予定の物。ただ向きが上から下へ用いるつもりが下

から上へに変わっただけのこと」

将軍は余裕を見せているが、顔色は蒼白だった。

クトゥーゾクはさらに険しい顔になって、

「不陥落城ウロヴォスの周囲を特に警戒せよ。奴はただ我らの邪魔をしに来ただけではない。必勝の目算があって、匣を開けに来るのであろうから」

アモール帝国の連行されたクルアール帝国の使者は尋問され、手紙を奪われ、牢に入れられた。牢は木で作った籠のようなもので、行軍中のみの牢屋

の仮設だ。

アモール帝国のネイロ皇帝は、そのときもまだ、龍の牽く龍車で、（飛行ではなく）地上をハイリッヒトゥムへ向けて進軍中であった。

奪った手紙を読み、また将校らからウォール山での奇襲の成功の報を聞いてもあまり浮いた顔をしない。

「そうか。

まだまだわからぬな。さようなことでどうにかなるものならば、不陥落城などと呼ばれるだろうか。神慮は計り難いのだ」

そして、ご馳走を前にしたこどものように微笑んだ。

「砦に籠って籠城しろ」

トムはそう指示した。

「弩（おおゆみ）をよこせ」

巻き上げ機が巻き上げる投石機が次々と応龍に落とされているのだ。トムはそれを阻止するために、鉄の矢を射た。

「来るぞ、伏せろ」

応龍は外側の砦を攻めるばかりではなかった。『渦巻きの通廊』の上空にも及んだ。

「敵は見えないか」

応龍の首筋に設置した天蓋のない一人用の物見席に坐り、竜騎将校アグワイ少尉は鎖をにぎる龍騎兵オーレに訊いた。

「見えない。内側の城は静寂そのものだな」

「おかしいですね、もっと近づきますか？」

しかし。

「え、何だ、おい、どうした」
龍が暴れ、アグワイが喚くと、オーレは、
「だめです、言うことを聞きません」
「どういうことだ」
「わかりません」
「ともかく、引き返せ」
周囲を見れば、他の応龍も撤退している。
「まるで何かに怯えているようだ」

「龍が、いったい、何に怯えるんだ？」

応龍から尾根へと降りてクルアール軍と戦った騎士たちは烈しく白兵戦をし、又は外側の砦に籠った敵を攻め、又々その一部は内側（『渦巻きの通廊』側）へと降りて行く。

岩が剥きだしで、垂直の壁のごときの難所を降りて、兵士たちはようやく城砦を前にした。

「あれが内側の第十四砦だ」

「静かだな」

「だが、気をつけろ、応龍の支援は得られない」
「わかってるさ。さあ、勲（いさお）は死中にある。勇気を鼓舞しろ、行くぞ」
絶壁を砦に向かって降りる。
静かだ。
ただ風の唸る音がするのみであった。
砦の城壁に降り立ったが、しいんと死のように静まり返っているのみである。蒼穹の下、まるで時間が止まったかのような静寂。
歴戦蛮勇の兵士たちは反って狼狽した。

「どういうことだ。何者も出てこない。
何事も起こらないぞ。神兵が護っているんじゃなかったのか」
「信じられない。なぜだ」
「どうする？」
「予定どおりだ。
連絡通路があるかないか、確かめるチームと、『渦巻きの通廊』まで降りて不陥落城ウロヴォスまで進軍するチームとで分かれる。
連絡通路がなければ、尾根伝いで渦巻き状に進め。これが我ら空挺隊のメ

インの作戦だ。

第一に、『渦巻きの通廊』を行かないこと。第二に、ウォール山の尾根を伝わって移動し、上から奇襲すること。

不陥落城も上から攻める。

このような作戦は不陥落城攻城の歴史に於いて未だかつてない」

その考えはクルアール帝国軍も同じであった。歴史上なかったことを、偶然にも同じ時代の二人の皇帝が同時に思いついたのである。

さて、そのクルアールの兵士たちは。

尾根の風に吹かれながらチャーリーが、
「おい、何で空飛ぶ龍は撤退したんだ」
トムは厳しい顔で応え、
「わからん、ともかく今のうちに準備しよう」
「そうだな。また来るに違いないからな」
ハンもうなずく。
「あゝ、それにしても・・・た、助かったあ・・・」
サムがへなへなと坐り込んだ。

「しっかりしろ、龍から降りた敵の空挺部隊はまだまだその辺にたくさんいるはずだ。かなりの数が降りていたようだった」

「おう、やったろうぜ」

トムの言葉に皆が共鳴する。

次の空襲に備えた。「さあ、今こそ歴史に名を残そう」

それを望む者もいれば、興味を持たぬ者もいる。いずれが正しいかは言えぬとも、名を刻んだ石碑もやがて風化するし、記憶する人々も終には滅ぶことは諸人が知る。

第21章　高貴なる者は地を逝き、卑しきは飛翔する

こうしている間にも、シューニャ帝国内では混迷が続き、十二王国では調略と裏切りが続いていた。同盟を結びながらも、情勢が変われば密か、かつ速やかに敵方に通じ、結局は皆、自分こそが帝国の実効支配者になろうとしていたのである。

軍は相変わらず、移動し、ごく稀に軍と軍と鉢合わせ（通常は斥候や情報部隊が周辺の軍の動きを調べて行軍するので、不用意にぶつかることなどないのだが）になって、意地の張り合いから意図せずも戦闘が起こることもあった。

街道はどの国に於いても公的な土地、中立地帯とされ、統治する王の権限外とされたため、ウゾーニらは（初期の少人数の頃を除いて）敢えて街道をメインにして進むが、それでも諸王の軍隊に近づくことのないよう、常に細

心の注意を払って周囲十数キロに偵察数名や斥候数名を派遣し、警戒していた。

関所を避けるために、やむなく山野を行くことも幾度かあったが、わずか百名の兵とは言え、山林を忍び行く姿を、目聡く見つけられないとも限らないので、山林を行くことが最小限になるようには努めてはいる。

当然、自分たちの隊の動きが諸王の軍に知られていることは承知していた。

焚火を前に、珍しく手に入ったレモン片手に、テキーラを飲みながら、アンドリューは思案し始める。

「さて、そろそろ旗をどうするか、だな」

周りにはリオンやレオンやボーノやリュージュやウゾーニが火を囲むように坐っていた。

むろん、旗など上げていない。

しかし、行く先々で、フロンク王ヘンルイの不義を糺す、と言っている。だが、フロンク王国が近づいてきた。いつまでもこんなことを言っていると、本当にフロンクと闘わなければならないし、実際、フロンクとリアルに敵対する隣国（この場合、フロンクの隣国を言う。敵対する隣国は、ポーラ

ン王国やショコア王国）から同盟を求められ兼ねない。

実際、表面的にはフロンクと同盟関係にある隣国（ゲルームア王国やブルーガ王国）からさえも、内密に「こちら側（つまり、ゲルームアやブルーガ）につかないか」と打診されていた。

そのたびに、

「いや、いや、我らは今となっては、寡少となってしまった帝国軍に加わりとうございます」

と言って断っていた。

しかし、間もなくショコアに入り、いよいよフロンクから直接攻撃を受け兼ねない距離まで来ているのである。

「さて、どうしたものか」

「考えてなかったのか」

ウゾーニにさようになじられても、すました顔のアンドリューはまったく平気の平左（衛門）で、

「まあな。

何とかなるだろう。気楽に行こうぜ。案ずるより産むが易し、さ。笑う門

には福来る、ってな」

「ポジティブなのは結構だが、ここまで来て、おじゃんは勘弁してくれ」

「大丈夫さ」

そう言うアンドリューの人を喰った表情を、蔑むかのような眼をしてリュージュが会話に割って入って来た。

「おまえには軍略の力はない。ただの交渉人さ。

俺たちの最大の敵はアモールだ。

アモール帝国軍がシューニャ帝国の混乱に乗じて不可侵領域を冒そうと

している。既に一部の兵が侵入(兵が侵入しているかどうかはわからないが、金を使って工作している人間がいる。実際、俺たちは襲われたではないか)している。

だから、俺たちはそれを叩くんだ、と言えばいい。

誰が異論を唱えるであろう。

運良くば、フロンク王国の軍がアモールの連中を見つけ出して成敗してくれるかもしれない。

王にその度胸があれば、だが・・・

いずれにせよ、アモール帝国絡みと言っておけば、諸王は巻き込まれるのを避けるかもしれない。

この作戦には、そういう意味もある」

ウゾーニが手を打った。

「うまい。名案と言えるだろう」

リオンもレオンもうなずいた。ボーノが諸手を上げて、

「おまえは天才だぞ」

アンドリューは話を聞いている間、ずっと無関心な顔をしていたが、認め

ざるを得ないものを認めて

「よし、それで行こうか」

と言った。

パウルは焦燥していた。いらいらとした顔で、ぶつぶつ言いながら、用もなく、其処彼処をうろうろとしている。同じところを何度も行ったり、来たりしていた。時折、書籍を紐解くがまったく集中せず、そもそも今どうしても読まなければならない理由もなければ、調べたいものもない。

なぜ、こんなに落ち着かず、苛立っているのか。むろん、わけがあった。シューニャ皇帝の陵墓荒らしの一件によって、偽のパスワードをつかまされているはずのウゾーニとはかなり差をつけているはず、と自信たっぷり余裕綽々であったのに、この期に及んで、どうやらウゾーニがかなりパスワードの謎に迫っているらしいという噂が入って来たからだ。

近従者にわけもなく当り散らし別人のようになっていた。

「そんな莫迦な。そんな莫迦な。勝利者は余だ」

しかし、彼も一応の答は出したものの、未だ確信には至れていない。

「決め手が欲しい。確かに余の考えで合っているという決め手が」

焦った。魂でも売りたいぐらいであった。

何しろ、間もなく皇帝ネイロ・カリグアと落ち合うべきハイリッヒトゥムについてしまうのだ。あと一週間とはかからないだろう。

確かな答がなくてはならない。

「あゝ、ウゾーニめ、おまえが正しい答に到達するなどあり得ない。絶対に、だ。勝利は我が手にこそ相応しい！　下賤の輩のくせに！」

ショコアのカルロヴィに着き、ボヘミア・ホテルに泊まっていた。

部屋では、ロウソクをともし、揺れる炎に顔半分を照らされ、古代神の呪をつぶやく。絨毯の上に、金泥によって、魔法陣が精緻に描かれていた。天文の法則と古代伝承の神聖文字と五元素の科学と幾何学の精髄が記されている。

煙が紫の鮮やかな光輝を伴い、漂った。

黒山羊の角と頭を持った悪魔が坐っている。パウルは祈り、

「我求め、訴える。

秘められたる世界の奥義、究竟を教え給え」

荘厳なる悪魔は地鳴りのような低い声で、
「わしを大審問官と知って呼んだか」
「然り」
「汝の魂を捧げて問うか」
「然り。余は確かな答が知りたい」
「人間は愚かな者だ。
かつて森の賢者に言われたことがまだ身に沁みないらしい」
彼が言うのは、次の故事のことである。

ミダス王は森の賢者と言われたシレーノス（老いたサテュロス Σίληνος をシレーノスと呼ぶ）を捕え、「人間にとって最もよいこととは何か」と問うた。

シレーノスは頑として語らなかったが、あまり強く迫られたので、遂に哄笑し、口を開く。「人間にとって最も良いことは、生まれてこないことだ。次によいことは、早く死んでしまうことだ」と。

パウルは苦々しい顔をした。

悪魔はにたりと笑った。

「わしの答が気に入らんらしいな。
しかし、はっきり教えてやろう。これがおまえの求めるパスワードの答だ」
そう言って消えた。
彼は考えた。
「悪魔とは何であろうか。逆しまなる者のことだ。
彼らは逆しまなのだ。
彼の言うことを逆しまに捉えれば、答が得られるのではないか。
そうか、そうだ！

逆とは何か。

生存だ。神が人に、いや、命あるすべてのものに與えたまいし命題だ。生きることこそ真理だ。生命こそ間の真実だ。クロードの精神だ。

神の言葉を思い出せ。

神は「クロード王の精神に準じ」と言った。クロードの精神とは何か。

求道者であった彼は何ゆえ慈愛と平和に目覚めたか。

ニヒリストであった彼は何ゆえに真逆なヒューマニズム的な真理に到達したか。

彼には今の世と同じような経験があったに違いない。

死から永生へ。ニヒリズムからヒューマニズムへ。

つまり答は、永遠の生、永生だ。

考えてもみよ、生命ということほどの真理が世にあろうか。生命とは神がなす世界へのプレゼンス、肯定（存在）ではないか。

時に水であり、時に炎であり、時に土である定まりのないこの世界は生命だ。存在は捉え難い。青い空、風に揺れる草原、果てしない海。

あゝ、世界は生命だ。万象は生命だ。

そのエッセンス、永生の象徴、そのイデアは古来、神なる亀に他ならない。これは歴史の証明する定説であって、余の個人の判断ではない。したがって、疑いの余地はない。

万寿万歳の神亀こそ永劫なる生の象徴だ。生命の本質だ、永遠の真理、不朽の生命だ。

あゝ、何を今日まで迷うことがあったのであろう、最初から余の考えていたとおりではないか！

あゝ、真理はいつも眼の前にある！」

パウルは感涙にむせんだ。まるで解脱を得た人のようであった。神の叡智に到達した古代の哲学者のようであった。

黄土色の頭巾をめくり上げて、飛び上がらんばかりに狂喜する。その姿は、まるで輝くかのようであった。

「解けた、遂に解けたぞ！　つまり、答は」

感極まる。

「楯を持つ神亀だ！　それしかない！　楯を持つガルーダ、悪龍を退治する神鳥、隼（とり）は神のお告げを運ぶ象徴だ。

神亀とこれと足せば、さざ波すら立たぬ平和、寂滅為楽の平和になる。
だから、シューニャ帝国のパスワードはアレだったのだ！」
極度の緊張から放たれて感涙し、天に拳を挙ぐ。
「勝った！」
馬車に揺られながらウゾーニは今宵も忘れ去られた古い書物を読んでいた。
初代アモール皇帝の語録だ。その一つが眼に留まった。

『地を這うものは卑しい。戟は卑しい匹夫の武。高貴なるものは飛翔する。高貴なるものは戟を止める』

嘆息する。

アモールの皇帝が飛翔するものを賞讃するのは理由があるのだ。そして、それはパスワードの大いに関連があった。パスワードの設定に当たって、神は本質を能く鑑みて選んだのである。

ちなみに、クルアールの皇帝なら、地を這うものを賞讃したであろう。さらには、三叉戟を賞讃するに違いなかった。現に、ウゾーニも見たとおり、

それらはパスワードに大いに関連している。

ならば、矛盾という言葉にもあるとおり、アモールの皇帝は楯を賞讃するに違いない。そう独りごちた。

「あゝ、もうこれで謎は完全に解けた。確信に至った。

パスワードは僕の手許にあるも同然。

造る必要はないが、念には念を入れて、ボーノに造らせておこう。何事も入念に準備しておくに越したことはない。

完璧こそ神への讃歌だ」

またもや長文の手紙を認め、〝マリー〟に託した。

「いいかい、お願いするよ。これだけは奪われてはならない。絶対に安全な方法で渡したい。だから、敢えて戦線を離脱し、密使として皇帝アルペジアの許へ行ってほしい。

この世でどのようなことがあっても。絶対に密書を奪われない者と言えば、君しか思いつかない」

黙ってうなずくと、ひらりとまたがる龍馬をいななかせ、〝マリー〟はあっと言う間も与えずに颯(はやて)のように去って行った。

第22章　ショコア王国

カールス王の領土、ショコア王国。管弦協奏曲。歴史ある古都。一時、帝国の都だった時代もある。その趣があった。

首都ブラーグには大河モーダルが滔々と流れ、両岸は小高い丘で、その頂上にブラーグ城やヴィーグ大聖堂、カールル大学がならぶ。

ウゾーニら一行は首都を目指した。

国境を通過し（このころになると関所の通過も手慣れたものとなっていた。アンドリューはそのスキルに磨きをかけていた）、山岳地帯に入る。空を雲が蔽い始めた。

酷く冷える。

「雪になりそうだな」

騎乗のストランドが鬚をひねって空を見上げ、つぶやく。

「急ごう」

「間に合うかな」

つぶやきを聞いたアンドリューは開けていた窓（ウゾーニのパイプの煙が籠っていたのだ）から首を出し、そう尋ねた。

「厳しい感じですね」

ストランドは堅い表情で応える。

案の定、下から吹き上げるような標高の高い位置で、雪の飛礫に見舞われた。

「うわ、こりゃあ、堪らん」

ガリア・コマータの猛者たちも凍える。
アンドリューは駅者席にいるリュージュに相談した。
「どこかで避難するか」
「そうだな」
遠く万年雪をいただく銀嶺が見える。美しいがそれが意味するものは死だ。
王都ブラーグはすでに遠望できる位置であるとしても。
「もうひと頑張りという気がしなくもないが」
アンドリューは言ったが、直接寒さに当たっているリュージュは、

「そいつはどうかな。フリーズして永遠に保存されたいなら別だが。山をなめない方がいい。永遠性を求めるのは人の常だがな。ふ」

ウゾーニもリュージュに同意してアンドリューに言う、

「彼の言うとおりだ。求める答は、すでに見つかっていることだし。無理して、ここで斃れては元も子もない」

吹雪によって視界が遮られ、延々と進むうちに、やがてどこか遠い世界に意識は運ばれてしまう。

道を外れて大岩と松林に囲まれた場所に野営する。厳寒。真っ白な雪がす

べてを蔽い尽くす。白しかない。
「ともかく風除けを作らないと堪らん」
木の太枝で風除けを作った。シフネが石で大きめの暖炉を造る。それはかまどを兼ねた。
「食事は炎に始まるからな」
だが、烈しい風によって、今にも消えそうである。弱々しい小さな火だ。鍋も煮えそうにない。
「う、ぶるる、風が冷たいぜ。眠れるかな」

ジョニーが顔を顰めた。

織り目の粗いぶあつい毛織のチュニックにぶあついマントをまとう黒顎髭グレーが哄笑し、

「若造、このぐらいで寒いだの、暑いだの言っていちゃ、傭兵は務まんねえぜ。笑い飛ばせ！　笑う門に福来る、だ」

そう言って、ジョニーの肩を大きな手でバン！と叩く。

「それにしても冷えるな。軽く眠ったら、早めに出発しよう」

アンドリューはそう判断する。

確かにひどく凍えた。見張りも立てず、運命愛的な無条件の休憩を取り、夜明け前に出立する。

早朝、街に着くと、アンドリューはまともな宿泊場所を探し始めた。たまたま様子を見に入ったホテルで、ワン・フロアを丸ごと借りれそうなことがわかる。タイミングの良いことに、ちょうど、その朝出発する団体があって、その日の昼過ぎには入れるというのであった。

隊を外で待たせ、アンドリューとウゾーニとストランドの三人で、ホテルのフロントで手続きする。そのときに、黒い外套に身を包んだ一団が現れた。

今朝出て行くという団体である。
服装で体型や携帯品（武器）を隠しているが、厳つい大男ばかりだ。
その中で背は高いが、唯一肩幅の広くない男がいた。しかし、情報として把握できるものは、それだけ。鬚を蓄えていることが辛うじてわかるだけで、顔は頭巾で秘匿されていた。
その男は、アンドリューが「ウゾーニ、おい、ウゾーニ」と呼ぶ声を聞いて、面をこちらに向ける。
黄土色の頭巾つきマントのパウルであった。

彼は憎々しげなまなざしでウゾーニをにらんだ。つかつかと歩み寄ると、

「貴様がウゾーニか。

小憎らしい、生意気な小僧め。貴様が何様だと言うのか。

偉そうに、何と自惚れた愚か者であることよ、智者ほどのおのれをわきまえ腰を低くするという道理を知らぬと見える、卑しき下衆な、蛆虫め。

卑賤な身に生まれおったくせに、おのれはさぞ賢いと思うておるのだろうな、お笑い草だ、あゝ、可笑しい、愚昧の輩よ、愚劣の極み、糞莫迦が！」

ウゾーニは最初、状況が理解できずに呆然としていたが、ようやく、パウ

ルに違いないと思い至り、眼光鋭くするも、何も言い返さず、考え込んでいる。

さすがに見兼ねてアンドリューが割って入ろうとするも、ウゾーニは止めた。ストランドも怒りで血相を変えている。

パウルはさらに興奮し、

「何も言えぬか、そうであろう、真理の前でおまえは何と愚かなことか、おまえのような奴はたとえ親を殺されても何もできまい、愚者、愚者よ、地を這う生き物よ。

生きる資格なし。

余の正論になすすべもあるまい。

しかも訊いて驚くな、余は竟に真義に達した。不陥落城に隠されたる匣の秘密を遂に解いた史上初めての人間である。恐れ入ったか、このクズが、貴様なぞ、泣きっ面がお似合いだ。

貴様のような下衆は、たとえ親を殺されても何もできない奴だ！　ざまあみやがれっ！」

パウルの一行が去ると、ウゾーニは肩をすくめ、

「自信がない奴は余裕がないものさ」

そう言っただけであった。

黒い壁だ。荘厳として厳粛である。

無表情に、まるで石畳を滑る霧のようにしずしずと迫っていた。夜の昏い旧市街。人の姿もない。酔っ払った浮浪者が隅の陰で酔いつぶれてしゃがみこんでいる。

路地は狭い谷間のようで、すべてが黒く塗り潰され、影さえ見えない。モ

アイ像が動いたらこんな感じだろうか。人ではない異様な、山奥の人跡未踏の地にある大磐のような威圧を湛えるそれは列をなして進む。

アンドリューは自分の部屋に午後十一時にバスタブとお湯とシャボンを運んで風呂の支度をしておくように言ったのに、一向に来ないので、大いに文句を言おうとフロントへ降りて行ったが、誰もいなかった。

「おかしいな。

おーい、誰かいないか」

しかし、応えはない。

シーンとしている。こういうことはありがちなことだ。しかし、彼はただならぬ雰囲気を感じた。『何かがおかしい』

その頃、ストランドは廊下をぶらぶらと歩き、さり気なく警戒していた。腰に剣を佩いている。

ジョニーが部屋から出て来た。

「どうした、ジョニー、おまえはこの時間は見張りじゃないはずだぞ」

「隊長、さっき窓の外を何かが過ぎったような気がして」

「窓の外を確認したか」
「しました。何もいないし、そもそも足がかりになるような縁とか庇（ひさし）はもちろんのこと、霧避け（霧避け庇）もありません。
自分もからだを出してみましたが、あれはムリです」
「そうか、非常階段から見てみてくれ。あ、その前に他の奴ら数名に声を掛けろ。
俺は下に降りて外から見る。そっちにも数名、来させろ」
「わかりました」

ガリア・コマータらは非番の連中もぞろぞろ出て来る。
「いよっ、戦か」
「うらあ」
そう言いながら剣をガチャガチャさせる。
ストランドは一階のフロントで、アンドリューと会った。ちょうどそのとき、外で飲んで帰って来たリュージュとボーノにもばったり会う。
「おい、何かおかしいんだ。
誰もいない。フロントだけじゃない。従業員が誰もいないんだ」

「他の客もいないように見える」
「そう言えば、ウゾーニは」
「ヤバいかも。行こう、早く」
「おい、あの悲鳴は何だ！」
階上の部屋と思われる方から、断末魔の絶叫が。
「畜生、こんなときに〝マリー〟がいないなんて！」
四人は駈け上がった。
さて、その少し前、ウゾーニはロウソクを灯し、ベッドに入って本を読ん

でいたが、カギをかけて閉めてあったはずのドアが静かに開く。ギギギ……

理解ができなかった。それにあまりにもそっと空いたので、暴漢や暗殺者が闖入したようには感じなかった。ただゾッとした。

「だ、誰だ」

上ずった声しか出ない。影を観じた。巨漢だ。生命のない冷厳。圧倒する。激しい恐怖を感じた。

そのときだ。

突然、窓ガラスが割れた。ロープをにぎった三人の男が飛び込んできた。

剣を抜き、襲い掛かってくる。奇襲だ。屋上からロープを下げて来たのだ。同時にドアからも侵入者が突入して来る。

「ぅわあ」

ウゾーニは慌ててベッドから転げ落ちる。見なければ！　明かりを。彼の叡知がそう叫んだ。マッチは、どこだ。マッチは！

「んぐわっ、あ、ああ！」

悲鳴を上げたのは、奇襲をかけた侵入者の方であった。

ウゾーニからは見えなかったが、最初に侵入した影のような巨漢が無慈悲

な腕で首を挟み込み、絞め上げたのだ。ボギッ、という音がする。在った、マッチが。

残った二人が「こなくそっ！」と言いつつ、反撃を試みるも、一人は拳で貫かれ、もう一人は頭をつかまれ、トマトのように潰された。マッチを擦る。影が今度は、ウゾーニに向かって迫るのを感じた。

マッチの火を差し向けて照らす。

埴輪であった。眼と口は空洞があるだけで、無表情な埴輪であった。

「おまえが不可侵領域ハイリッヒトウムの使いか、守護者の眷属か。ならば

貴様が僕を襲う理由はない。

僕はウゾーニ・イヴィ・リャド……」

彼は自分の正式な名を名乗った。

埴輪の巨漢は止まった。

アンドリューとストランドが駈けつけたとき、乱れた部屋でウゾーニはぼんやりベッドに坐っていた。八名の奇襲者の骸が無残に転がっている。

そのうち一人は白い髪に白い肌を濃紺のマントと臙脂のトーガに包む男

で、蛇のような金色の眼を恐怖で見開いたままであった。

ウゾーニらは誰も知らなかったが、アモール帝国の諜報部に属する殺し屋アシンの屍である。

アンドリューが驚き尋ねる。

「いったい、どうしたんだ。どういうことなんだ、ウゾーニ！」

彼は力なく笑って説明した。聴きながらも、リュージュは遺体の持ち物を検めた。何もない。

「プロだな」

そうつぶやいた。
説明を一頻り聴いた後、アンドリューは、
「しかし、不思議だな。ハイリッヒトゥムの〝守り〟の眷属なら、何で見逃したんだ？」
「僕に正当な権利があることを認めてくれたのさ」
「どういう意味だ？」
「そのうちわかるさ」
「ふ、まあ、いいや。薄々感じていたけど、あんたにもいろいろ裏があるよ

うだな。俺は雇われた仕事をするまでさ」

「ま、好きなように考えてくれ。空想は自由さ。アン・シャーリーのようにね」

「けっ、くだらね」

第23章　前夜

翌朝、ショコアの辺境に向かって出発する。丘陵地帯に小島のように小さな森がこんもりと点在する。渓流が時々現れ、剥きだしの尖った岩が脅かす。瀧のある場所で休憩した。妖精でも出て来そうな、メルヘンチックな場所だった。ジョニーが清流を汲む。

シフネがさっそく鍋を出してきた。リオンとレオンが龍馬の面倒を見る。リュージュが物憂げに薪を拾い、ボーノが岩の上に載って周囲の様子を見た。

「騎馬が二頭来る」

「どこの馬だ」

アンドリューが尋ねた。
「見たとおりを信じるならばクルアールだ。そして、一人は、〝マリー〟だ！」
「じゃ、迎えに行きます」
ストランドが龍馬を駈る。
アルペジアが寄越したのであった。
貴公子然とした高位の騎士が、
「陛下も近くまで来ています。どうぞ合流してください」
「うむ、いよいよだな」

「久しぶりだな、〝マリー〟」

今度はストランドの差し出した手をにぎった。微笑すらせず。

ウゾーニは満足げにうなずいた。

少女皇帝は広い谷間の草原に布陣していた。使いの後について草の海を横切ると、見えてくる、唐紅に金糸飾りの見たこともないような巨大な天幕が。

「凄いなあ」

龍馬の速度も早まった。

やがて野営の兵のテントの群れの中に入る。

野営の中央に来ると、クリムゾンの道があった。数多の槍兵の列が左右にいならぶ絨毯の道を通って天幕の正面に来る。

ウゾーニ、アンドリュー、ストランド、リュージュ、ボーノ、リオン、レオンがその順で列を作って案内される。

大きな天蓋附きの玄関から入ると、泥落としの間があり、履物の泥や砂や獣の毛を落とさせられた。

下級女官が素早く近寄り、豚毛のブラシで服の埃を落とし、香水を降り注ぐ。

「気持ちいいもんだ」

「喜ぶなよ、ウゾーニ、俺たちまるで掃き溜めから来た乞食扱いだぜ」

リュージュがそう言った。

謁見の間は、天幕の中央にあり、深い絨毯の敷き詰められた円形の広場だった。少女皇帝は玉座にあり、華美な衣装で金銀装飾を垂らし、素足で胡坐をかいていた。ウゾーニらはひざまずく。

あゝ、皇帝陛下、なぜですか、パスワードの謎を解いてみせようというのに、命の喪われる戦などするのか、……という苦情苦言をアルペジアへ

言えるはずもなかった。

「ご苦労だった、ウゾーニ。

送られてきた報告書はすべて読ませてもらった。やはり、我の推察に狂いはなかったな。今は完全なる勝利を確信している。

明日はいよいよシス湖を渉るぞ。今宵は宴を愉しみ、ゆっくりと休め。まことに苦労であった。汝の偉業を褒めて遣わそう」

大天幕内に用意された小部屋に案内される途中の通廊で、アンドリューはウゾーニに聞いた。

「驚いたな、いったい、いつの間に報告書を出していたんだ」
「随時さ。
初めの会見で色々取り決めてあったんだ。君には話さなかった。
何か問題があるか？」
「いや、別に。
構わない、当然さ。ただ驚いただけだ。
しかも皇帝の話じゃ、もう、ほとんど解決しちまったみたいじゃないか」
「そうだな。戦争さえなければ、この件はもう解決だ。なければな」

「解決したと言われてもなあ。

俺も、むろん、そうだが、ストランドだってリュージュだって、全然わかってないぜ。いつの間にわかったんだ」

「基本的に、僕が見ているものと、君らが見ているものは、同じだ（いや、そうでもないかな）。だから、同じ推理で、同じ結論に到達しなくちゃおかしいんだがな。

まあ、僕は天才で、君らは凡人だから差異があるのは仕方がないんだがね」

「腹立つが、何言われても言い返せないな。ふ。

いつかその推理の結果とやらは教えてもらえるんだろうな」

「僕は推理小説の探偵みたいにもったいぶるわけじゃないが、まだ話はできない。

まあ、待ちたまえ。そのうち、シャーロックばりに、皆の前で、謎の解明とやらをやらかすからね」

その夜、厳重な警戒の中、盛大なる宴が催された。

少女皇帝は祭壇のように飾られた階段状の台座の上の王座に坐り、次々と膳で運ばれる贅沢な料理を食し、ショウガやシナモンや土茯苓（ドブクリョウ）・檳榔（ビンロウ）・

御種人蔘（オタネニンジン）などのさまざまな生薬を混ぜた葡萄やオレンジの搾り汁を飲んだ。

キャビアやフォアグラやトリュフ、羊の炙り肉や鯛の蒸し焼きや軍鶏など貪る。ガリア・コマータの傭兵たちは銀の大皿に牛の炙り肉を山盛りに盛ってもらい、がつがつと食べた。

「うひゃあー、最高だ。この肉、超霜降の肉だぜ。香辛料をたっぷり振りかけようぜ」

「おい、おい、このでっかい炙り肉の塊もいいぜ。生焼けで、ジューシーだ」

「堪んねえ、いくらでも喰えるぜ、もう8ポンドくらい食べたな」

豪快な食べっぷり飲みっぷり。長髪を靡かせるガリア・コマータたちは背の高いも、痩せたのも、太ったのも、筋肉の山のように盛り上がったのもいるが、皆大いに食べて大いに呑む。

エールをバケツのような陶のジョッキで、どぼどぼと流し込むようにして喉へと流し込む。髭に雪でも降ったかのように、白い泡だらけになる。

喧噪を嫌うウゾーニは侍従長に辞す旨を伝え、将軍たちに丁重な挨拶し（そういうふうにしろとアンドリューに言われたのでそういうふうにしたに過ぎない）、早々に引き上げて自室でスコッチ片手にパイプをくわえて読

書をした。

スコッチは極上もので、勝利感とともに最高の心地を味わう。酒神とは、何と素晴らしい神だろう。ウゾーニはそう思った。古代人々は祭祀に於いて酒を飲み、神とともに喜んだ。

硬直した青白い顔の禁欲主義は古代にはなかった。

しかし、そんなことをしなくとも、古代が十分過酷だったからかもしれない。物事を単純に批判するのは科学的ではない。

事実は常に、一事に於いても多様で、なおかつ多くの他の事象と複雑に関

連し合っている。真実は常に、複雑系的で、複雑系的ではないというだけの理由で、それを誤謬と断じて構わないくらいだ。

午前一時くらいには出発の準備ががさがさと始まっていた。いや、実際には前の晩から徹夜で支度するものも数人はいた。

先発隊は午前四時には出発していた。

ウゾーニらは八時に出る。

やがてハイリッヒトゥムとの国境に来た。蒼く沈むようなシス湖である。

蛇頭岬が見えた。その（向かって）左側奥が蛇の関だ。

ハイリッヒトゥムの『渦巻きの通廊』の入口である蛇の関は南面し、湖を挟んで三つの帝国の国境に平等に接している。

正午にはクルアールの５万の兵がシス湖の前に隊列を整えた。将軍が進み出る。

「船を載せた台車を前に出せ」

「おおー」

ガラガラと音を立てて巨大な台車が動く。

「おお、あれは」

アンドリューが言った。

遠く見遣れば、アモール帝国領の国境にはアモール軍が続々と到着し始めている。その数およそ八万である。どちらの国も今のところどこの境界も犯してはいない。領土内であった。

しかし、一触即発の雰囲気である。

異様な緊張が漂っていた。

イスカンデル将軍は意に介さず号令する。

「船を下ろせ」

湖畔に広がった兵士たちは綱を解いた。牽いて来た台車から次々と船を下ろし、着水させる。

波もなく、気味悪いほどに静かな紺碧であった。

「大きな湖だなあ」

ウゾーニがつぶやく。眉の上に手を当てて翳りを作った。

湖の向こう側、ハイリッヒトゥムのウォール山は少し霞んでいて、はっきりと見渡せない。少し緊張する。

「さあ、行くぞ」

少女皇帝は命じた。数千隻の船が櫂を漕ぐ。日が昇るにつれ、霞が消えていった。

顧みれば、アモール帝国軍も次々と船を湖面に降ろしている。

櫂を大きく廻し、ガレー船は進んで行った。

岬は不気味で怪異な姿を現す。

「おお」

誰かが小さく叫んだ。

蛇頭岬はやや湾曲しながらも、東西に五km、南北に一kmの半島で、先端が

菱形に膨らみ、峰のように高さを増した後に、鼻先にかけて低くなって長く伸びていた。

その菱形部分に、眼窩のような洞や、膨らんだ鼻腔のような隆起があったため、蛇と鰐の中間のような面構えに見えるのであった。

また、巨龍のゾンビのようでもある。

「まさに蛇の鼻先のようだな」

アンドリューが言った。

ストランドも、

「あの南北に向いた二つの大きな洞穴、眼窩のようじゃないか！」

ウゾーニは、

「ふふ。というよりは……」

謎めいた微笑を泛べる。

その蛇の左側の方（蛇の方から見れば右肩）に当たる部分の湖畔に舟を乗り上げた。

「上陸始め！」

第24章　不可侵領域ハイリッヒトゥム

「アモール帝国軍は急いでない」
大きく口髭を広げたイスカンデル将軍が言うと、辮髪のテムジン将軍も、
「いかにも。上陸を妨害するかとも思ったが」
しかしパルメニデ将軍は苦々しい顔をして、
「つまり、急がなくとも妨害できると言うことではないかな」

「何と。それはどういうことか」
そこへ槍のように長い皇杖を持ったアルペジアが現れ、
「愚か者ども、あれを見よ」
「おおっ」
湖畔の岩陰から十数名の軍人が現れた。
「気をつけろ！」
そう叫ぶのは皆クルアールの兵だった。先遣隊の一部だ。
テムジンが叫ぶ。

「あ、クトゥーゾク将軍もいるぞ」
「何たること。奇襲は失敗か」
アルペジアが唇を噛む。
クトゥーゾク将軍はなおも叫び続け、
「来るなーっ、気をつけるんだ」
「いったい、何を」
将軍たちが訝しがっていると、リュージュが指さし、
「おい、あれを見ろ！」

「あゝ」

応龍が上空に現れる。しかも数匹ではない。数百匹だ。空を蔽い尽くすかのようにも見えた。

「空飛ぶ龍だ、あんなものがこの世にいたのか」

「凄い数が」

「あれでは、山を登った連中はたまったもんじゃなかったな」

「ううぬぬっ、ネイロめ、小癪なことを」

アルペジアが皇杖を拳で強くにぎり、土を打つ。

「投石機と弩を」

それを受けて、

「投石機と弩だ！　急げ！　早くしろ！　燃える黒水を塗って炎を点せ！　石は小さい方にしろ、高く飛ばすんだ！」

テムジン将軍がそう呶鳴った。

数百の投石機と、数千の弩が湖畔にたちまち揃えられた。よく訓練された精鋭たちである。次々と発射した。

応龍が怯むと、大岩の陰からクトゥーゾク将軍と兵士たちが出て来て、こ

ちらへ駈け寄って来た。
「残念ながら、内側の第一砦及び第二砦は奪われてしまいました。不覚です。申し訳ございません」
老将軍クトゥーゾクが少女皇帝アルペジアに報告する。
「基本的な状況は報告書のとおりです」
「報告書だと？　我はそんなもの見てないぞ！」
「おお、何と！
では、きっと使者が途中で捕まり捕虜にされたに違いない。あゝ、かわい

そうなことをした、ペーチャ！

アンドレイ、彼の家族へ手紙を書いておいてくれ」

アルペジアはいらいらし始めた。

「そんなことはどうでもよい。

状況を説明しろ」

クトゥーゾクは疲れた眼で語る。

「まず、驚いたことに外側の砦には、各帝国の兵がいたのですが、内側の砦にいるはずの神兵〝守り〟はおらず、どこも廃墟のように空でした。

不気味なほど静寂だったのです。
理由はわからぬが、これは好機だと考えることにいたしました。
我らは呆気に取られながらも、これぞまさに幸い、次々と砦の占拠に取りかかろうとしたのです。
しかし」
ここで息を呑んだ。
「ご覧のとおりです。
数百の応龍が空から攻撃してきました。

剥きだしの尖った岩だらけで、隠れる場所もない、しかも狭い尾根で、左右は断崖絶壁、そんなところで空襲される心地を想像してください。それでも勇ましく応戦しました。投石機と弩を使って。

ともかく援軍が来るまで持ちこたえようと。しかし、今となれば、それは来るはずもないものでした。

敵は空挺部隊を擁していて、数千の兵が応龍から降下してきて、尾根で我々と闘いました。低空飛行する応龍の攻撃には、なすすべもなく、一時に多くの兵が突き落とされました。

しかも敵は数でこちらに勝っていたのです。我々は壊滅を覚悟しました。ところが、不思議なことに応龍は何かを怖れて逃げてしまい、我らは全滅を免れたのです。奇跡のようで、今でも理由がわかりませんが。

しかし、敵に砦の外側と内側の五分の四以上を奪われています。

我々がようやく我らの帝国が守備する外側砦の領域に入ったくらいのタイミングで奇襲されましたからです。

アモールの守備領域の砦を落とすこともかなわず、我が領域を維持することすら難しい中、その先のシューニャ帝国領域は悉く占拠されましたので、

さような結果となってしまったのです。

なお、不陥落城に就いては、こちらもアモール帝国軍も手をつけていません」

「敵の占拠する砦が八割ということか。

入り口を敵に抑えられて、渦巻きの中にはいることすらかなわぬな」

少女皇帝は冷たく言い放った。

蛇の関の正面に行き、よく中を覗き込むと、確かに内側の第一と第二の砦にはアモール帝国の旗が翻っている。

「とは言え、うかつには入れぬが、攻撃を受けるという意味ではアモールに占拠されようが、されまいが同じこと。

もともと不可侵領域の〝守り〟の攻撃を想定があったのだから」

だが、パルメニデ将軍が反対した。

「いや、いや、陛下、畏れながら、それは誤解です。

〝守り〟の上からの攻撃を受けないよう特殊部隊を尾根に上がらせて砦を攻撃させたのです。

従いまして、我が帝国軍は、上からの〝守り〟の攻撃がまったくないか、

もしくは少ない状況を想定していました。
今のまま突撃することはリスクが大きすぎます」
「でが、特殊部隊を使って第一と第二を攻城しよう」
特殊部隊隊長マグナムは言った。
アンドリューが〝マリー〟を連れて行けば千人力だと力説したが、外人は入れないと断られてしまい、ふてくされる。
傍らで聞いていたウゾーニは、女官パミュルの下で働く下級女官スジャに声を掛け、

「陛下にお話ししたいのですが」
「お待ちください。あなたが来たときは、どんなときでも取り次ぐように陛下から言われていますから」
かくして、しばらく待ってから御前へ引かれて、少女皇帝の足下にひざまずく。
「陛下、どうか、ウォール山にいる兵を皆、引き揚げさせたまえ」
「何だと！」
「応龍の怯えの理由が何となくわかったのです。これは恐ろしいことです。

どうか陛下、僕の言葉を信じてください」

皇帝アルペジアはしばらく考えていたが、

「下賤の者ならいざ知らず、おまえの進言ならば、考慮しないわけにはいくまい。

詳しく述べよ」

ウゾーニは言う。

「その役目こそ〝マリー〟がふさわしかと。超人的身体能力、岩だらけの狭い尾根であっても雪豹のように素早く移動して、知らせて回れるでしょう」

「では、我の玉璽を押した命令状をすぐに書記官に作らせよう」
「ありがとうございます」
さようになされた。
そうこうするうちにアモールの軍すべてが湖を渉り終え、湖畔に布陣する。
その中から、一騎の龍馬に跨る燦然たる騎士が寄って来た。
「やあ」
兜の蔽いを上げる。輝かしい美青年の顔が現れた。
「何と、ネイロ・カリグア！」

驚嘆する少女の眼は大きく睜かれる。

だが、驚きは一瞬で、その表情はすぐに輝いた。

彼女の双眸が燦めき、頬が微かに紅潮し、爛熟して完成度の高い古典ギリシア彫刻のような柔らかくも均整がとれて無駄のない少年のような少女のような肉体を愛でる。その碧眼を美々しい微笑みを高貴な鼻梁を繊細な眉を高雅なオーラを。

恍惚の状態に等しいも、自制によりそれを急遽冷まし、玲凛なる顔に戻った。

ネイロ・カリグアはそれを知るか知らぬかも定め難き奥深く豊饒なる捉えられない笑みを泛べ、

「久しぶりだな、アルペジア。君の皇位継承のとき以来だ」

アルペジアは近衛兵の持っていた槍を奪い取り、突きつけながら、

「うぬ、ネイロ・カリグア、何用だ、貴様、のうのうと我が前に現れるとは、どこまでも人を喰った与太者ぶり。

到底、皇帝の器ではない」

そんな乱暴を見ても、ネイロはあっけらかんとしている。

「一応断っておこうと思ってね。
ご覧のとおり入り口は我が軍が抑えている。少なくとも今はね。
君らは入れないが、朕らは入れる。
というわけで、お先に不陥落城を攻略するよ」
アルペジアは眉を顰め、
「パスワードの謎は解けたのか」
微笑み返すネイロ・カリグア。
「解けたよ。

あとは、嵌めれば正解かどうかわかる」
「しかし、皇帝の三つの徴がなければ、匣を冒さなくとも攻撃を受けるぞ」
「そのための軍だ」
アルペジアは黙った。
ネイロの去り際に、
「ネイロ・カリグア、皇帝はついて行かない方が良いぞ」
アモールの皇帝は愕いて振り向いた。
「意外なことを。

朕の死を望むと思っていたが」

アルペジアは眼を逸らし、何も言わずに背を向けた。今、建てられたばかりの天幕へ去った。

「ふ」

皇帝カリグアは鼻で笑う。

「言われずとも行かぬわ」

アモールの突撃隊は隊列を整え、蛇の関の近くに進んだ。

その様子をウゾーニは考え深いまなざしで見ていたが、

「あの皇帝なら、不陥落城までは行けるかもしれない。
いや、行けるだろう。
むろん、行ってからが問題だが。
哀れだな、悲惨なことになるが・・・・
さて、僕にしても最初は、どちらが出てくるか?が問題だったが、話を聞いてよくわかった。
とすれば、想定どおり、助けに来るべきは、鳥さんだ」
「おい、何言ってるんだか、全然わかんないぞ。

そりゃあ、どういう意味だ？」
アンドリューが尋ねたが、ウゾーニは、
「まだ秘密さ。すまないね。ふ」

第25章　ハイリッヒトゥムの守護神

「おお、あれは」

クルアール帝国軍の将兵たちがアモールの陣営から出て来た神獣を見て、驚きと感嘆の声を上げる。

翼のある虎、翔虎。大鷲の上半身と、獅子の鬣と四肢とを持つイグルクーガ。大鷹のからだに獅子の頭を持つ獅子面鳥。五色に輝く千年大孔雀。

それらが各々数十頭・数十羽いた。

ウゾーニは口惜しそうに微笑む。

「敵は応龍が怯えた理由を理解しているようだな」

「どういうことだ」

「そのうちわかるよ」
進軍は電撃のように始まった。
スピードこそが勝負と考えている。
「何という速さ。飛ぶぞ！」
さて、突撃隊の中にはパスワードを預かる黄土色の頭巾つきマントのパウルがいた。
「パウルだ、彼も行くのか」
ストランドが言った。

「おそらくパスワードを預かっているのだろう」
ウゾーニがそう言うと、リュージュが、
「彼には預かる資格があるのか。神の怒りに触れるのでは」
「見ていれば、わかるさ」
電光石火の突撃は功を奏する。渦巻き状の道をたちまち通過し、蛇尾山の麓に着き、大手門の傾斜を地に足を着けずに疾駆する。
もしも、内側の城砦から攻撃を仕掛けて来たときには頂上から奇襲をかけるようになっていた。

「敵が攻撃を仕掛ける前に、攻撃しておいた方がよいのではないか」
という主張もあったが、パウルが、
「敵の影が見えないのに、無駄に仕掛けることはない。
もしかしたら何もないかもしれない」
「バカな、ならば、なぜ、城砦があんなに聳えている」
「それは先入観だ。
城砦が攻撃を仕掛けてくる、と皆があたりまえのように言う。そう、歴代の皇帝たちが皇位継承のときに城砦が数多いならぶのを見ているから、当然、

侵入者はあの城砦から攻撃されるのであろうと思っている。

だが、よく考えてみろ。

あの『渦巻きの通廊』の中でどんな攻撃が行われたか、それを知っている者は誰もいないのだ。誰も生きて帰って来なかったのだから。

あの城砦から攻撃を受けるであろうと考えるのは、ただの憶測でしかない」

「何を根拠にそんなことを」

「実際、攻撃者がいないと報告を受けているではないか。

余は報告に基づいて、すなわち、事実に基づいて判断しているのだ」

「うっ」

さような議論があり、攻撃は相手の動きを見てから、迅速に行うと言うことになったのだ。

確かに、渦巻き状の奇岩山ウォールによる峡谷のような『渦巻きの通廊』は静寂そのものであった。

城砦は不気味に聳えている。

たちまち枯れ草が風に靡く蒼艸の原まで着き、蛇尾峰に屹立して天を衝く不陥落城を見上げた。

「さあ、進むぞ」

まずは峰を登る荒々しく尖った岩が迫る峻嶮な狭い隘路を往く。翔虎やイグルクーガ、獅子面鳥や千年大孔雀はさような険路ものともしなかった。まさに、翔ぶがごとくである。

いくつかの分岐や石の門があったが、

「さあ、こっちだ」

パウルは道を知る者として案内した。彼はパスワードの他にネイロ・カリグアから皇帝の御徴を預かっている。シューニャ皇帝の御徴も持っていた。

階段を上がり、大広間を抜け、玉座に鎮座する匣を目前にする。

「こ、これが……」

突撃部隊の騎士ローゼンが畏怖と畏敬の念で感嘆した。

「始めよう」

パウルは三つのパスワードを出す。

突如、天にも轟くようなもの凄い地鳴りが耳を劈いた。その直後、大地が大揺れに揺れる。凄まじい地震だった。騎士ですら悲鳴を上げる。未だかつて経験したことのない揺れに、立っていることさえもできず、振り飛ばされ

ないようしがみつくのが精いっぱいであった。

バルコニーにいた兵士が叫ぶ。

「見ろ、山が動いた！　山が動いている！」

信じがたい光景であった。遠く、シス湖にある頭蛇岬が持ち上がったのだ。赤口を開く。咆哮が大地を揺らす。同時にすべての山が、蛇のごとくに動いた。それは苔を背に生やす亀のように、鱗に大樹を生やし、城砦を載せて動く。

特に蛇尾山は横揺れが烈しかった。

「どういうことだ！　いったい、何だ、これは！」
ローゼンが叫ぶも、蒼白な顔のパウルが冷静を保とうと努め、辛うじて声にする。
「これが、正体だ。ようやくわかったぞ！　心配するな、パスワードがある！」
蛇頭岬が龍神の頭となって口を裂き開いて咆哮する。
クルアールの帝国軍もアモールの帝国軍も恐慌を来たし、絶叫する。凄まじい混乱が起こった。
「落ち着け、冷静に、退避するぞ」

イスカンデル将軍が叫ぶ。テムジン将軍が船に退避させる。パルメニデ将軍は少女皇帝を守護する。ガリア・コマータたちも、皇帝を囲み、龍に剣を向けた。

騎乗の猛者たちは口々に雄叫びする。

「さあ、勲を上げようぜ」

「おう、上等だぜ、あははっ、来やがれ」

「仕方ねえ、本気を出すか」

「おら、おまえらおっ死ぬなよ！」

見る見るうちに、龍神の頭が上空を覆う。首を伸ばして、不可侵領域の周辺にいるものすべてを取り囲もうとしていた。

伸びる分だけウォール山の渦の環の全体が縮まっていく。

龍神の腕が出て来た。左腕で蛇の関を塞ぐ。『渦巻きの通廊』には入れない。ふさがれたかたちとなった。

ウゾーニは鷹揚としていたが、遂に言った。

「そろそろ、何とかしないと、こちらも危ない」

その落ち着きを見て、アンドリューが、

「何か手立てがあるんだな、余裕かましてないで急いでくれよ！」
「あるなら、早く！　俺らも絶体絶命だ」
リュージュも言う。
ウゾーニはうなずき、
「さて、パルメニデ将軍、お願いしてあったものはご用意いただけましたか」
「おお、忘れていた。あそこに。おい、あれを引き連れて来い！」
兵卒に命ずる。
「何ですか、これは」

ストランドが素っ頓狂な声を上げた。
パルメニデ将軍が答えた。
「ヒクイドリと神鳥ガルーダとの間に生まれた猛炎禽という神鳥です。ガルーダのミニチュア版だと思ってもらえればよい」
ウゾーニが〝マリー〟に声を掛けた。
「行こう。正しいパスワードを持って」
アンドリューとストランド、リュージュとボーノが名乗りを挙げ、
「待て、待て、俺たちも行くぜ」

だが、ウゾーニは手を振り、「しかし、命の保証はないぞ」
「いえ、お供します」とストランドが凛と言い、
「こんな冒険を放っておけるか」とは血気盛んなボーノ。
リュージュがニヒルな微苦笑で、「そもそも、頼りないからな、ウゾーニ」
と言えば、
「そうさ、仕方ないから行ってやるんだぜ」とアンドリュー。
ウゾーニは笑っただけだった。六人は猛炎禽に飛び乗り、
「うわあああ」

飛び立つや否や、猛炎禽は凄まじいスピードで飛翔する。
「ぅわっ、ぅわっ！　速っ！」
その頃、瓦解しそうなくらいに縦横に大きく揺れる不陥落城の中で、パウルは懸命に叫んでいた。
「おっ、落ち着け、落ち着くんだ、パスワードが嵌まれば、すべてが収まる」
「では、早く、早くしてくれ、ぅうわっ、早くしろっ！」
「うるさい、下郎、見ておれ」
パウルはパスワードを手に講釈する。

「これがアモールのパスワード、『楯を持った神鳥ガルーダ』だ。
そして、これが余が追究し、突き止めたクルアールのパスワード」
この期に及んでも、もったいぶって、いったん間を置き、
『楯を持つ神亀』だ！」
そして最後に、
「これが密かに入手したシューニャのパスワード。
この三つを所定の場所に嵌め込めば」
数式の四角い凹みに当て嵌めた。嵌めるべき正しい場所に。

しかし。
止まない。
「おい、どうしたんだ、全然変わんないじゃないか」
「焦るな、少し時間がかかるんだ、落ち着いて待て」
しかし揺れはますます激しくなるばかり。
バルコニーの兵たちが叫ぶ。
「おお、山が迫ってくる、山が！　あっ、あれはぁぁあああ！」
山は城砦やまばらな樹木を乗せたまま、巨大な龍神のうねる体になってお

り、巨大な鱗が燃え輝いている。、灼熱の溶岩のように。

「あ、熱い、熱い！」

「も、燃えてしまうぞ！」

さて、ウゾーニの乗った猛炎禽はそんな大龍神をも怖れずに飛び続けていた。

しかし、乗っている人間の方は（〝マリー〟とリュージュを除き）蒼白であった。

「あ、危ない」「やばいぞ！」「うわっ！」「ぅわあああああ！」「きゃああ、き

やああ！」

襲って来る岳のように巨大な龍神の左腕や、左脚の攻撃をもかわし、スリリングに翔る。そうこうするうち、

「おい、あれじゃないか、不陥落城」

「あゝ、違いない」

「よし、行くぞ！」

「よっしゃあ、突っ込めぇぇ！」

急降下、弾丸のごとくバルコニーに追突、

「ああ、ぶ、ぶつかる！」

と思いきや、寸前で止まり、無事に着地する。気を取り直し、

「さあて、答合わせだ！」

ウゾーニが嬉々として進むも、あっちこっちに振られてしまい、真っ直ぐには歩けない。

ようやく玉座の近くに来ると、

「パウル！」

「ウゾーニ！」

なぜ、ここに来られたのか、とパウルが問おうとするも、激烈な揺れに倒れてしまう。

「おまえの謎解きは大外れだ。見ていろよ」

二つのパスワードを嵌める。

式の頭から、一番目と二番目までだ。

三つ目は出さない。

「三つ目のパスワードは？」

「おい、ウゾーニ、もったいぶるな、早くしろ！」
リュージュとアンドリューが叫ぶも、ウゾーニは、
「ふ。そんなものは要らない」
「ええ！」
しかし、驚くべきことが起こった。
「あゝ、匣が！」
「本当だ、匣が開いていく！」
「信じられない！」

匣は完全に開く。

大いなる光が現れ、ウゾーニを荘厳した。

「おお」

ウゾーニの何が変わったわけでもないのに、何かが変わり、彼の姿が燦然とした聖なる者のように見えた。

驚愕したパウルが口をパクパクしている。なぜ、それが起こるのか、まったくわからない。

だが、パウル以外の者らは、それ以上にまったく光輝の意味を理解せず、

「え、何だ？　ウ、ウゾーニ？」
そのアンドリューの問いに答えず、ウゾーニは、
「さ、落ち着けよ。すでに揺れは弱まっている」
確かにそうだった。
「本当だ。何でだ」
リュージュが狐につままれたような顔。
アモール帝国の突撃隊騎士ローゼンも非難がましく、
「パウル殿、これは、いったい」

パウルが悔しさで、どす黒い凄まじい表情をするも、それを嘲るようにウゾーニは、

「わかったか、パウル。

だから、シューニャのパスワードはプレーンなのさ。何も彫られていない。何もない。なくてもいいんだ。

おまえは根底から間違っていた」

しかし、ローゼンが反論し、

「しかし、龍はあのままだぞ」

「わかってる。
黙って見てろ、端武者が」
ウゾーニがそう罵った直後だ。
大地を震撼させる甲高い怪鳥音とともに、空が暗くなった。
「何だ、あれは」
もの凄い突風が起こる。
「ぷふわぁああ、途方もない風だ」
「真っ暗になったぞ！」

「いや、白くきらきら輝くところがある」
「うわ、飛ばされる！」
「大き過ぎて何だかわからん」
「何だ、凄まじいこの叫びは、高音が天空をバリバリと牽き裂き、低音が島を大きく上下させている！」
「あ、もしや翼じゃないのか」
誰もが驚愕し、慄き、恐怖に駈られた。
ウゾーニがさらに嘲笑する。

「愚か者ども。あれは聖肯の真髄、白い神禽ガルーダさ。破壊の赤い龍神の天敵だ」

第26章　太極の究竟　Last Stand

湖畔に布陣していたアモール帝国軍の将兵たちもクルアール帝国軍の将兵たちも、この空前絶後の出来事に魂魄を奪われんばかりに愕いていた。

「あわわわわ」

歴戦の猛者たちも腰を抜かしていた。

誰もがこのあまりにも巨大な、宇宙全体を覆ってしまうかのようなスペクタクルに、畏怖を覚えた。

山脈のような龍神と天を蓋う神禽ガルーダが相対し、咆哮し、闘い、絡み合い、渦のように巴となって、太極図をなす。

それは燃えるように光り輝き、大いなる燦然となってまるで銀河系のようであった。

突如、収縮し、点になったかと思う間もなく、光の大爆発となって、すべてが真っ白な光燦となり、何もかもが見えなくなる。「こりゃあ、ビッグバンだ！」

だが、それはあっと言う間に終わり、すべてが静寂に、元のとおりの山や湖になった。静謐な大自然に帰った。

「ぷぁー、ぶったまげたあ」

「おい、俺は生きているか？」

「俺たち助かったのか？」

「き、奇蹟だ。信じられん。何という、壮大な出来事だ」

さすがの皇帝ネイロ・カリグアも敬虔の念に打たれた。

『渦巻きの通廊』に入ったすべての者たちが三々五々、戻って来る。皆、魂を奪われた者のように放心状態であった。ウゾーニすらも茫然とした表情である。

無理もない。彼らは未曽有の神劇を目撃したのだ。

だが、アルペジアを前に理性を取り戻した。皇帝の下に近づく。ひざまずく。

少女皇帝は崇敬と満面の笑みでウゾーニを迎え、高らかに、大いにねぎらった。

「膝を屈せずともよい。立ち上がれ、英雄よ。

よくやった。真に見事であった。未曽有のことだ。ウゾーニ、おまえは歴史に名を遺したのだ。空前の快挙だ」

一度、言葉を切ってから、

「そして、首尾よくいったか」

ウゾーニは力なく微笑んだ。
「はい、陛下」
アルペジアはそれを聞くと会釈した。
「わかった。もはや、汝はただ者ではない。我もなすべき当然の礼を尽くそう」
思い出したようにウゾーニが、
「あ、陛下」
「もう、陛下と呼ばずともよい」

「すみません。あの、パスワードをお返ししておきます。
それから、これも」
パスワードの後に渡したもの、それはクルアール皇帝の御徴だった。
「少し仲間と話してきます」
「どうぞ」
アルペジアから離れた。
アンドリューらの列に戻ると、歩きながらウゾーニは説明した。まるで自分自身に言っているようで、誰かが聞いているのかどうかもわからないまま

で話をしている。傍には、アンドリューもリュージュもボーノもいたが。〝マリー〟だけが平然としている。

「これが起こったことは今までない。僕らが史上初めて見たのだ」

彼が言う『これ』とは、神禽ガルーダが現れて、緋の龍神と壮大な太極図を作り、その極まりの果てに〝自然〟へと還って逝くことを指す。

「なぜならば、正常にパスワードがそろっていれば、龍神が破壊を始めることはないからだ。

侵入者などが来た場合には、正常に異常事態ならば、龍神が侵入者を滅ぼして終わりだった。

侵入者が正確なパスワードを嵌めたことはない。

今日のような、一度、侵入者と認識された者が正常な手続きを取ったことは、かつてなかったのだ。侵入者と認識された者が正常な手続きを取ったときにしか今日のような現象は現れない。

それゆえ、これが今まで起こったことはない」

アルペジアの軍から大いなる歓声が上がる。

少女皇帝すら喜悦を隠せない。

「当初の目的とは変わってしまったが、我はこれに大いに満足している。この意外な顛末、思いもかけぬ、予想外の結末に、我自身、愕くとともに、為すべきを成し遂げた深い歓喜の中に浸っている。

この静謐は、いかなる快楽にも勝ろう」

クルアールの将兵たちの歓呼は止まらない。

そのとき、敗軍の将のように悪びれた顔で微笑みながら、アモール皇帝が再び龍馬に乗って来た。

クルアールの軍が静まり返る。
アルペジアはじっとりと青年の整った容貌と理知と懶惰の相貌と美しい肉体とを愛でて今もまた恍惚を覚える。
悪戯っぽいまなざしでアルペジアを見つめ、ネイロは黄金の髪を振り、耀きに靡かせて言う、
「ふ。
朕の負けだ。
アルペジア、あなたの勝利だ。輝かしい栄光は今日、あなたの上にある。

神のご加護のあらんことを。

そして、ウゾーニ、朕は感嘆した、汝の稀有な天才に。

では、諸君諸卿、さらばだ。また会おう」

そう言って、颯爽と龍馬の向きを変え、マントを翻しつつ、引き返した。

その背を見送りながら、クルアール全軍から再び大歓声が起こる。

さっきの歓声よりさらに盛大であった。

「万歳、万歳、勝利！　勝利！」

「永遠、不滅、無限の栄光！」

「我が帝国に永久に神の祝福あれ」
パルメニデ将軍が声を張り上げる。
「もういい、いつまで騒いでおる。撤収だ。準備しろ」
片づけが始まった。
ウゾーニがアルペジアにまた近づく、
「ネイロ・カリグアに話したいことがある」
「わかった。
ふ、感動的に別れたところだが、連絡しよう」

暫時後、両軍は再び、湖を渉った。

大帝国軍は国境を跨ぎ、今回の不可侵領域侵入後、初めてシューニャ帝国の領土を侵犯した。

なぜシューニャ帝国内に入るのか、アンドリューの問いに、ウゾーニは、

「フロンク王国に行く。

皇帝領に行くのだ。帝都モスゴー入り、アルカト宮殿で、片づけなければならない問題がある」

「諸王が赦さないだろう。これは晰らかな領土侵犯だ」

「アルペジアは言っていた。
『諸王が抵抗すれば、相対しよう』とね。今の状況で王らは帝国に逆らえない」
「そりゃあ、そうだなあ」
アンドリューは可笑しそうに、そう言った。
馬車に揺られながら、ウゾーニはアンドリューにさまざまな話をする。
「結局、アルペジアが僕を雇った目的も、ネイロ・カリグアがパウルを雇った目的も、同じだったんだな」

「そりゃあ、そうだろ」

「いや、君が考えているような意味じゃないよ、アンドリュー」

そう言って、微笑する。その後、スコッチを舐めながら、ネイロ・カリグア宛てに手紙を書いた。疲れて居眠りをする。

国境を越えた。少し入ったところで、数多の兵が待ち伏せしていた。諸王の兵であった。連合軍だ。十二王の使者十二名が進み出て来た。

「我らがシューニャ皇帝の地位は、我らがシューニャ帝国の民のものである。十二王と執政官の連合により、我が帝国領を犯したクルアール帝国の皇帝

アルペジア殿に告げる。

速やかに、シューニャ帝国のパスワードを渡すことを、当然の権利として、神の御名と、正義と、法の下に要求する。これは正当な権利であって、何人も異を唱えることはできない。逆らう者は天地の理に逆らい、神の意に背くものだ。

賢慮を求む」

そのように強く主張した。

殺戮の女神と言われた処女皇帝アルペジアが進み出た。諸王の使者らはそ

の光り輝くような神々しい威厳に圧され、思わず退く。

女帝は言った、

「よろしい。ただし、条件がある。

ハイリッヒトゥムの守護者の攻撃を怖れ、慄いて、こんなところに身を隠し、現場にいなかった諸王らは一定の説明が必要だろう。

この謎に就いては、我が雇ったアランのウゾーニが深く関わっている。このことについては、我らクルアール帝国から説明しよう。

明日、帝国の宮殿に集合せよ。皆、正装で、王冠をして集まるように。

よいか？」

第27章　解明、そして・・・

かつての皇帝の迎賓室に王たちは不機嫌さを、目一杯、顔に出して集まっていた。それでも、指示どおり燦然たる王位の象徴である王冠をかぶり、金と毛皮と宝石とで、盛りに盛った正装をしている。

執政官も青貂の襟のついた長い貫頭衣を身にまとい、来ていた。
その中に、全身を白いマントで覆い、白い頭巾で顔を隠した謎の男が一人、参加していた。
少女皇帝アルペジアは睥睨するかのように諸王ら全体を見廻し、蔑み切った表情でうなずくと、後ろを向いて手招きをする。
奥の部屋から現れたウゾーニに対し、諸王らは牙を剥く獣のように、不満げな唸り声を上げた。
「あいつは、ウゾーニだ。そうに違いない。聞いていた容貌どおりだ。あん

な下賤な者が高貴なる我らに語りかけるというのか！」

「けしからん、侮辱だ」

「身分の低い者が我ら王を前に、何を語る資格があるのか」

さような雑言も意に介さず、彼は語り始める。

「まずは、匣のロックを解除するパスワードのことについて、話をしましょう。

これは二百五十年に亘る謎と言われたが、実に簡単でした。

パスワードを数式に当て嵌めているということがわかれば、後はどれか一

つのパスワードがわかれば、解は求められる。

ちなみに数式は足し算でした。仮にパスワードをA、B、Cとすれば、A＋B＝Cという具合です。

さらに、パスワードは浮彫のされた板でしたが、その形状が数式の値として使われるのではなく、その浮彫の示す意味が数式の値として使われているということがわかったので、それから先は実に簡単でした。

もし形状が数式の値として使われていたのなら、形状のバリエーションというものは、無限にありますから、この世に同じ形のものは二つとないので、

答を見つけることはできなかったでしょう。

解を求めようとすれば、ブドウやネイロの持つパスワードそのものを元に、原型に忠実にコピーするしかない。

つまり、思考するだけで答を見出すことは不可能ということです。言葉や概念では示せないということ。

しかし、意味が数式の値ならば、思考だけで答を特定しやすく、原本がなくても、同じものを作ることすら可能です。

一つのパスワードは、…これは言えませんが、否定と破壊を表す神獣（三

叉戟に絡む龍）でありました。

図柄が攻撃、破壊、否定、無みすることを表すことは、この島の文化史的解釈からすれば、自明なことなので、そう断言します。

つまり、これと足し算ができる概念で数式を成立させればよいわけでした」

アンドリューはこの場で諸王や執政官や他の者らにパスワードのヒントを教えてしまうのはまずいのではないかと思った。

しかし、何か考えがあるに違いないと思い直し、口を挟むのを止めた。ウゾーニがそんなミスを犯すはずがないからだ。

実際、そのとおりであった。後でわかった。
にわかに、顎鬚のフロンク王ヘンルイが疑義を抱いて、
「なぜ概念と言い切れるのか。
神獣に何かを足すということは考えられないのか？
たとえば、龍に牛を足して、麒麟になるような」
ウゾーニは憐れみの表情を浮かべた。
「それはあり得ますね。
しかし歴史上、一度だけパスワードが奪われた事件を知りませんか。

それはまさに三つのパスワードを持ち寄って、新しい皇帝へ皇権を神授するその日でありました。

だが、シューニャ帝国の皇帝ルイードはすぐに鍛冶屋に命じて一時間足らずで同じものを作り、それで対応した。

神統記に拠れば、『イヴリャド島神は、シューニャの皇帝に於いては、特にパスワードの複製を赦すと告げた』という記録があります。

又或るとき、三帝会談で、シューニャ皇帝フランセは、クルアール皇帝ダイオレスから『パスワードの複製などそうたやすく造れるものではない』と

言われたとき、驚いて、『そんな莫迦なことがあるものか』と笑ったと言う。

これらのことは、シューニャ帝国のパスワードが『無空・零』であることを示しています。考えれば大きなヒントでした。

これは知る人しか知らぬ事実ですが、エステ（東大陸）にイン＝イ・インディス帝国という国があり、そこでは零のことをシューニャと言うのです。

つまり、Cのパスワードは、〝零〟、ということ。何もない、ということでした。

何も彫られてない、ただの平らな鉄の板なのです。だから複製が簡単だっ

たのです。ただの板ですから。

いや、なくてさえもよかったのです。

皇帝たちは互いに相手の持つパスワードを知らないから、自分が持っているものと同じようなものなのだと理解している（可能性が）あります。

フランセが『パスワードの複製など簡単だ』と考えていたのも、彼が他の皇帝たちの持つパスワードも、自分が持っているものと同じようなものだと理解していたからこそではないでしょうか。

だから、Cに何も嵌めなくても、数式は成立し、ロックが解除できたので

す。僕は今回、これを試しました。

もう一つ補足しましょう。神はクロード王の精神に準じてパスワードを作りました。彼の精神とは何でしょう。

僕は『無私』だと思います。諸欲を制し、無の精神であることです。実際、王は後世の人々から『清浄なる善王』と賞讃されています。

ただし、確認のしようがないので推定ですが。

いずれにせよ、クロード王に準ずるということを考慮すれば、龍馬などという類の答はなじみません。

さあ、『A（破壊・否定・非）』＋『B』＝『C（無空・零）』だとすれば、もう答は出たも同然だ。

Aを無みする者、相殺するものは何か。

肯定であり、維持し、護るもの（楯）であり、神獣の天敵（龍を喰う鳥ガルーダ）である神獣です。

Bの神獣が皇帝を表すこともまた自明でした（註：鳥の意味するものは肯定である。翼は神の象徴で、正義と肯定と神聖を意味する。隹という文字は鳥の象形だが、神の使いを意味し、『推す』『惟（これ）』など、ポジティブな文字

を構成する）。

したがって、僕はBを（『楯を持つガルーダ』と）特定した。そして結果は、皆人の知るとおりです。

肯と非を足して零、何もないということ。

これは神がパスワードを通じて人間に示した神の哲理です」

ウゾーニは言葉を切って、息を吸う。

「さて、ここで近衛兵や騎士の方々にも入ってもらいましょう。第三者の耳目が必要だからです」

諸国の高い身分の軍人たちがぞろぞろ入って来た。ウゾーニは続ける。

「では、話をすすめましょう。

不陥落城ウロヴォスを攻めた者が誰も帰って来られないという謎がかつてあった。しかし、その理由は、今回の一連のことで明らかになりました。ウォール山が実は匣を守る巨大な龍であったからです。

あの渦巻き状の渦をなす山は、龍のとぐろだったのだ。湖に面した半島を蛇頭と言い、ウロヴォス城の建つ峰を蛇尾と言うのも、これでわかる。

考えてもみよ、あんな龍の懐深くはいってしまい、動く絶壁に囲まれ、袋

のネズミになってしまえば、いったい、どうやって生きて帰って来られようか。帰って来られるはずがない。

ただし、対処法は簡単だ。

ロックを正しく解除すればよい。

そうすれば、ガルーダが海からやって来て、太極をなし、あたかも、数式のように零になり、完全態となって、自然の中に入ってしまう。

自然になってしまうのだ。独り神のようなものだ。

ただの普通に現実があるばかりになってしまう。ただの現実になる。

相殺したかのような見掛けを作るのです」

ウゾーニは再び言葉を切った。

「少なくとも、楯を持った神亀などでは絶対にないことは明らかです」

嘲るようなまなざしを黄土色の頭巾のパウルに向けた。

パウルは憤りと恥辱とで、蒼白になってぶるぶる震える。

「貴様、騙したな、この卑怯者が、卑劣漢が！　浅ましい卑賤な生まれの者の考えとは、そういうものか！」

激しい罵りにウゾーニは平然とし、

「あなたにそのように非難する資格はありません。僕の話を最後まで聞いても、同じセリフが言えるかどうか、確かめてみろ」

パウルは唖然とし、ウゾーニの内に秘められた烈しい憤激に気圧される。赤い頬に髯を蓄えてよく肥えた巨漢のイトーリア国王ボージアがきょとんとし、

「騙したとは、どういうことだ？　パウルは何か騙されたのか？」

怒りで震えるも、パウルは何も言えない。おのれが策にかかって騙されたなどとは。

ウゾーニは愉快そうに微笑んでから咳払いして威を正し、
「さて。ここからは非常に重要な問題に入ります。
誰が皇帝を殺したか。
誰が皇太子を殺したか」
「皇帝を殺しただと？
皇太子様はともかく、皇帝は病死では」
バルアモンのゴア王が立ち上がって憤り訴える。
「一般にはそうなっています。

ですから、ここから先は、まったくの僕の推論になります。なぜなら、証拠がないからです。したがって、証明する方法は一つしかありません」

「どういうことだ」

「まずは僕の空想から話し始めましょう。皇帝ブドゥ・イクは毒を盛られました」

執政官ロマヌフが立ち上がった。

「そんなはずはない。

もし、それがする機会があるとすれば、お茶や食事を運ぶときしかない。

それをするのは、家令のシューしかないが、彼はそのようなことのできる男ではない」

ウゾーニは冷ややかな眼でにらんだだけだった。続ける、

「皇帝は繊細な方でした。

美しい花を愛でました。指で優しくつまみ、顔の近くに寄せ、匂いを嗅ぐのが常でした。そう聞きました。

皇帝の部屋には、聞くところによれば、薔薇やユリや菊など、二百四十本の花が寄せられていましたそうです。

十二王が選りすぐりの華を二十ずつ見舞いに持参したのでしょう。

さらに念の入ったことに、それぞれ薬草を煎じた茶を入れた金の器を献上しました。

むろん、これは形式的なもので、そんなにたくさん飲めるわけがありません。神に捧げる供物と同じです。捧げることに意味があるのです。

十二王が同時に入ったから、十二王の一人が悪心を抱き、茶に毒を盛ったり、花に毒を塗ったりするわけがないという人がいるかもしれません。

誰の茶を手にし、誰の花を顔に近寄せるか、わからないからです。

しかし、もし十二王すべてが弑殺者だとしたら、どうでしょう」

オランディのフィンセント王が、

「さようなことはあり得ぬ。

自慢できることではないが、我々は反目し合い、常に相手方の権力を奪う機会を狙い合っていた」

「そのとおりです。

あるいは、偶然に十二人の王が『暗殺しようぞ』と同時に言ったのか。そんなことはあり得ないでしょう。

では、やはり誰かが言い出したのか。しかし、『皆でやろう』などと言い出せる王はいないでしょう。そんなことは考えられない。

たとえ、十二王すべてが皇帝を暗殺したいと腹の中で考えていたとしても、それを口には出せない。身を滅ぼすだけだ。

王たちはそんな重大なことを打ち明けられるような仲じゃない、信用できない。

打ち明けられた方だって、これ幸いと、ライバルを破滅させて蹴散らすために、執政官に密告するでしょう。

だが、もし執政官が全体のコンダクターになったらどうでしょうか。たとえば、こうです、

『皇帝陛下はすっかり弱気になられて死を望んでおられる。高貴なる諸王の手で葬るのが、義理というものではあるまいか。

どうして余人の手に任せられようか。それこそ不敬というもの。神授の王権を持つ者の手によらずば、皇帝の昇天に相応しからず。

これは王でなくてはならない。

王でない者がなせば、ただの弑殺である。（つまり、今回のことは弑逆で

はない、という弁護）

王なればこその聖なる務め。

幸い、献上の花と、献上のお茶を捧げ奉るタイミングであれば、今こそ』

十二ずつあれば、どの花が、どの茶が皇帝を死に至らしめたかわからない。

自分の捧げたものではない可能性が十二分の十一だからだ。罪の意識は薄らぐ。

むろん、執政官の言葉を信じたわけではない。

これ幸いと便乗しただけだ。

従前のままでは、絶対に皇帝にはなれない。だが、騒乱が起これば、覇者になれるかもしれない」

「愚かしい妄想だ。たとえ、空想であっても聞くのも不愉快だ。貴様をこの後、八つ裂きにしようと、諸王は皆、考えておるぞ、今」

ウゾーニは動ずることなく、不敵に微笑んだ。

「どうぞ、ご勝手に。この話を聞き終わった後になっても、僕を八つ裂きにできるものならね。

さて、もう少しだけ空想につき合っていただきましょう。

普通なら、王様たちは、そのとき、こう言わなければならなかったはずです。

『しかし、執政官よ、皇帝の後継者をまだうかがっておらんぞ。それをうかがわずして天に帰られても、我ら途方に暮れる。

いや、最悪の場合、乱世になるぞ。

もし仮に、死が皇帝の望みだとしても、跡継ぎを聞かずしては、はいそうですか、というわけにいかん。

陛下がどうしてもということであったとしても、せめて、お世継ぎのご指

名を聞かずばなるまい』

とね。

しかし、言わなかった。

これは不自然なことです。まるで乱世を望んでいたかのようです。むしろ、跡継ぎなんて、聞きたくなかったかのようです。

恐らくはそうなのでしょう。ずばりそうとは言わないでしょうが、本心では。

もし、そのことを誰かに咎められたら、あゝ、気が動転して失念しておっ

たわ、おお、何たることか、肝心のことを聴き忘れておった、とか何とか、言うつもりだったのでしょう」

ゴア王が立ち上がった。他にも立ち上がりそうな勢いの王が数名。

「何たる無礼。

貴様、今殺してやろうぞ」

しかし、少女皇帝アルペジアがぐっと前に一歩進み出ると、諸王はもはや何も言えなくなる。

「さて、次はユーネスです。

彼はさらわれた。恐らく殺されただろう、ということになっている。

しかし、よく考えるとそんな根拠はどこにもない。

僕は執政官が彼の死を断定したのがあまりにも早過ぎると思っていた人間の内の一人です。多くの人間が疑義を感じている。

それに靴だ」

「靴？」

「皇太子の靴が片方だけ残されていた。

確かに、さらわれたときに起こりそうな事態です。

しかし、もしなかったらどうでしょう。彼は従者とともにどこかへ去ったと考える人も少なからず出るでしょう。

確実に何か事件に巻き込まれたと思わせるために靴を置いて行ったとも考えられないでしょうか。

むろん、妄想に域を出ませんが。

だが、もし誘拐が狂言で、皇太子が生きていたとしたらどうでしょう。

正統な後継者がパスワードも持って、たとえば、この騒動の後に、突如現われたとしたら、どうなるでしょうか。

諸国の王はユーネスが皇帝であることを認め、服従せざるを得ない。
しかも内乱のため、諸国王の力は弱体化している。
これが皇太子の最初からの計画であったとしたら、どうでしょう。
すなわち、病気がちな弱い皇帝を排し、諸国の王を弱らせ、再び皇帝の強権を復活させる、という計画であったとしたら」
「な、何と、我らは騙さ……」
「おや、おや。今、何とおっしゃいました？
騙されたと？　どういうことでしょうか」

「い、いや、何でもない。言いがかりじゃ！
わしゃ、何も言うとらんぞ」
「結構です。いずれ、わかりますから。
さて、そう考えたとき、執政官の動きも理解できます。
皇太子と執政官が帝国のために手を組んで、小芝居を打ったとしたら、皇帝暗殺を唆したことの意味もわかります。
パスワードが皇太子とともに消え、皇帝が薨去し、諸王が争う状況が作り出されたのも納得がいきます」

「しかし、そうだとしたら皇太子はどこにいるのか」

誰もが沈黙し、ウゾーニは彼らを黙って見渡す。

「どなたもお考えはないようですね。

さて、ここで不思議な人物に思い至ります。

最近までは、論文だけが有名で、本人の確認がまったくされていなかったのに、急に最近になって露出の多くなった人物です。

まるで世を偽るために、実体のない学者を準備しておき、失踪と同時に選手交替と言わんばかりに世に〝交替して〟現れて来た人物が」

「パウルか！」

誰かがそう声を上げた。

パウルが烈火のごとく憤怒の叫びを上げる。

「もう我慢ならん。

黙って聞いていれば、図に乗りおって、下衆の卑しい妄想の数々、いずれも空虚で下らぬ空想ばかり、あまっさえ、高貴な身分の者らを嘲笑する、卑怯卑劣千万。糞尿以下の下卑畜生めが！」

ウゾーニは冷たく横目で一瞥し、

「ありがとう、パウル。

君自らが自己証明をしてくれて手間が省けた。

つまり、アモールの皇帝ネイロ・カリグアが彼を雇ったかのように見えるのは、実はパスワードの調査のためではないのです。

皇帝は皇太子だと知っています。というか、二人は初めから密約を結んでこの芝居を演じていたのです。彼らの意図は明白でしょう。

アモールと（強化された）シューニャが同盟して、クルアールを圧し、島の中で優位に立とうと企んだのです。

むろん、すべて空想ですが」

「ぬおお、くそーっ！」

騙されたと知った諸王らが歯ぎしりし、パウルをにらむ。

パウルは蒼白になってっ憤激に震えるも、ただウゾーニを眼光で射抜こうかとするがごとし。その歯の隙間から、洩らすように、

「お、おのれ…、貴様には何の関係もないこと……、余計なことに口出ししおって…」

ウゾーニもまたもや漲る憤りのまなざしでパウルを凝視し返し、再び相手

をたじろがせる。

「さて、最後にモリゾンです。モルグルの森の番人です。あなた方はお忘れだとは思いますが。彼は冤罪でした。

モリゾンに対する讒言をしていた人物は黄土色の頭巾つきマントをしていました。ちょうど、パウルがしているようなものと同じです。偶然かもしれませんが、あのわざとらしい血塗れのハンカチのことも思い合わせてください。

もし、皇太子が生きていて、皇位継承に絡む何かを企んでいたとすれば、彼しか持ち得ないあのハンカチを、あんなところに、これ見よがしに留めていたことに、彼が何ら関与していないという可能性は、かなり低いのではないでしょうか。

しかし、その動機は何でしょうか。

モリゾンが罪なくして処刑された理由は二つあります。

一つは、彼が森を去る皇太子ユーネスの姿を見てしまったことです。もう一つは」

ウゾーニはまつ毛で翳し、まなざしを落とす。
「クロード王の伝説はよくご存じでしょう。
神は彼にこう言いました。
『そち自身が帝となって繁栄することは赦さん。
そちは最も卑しい身分に堕ちる。それでよいか』
以来、クロードの子孫は卑しい身分で生き続けました」
「ま、まさか」
「モリゾンはクロードの子孫でした。皇帝家に後継のない場合は、皇位を継

ぐ者とされたクロードの子孫です」
「バカな、なぜそんなことがわかる」
「わかるのです」
ウゾーニは決然とした表情でパウルを見る。
「僕の姓はクロですが、本当は、それは姓ではなく、又クロでもなく、一つの称号であり、氏であり、クロードと言います」
誰もが息を呑んだ。パウルの顔は死人のようであった。
「すなわち、僕はモリゾンの息子であり、クロードの十二代目である子孫、

父を殺された者だからです。

だから、わかる」

驚愕が稲妻のように走った。アルペジアだけが満足そうに微笑む。

ウゾーニは畳み掛けるように激しく言う、もう憤りは止められない。

「ユーネスはモリゾンが子孫であることを知っていた。

この一族が皇位を奪う野心を抱かないとも限らない、だから禍根を断ったのです。無実の罪で。

罪があるはずがありません。あろうものか！　失踪したはずの皇太子が、

現にここに、生きてここにいるのですから！　おゝ、パウル！　パウル！　パウル！　貴様のことだ、ユーネス！

僕が下衆の輩だと？

人殺し！　おまえのような奴がよくもおめおめと、今ここにいて、そうやって生きていられるものだな。

人の親を殺しておきながら、あまっさえ、自らの親すらも殺しておきながら、よくも散々罵詈雑言してくれたな。

僕が親を殺されても、何もできない奴だって？　さあ、それが本当はどう

か今、見てみろ！

ユーネス！　裏切り者！　悪魔！　大逆罪人！　人殺し！　親殺し！　神の怒りを知れ！」

恐れ震えていたが、皇太子は狂人のように必死で叫んだ、

「バカな、すべてでたらめだ、空想だ。証拠がない！」

「そのとおり。

でも、確かめる方法はある。これを見よ」

衣を剥がす。

匣であった。

「これが何だかわからないであろう。教える。これが皇権を神授する匣だ。伝承を正しく憶えているか。

神は言った、

『ただ匣の前に立つだけであっても、皇位簒奪をなそうとする者ならば、生存権以外のすべての権利を奪われるであろう』

証拠がなくとも、神が明かしてくれる！」

恐怖に駈られ、諸王たちが口々に叫ぶ、

「おお、そんな莫迦な！」
「迷信だ、あり得ない」
「王権も喪うということか！」
「そんなことどうやってわかるか、怯えるな。奴を殺せ」
ウゾーニは冷たく言い放った。
「なぜ僕が王冠をして来いと言ったかまだわかりませんか」
金属の砕ける音。
「ああ！」

「あ、ひゃあ！」

十二王の頭上の王冠が次々と割れて床に落ちた。ユーネスの持つパスワードが割れて落ちる。からんと虚しく響いた。

権力者は浅ましくうろたえる。

「バカな、バカな、者ども奴を殺せ」

諸王らが叫ぶも、近衛兵は誰も動かなかった。

フロンク王の近衛隊長が進み出て行った。彼は名をダルクといった。

「あなたはもはや王ではない。神は命だけは奪わぬと約束された。しかし、

我々はそのような約束はしていない。
いつまでもここに醜い姿を晒すならば、民族の恥を我らは切り捨てるのみ」
アルペジアも一歩進み出る。
「それから、もうひとつ言っておこう。
不陥落城で匣を開けたとき、ウゾーニはパスワードとともに我が帝国の御徴を持っていた。
パウル、いや、ユーネス、貴様はシューニャの御徴と、アモールの御徴を持っていたはずだな」

ユーネスは答えなかったが、その表情が雄弁に語っていた。アルペジアが言葉を続ける。

「つまり、皇位継承の正式な手続きが可能であった。その場にいた者は見たであろう、我らがそうであったように、匣の光がウゾーニを包んだのを」

「あ！」

ユーネスは突如、不陥落城で匣の光輝がウゾーニを荘厳したことを思い出す。その意味を今、完全に理解した。アルペジアが言う、

「そうだ。わかったか。ここにいるのは、ただのユブロ大学の研究者ウゾーニではない。

正統な血統の下に生まれ、正当な手続きを経て、今日からシューニャ皇帝となった、ウゾーニだ。

よく承知せよ」

その言葉は雷撃のようであった。すべての将校や兵士が撃たれたように驚愕の眼でウゾーニを見た。

伝説の王の末裔が遂に皇位を継承したのだ。

進み出たのはフロンクの兵ばかりではなかった。諸国の将校が剣を抜いた。

「我らがシューニャ皇帝陛下に楯突く者は悉く成敗する」

「う、ぅうわー」

執政官も王たちも、つまずき転び倒れながら逃げた。姿を消す。それは滑稽なほどであった。

パウルが残っていた。もはや、彼は幽霊のようである。

突然、彼は、はっ、と何かに気がついた。途端に、双眸に生命の炎が甦る。

ウゾーニに尋ねた。

「なぜその匣を持って来ることができたのか。
どうして持って来られるのだ！　いや、持って来られるわけはない」
「パスワードを持つべき者らがそろえば、静かに渦巻く通路に入り、匣を持ち出すこともやぶさかではない。
僕らは昨日、またあの場所に戻ったんだ」
ユーネスは疑念の眼でさらに言う、
「戻った、だと？
だが！　だが、しかし！　持つべき正当な、そして正統なる者たちがいな

ければできないはずではないか。
いや、そうだ！
パスワードが三つあるだけでは、開けることはできても、運ぶことはできない。
まさか…狂言なのか？　騙したのか」
ウゾーニはにんまり笑った。
「いいや」
そして奥に立っていた、白い頭巾に白いマントの謎の男を指さす。

その者は頭巾を払いのけて、美しい金髪を靡かせる。
「やあ、ユーネス、遊びは終わりだ」
そのときのユーネスの表情こそ喩え難いものであった。啞然、愕然、恐怖、疑惑、悲歎、絶望、憤り、すべたがないまぜであった。
「ネイロ・カリグア！
おお、アモールの皇帝よ！
なぜだ！　なぜ、貴殿が！　なぜ、今、ここに！　あゝ、何てことだ、貴様、アルペジアに寝返ったのか！

こ、この、裏切り者めっ！」

可笑しそうに睥睨し、アモール皇帝は、

「ユーネス、聖なる朕を謀（たばか）った貴様に、さように言われるいわれはない。ふ。

すべて執政官の所業と言うていたのは、（まあ、まったく何もかもを信じていたわけではなかったが）朕を騙したことにはならぬのか。

すべて嘘偽りであったとはな。見下げ果てた者よ。高貴な血筋に相応しからぬ下郎の所為。

汝に友などいない。
貴様などと同盟してアルペジアを斃すなど朕の穢れでしかない。
ふふ、まあよいわ。貴様のコメディを堪能させてもらったよ。贅に飽いていたので助かった。
礼を言おう」
元皇太子は廃人のようになって、力なく、へなへなと坐り込んだ。ぼんやりと悪魔に魂を売り渡したことを思い出していた。
ウゾーニは神に誓うべく剣を抜く。

「さあ、衆よ、ここに見よ。

第十一代皇帝ブドゥ・イクを弑逆した罪、すなわち自らの実の親を殺した尊属殺しの罪、及びクロード王の末裔である我が父モリゾンを冤罪で処刑へと追い込んだ虐殺の罪、畢竟のところ、すべての道徳に反した大叛逆の罪によって、シューニャ帝国皇太子ユーネス・イクに対し、法と正義の下、シューニャ帝国第十二代皇帝ウゾーニ・イヴィ・リャド・クロードが宣告する。

永劫の罪科。

死！」

そして、諸国の近衛兵をに向かって命ず。

「連れて行け！」

「は！」

帝国の衛兵たちは一斉に身を引き締めて屹立、姿勢を整え、敬礼すると、厳粛なる面持ちで使命を果たすべく、魂の抜けたユーネスを囲み、抱えるように運んだ。その罪人はもはや魂の抜殻であった。

すべてが終わったのである。

ウゾーニの当初からの野望は完全に果たせた。

彼はアンドリューを振り向き、にっこりと、しかし少し寂しげに微笑む。

「チェック・メイト。

僕の勝ちだ。…完全にね」

Epilogue

王権を喪った十二人の男たちはそれぞれ国に向かった。どうにか行き着くことはできたが、待ち構えていた民衆につかまり、嬲られ、屠られ、屍を晒

された。私利私欲のために多くの人を苦しめ死に至らしめた彼らの悪政は、すべての領民から憎まれていたのだ。

王の家族はどこの国でも、ほとんどが赦され、平民となって暮らすこととなった。

執政官は狂人となって、街の人の残飯をもらいながら、数年は生き延びた。或る寒い冬の日、ローディン国の辺境地、ダングラール村の路上で斃れていたところを村人に拾われ、介護されたが、その夜、こと切れた。

ウゾーニは諸国を直轄する。島内の三帝国の中で、唯一、封建制度に拠ら

ぬ帝国の皇帝となった。

善政を布き、安寧を計り、商業を発展させ、農林水産業を奨励する。ユブロ大学には大いに補助金を与え、学問の隆盛に貢献した。

ある日、アンドリューはウゾーニに語った。ちなみに、彼は外国人ではあったが、皇帝ウゾーニの強い推挙で、外務大臣に任命されていた。

「今頃になって、ふと、あんたの言葉の意味がわかったんだ」

「何だ？」

「アルペジアがあんたを雇った目的も、ネイロ・カリグアがパウルを雇った

目的も、同じだって言ってただろ？　あんたの言おうとしていた意味がやっとわかったのさ。

「ほんとに、今頃、だな」

「あんた、そして、パウル、いや、ユーネスに、皇位継承権があることに奴らは気がついていたんだ」

「そのようだね。

ネイロがユーネスを知るのは不思議ではないが、アルペジアは何で僕のことがわかったのか、それは未だにわかっていないけどね」

「ともかくもそれを知って、アルペジアはあんたを、ネイロはユーネスを援助して謎を解明させようとした。

こいつはいい考えだ。一石二鳥だからな。

謎が解ければ、皇権が三帝揃わずとも神授されるようになるから、皇帝にしたい奴を皇帝にできる。

たとえば、アルペジアがあんたを皇帝にするとか、ね（ま、あんたの自力で、あんたは結果的にはなったけど）。

または、ネイロ・カリグアがパウルを皇帝にして、自分の意のまゝに操る

とか、ね。

皇帝になった暁には、皇帝にしてもらった方は借りができる（恩顧の念を抱く）から、そこにつけ込んで、優位な立場で同盟を結ぶことができる。

つまり、シューニャとクルアールの同盟か、または、シューニャとアモールの同盟か、どっちかができるってわけだ。

シューニャとクルアールの同盟が成った場合には、アルペジアがネイロ・カリグアを制覇して島を統一することできるし、シューニャとアモールの同盟が成った場合には、ネイロ・カリグアがアルペジアを制覇して島を統一す

ることができる。

よく考えたものさ。

あいつら、ガキのくせに凄いぜ。しかも、同じことを同じ時期に思いつくなんて」

ウゾーニは力なく笑い、

「想う者同士はいつしか心が通い合うのだろうな。

アンドリュー、君の言うことは、だいたい合ってるが、二つの点で微妙に違う。

アルペジアは必ずしも僕でなくともよかったんだ。誰かを言うことを聞きそうな奴をシューニャ皇帝にしようとしていただけなんだ。

一番手近で、手っ取り早いのが、僕だったというわけさ。

彼女の近くにいる人間の中では、一番正統な皇位継承権のある人間だし、謎の調査もできるし、何よりも事情をよく承知しているし。

ただし、残念ながら、僕は彼女の言うことを聞く奴にはならなかった、天才過ぎるからな。

アルペジアもある時期から諦めていた感じだ。あまりこだわってなかった

よ。

それよりもこのまま復讐劇を演じさせた方がおもしろそうだと思ったんだろうな」

「なるほど。

で、もう一つは何だ？」

「あの皇帝たちは領土的・国家的に相手を制覇しようとしてたんじゃない。表面上は、領土的・国家的に制覇するように装っていたけどね」

アンドリューが諸手を上げて笑った。

「畜生！　やられた！　気がつかなかったぜ。
何だい、俺たちは若いお姉ちゃんとお兄ちゃんの色事につき合わされてたのか！
だが、そう言われて今、色々と思い返してみれば、そう思えることが多々あるな。そうだ！
ある、ある、思い当たる節が！
何てこったい！」
「それでも兵士や民衆は死ぬんだ」

「あゝ、本当にそうだな」

そんなふうに理不尽な悲劇も気に留めず、アンドリューは軽々平然とうなずいたが、ウゾーニの憂鬱な表情を見て、

「おい、おい、あんたが気に病むことじゃないぜ。世の常さ、仕方ないじゃないか」

微苦笑しながら、

「いや、そうじゃないんだ。悩んでいるんだ」

「何を？　いや、あんたでも悩むのか、ウゾーニ」

そんな戯言を気にも留めず、想い詰めた面持ちで、
「あゝ、ユーネスのことだ」
アンドリューはわざと眼を丸くし、口笛を吹くように唇を丸くしてから、
「いつ処刑するんだ」
眼を逸らし、言う、
「恩赦を与えようと思う」
眉を顰め、
「奴も元は皇族だったんだ。それを望むかな。

まあ、今は廃人のようになっているらしいが」

歎息し、

「罪があるのは彼ばかりじゃない。そういう矛盾を感じて、迷うんだ。アルペジアやネイロ・カリグアだって罪人じゃないのか、世の正義から言えば。

それに、恨みを晴らすのは、死者のためなのか、自分の思いのためなのか。自分でもよくわからず、悩んでいるんだ」

眼を瞑り、肩をすくめ、

「そんな問いの答は誰にもわかるはずがないさ、永遠にな。それに、いろんなケースもあることだし。

パスワードより遙かに難解だぜ」

ウゾーニは力なく微笑む。何も応えない。

ふ、とアンドリューは鼻で笑った。

「あんたもいつの間にか、ウゾーニらしくなくなっちまったな。もっと横柄だったぜ、ウゾーニって野郎は。

まあ、俺には助けられない。考えて決めればいいさ」

「そうだな。ありがとう」
「じゃあな」
立ち去ろうとする外務大臣の後姿を見ながら言った、
「僕には、友だちがいてよかったよ」

歌

人は何もできない
何も遂げられない
何もかも無意味だから
それは絶望ではない
それは自由の歌

何もする必要はない
何も残さなくていい
意味は造り物だから
何の甲斐もない
それは覚醒のことば

当たりはない
ハズレもない

答えはない
その都度移り変わるから
それは風の戯れ

何もない
ないという煩わしさにも
縁がない
すでに全ては満たされている

それは静謐の歌

完